して船中の滯在を愉快に感せしめしに慣れしかば、今やゼネラルウエルダー號に移乘せしに當りて、甚だ飽き足らざる心地したりき。これ此老船には鼠多く又臭氣船室に滿ち、剩へ臺灣島を過ぎりて日本に至るの間、支那海の風浪大に荒かりしによるなり。此汽船は後、北獨逸ロイド會社の船籍より省かれ、英國に賣られて改造の後再び進水せられしが、千八百九十八年獨逸皇帝がゼエルザレムに旅行し給ひし時の伴隨者は、フーゴースタンゲン商會の斡旋によりて御用船となり、同地迄の御用を命ぜられし所謂御寺舟なる彼のミッドナイッサン（船の名）を深く心に銘記して忘るゝこと無からん。偖余等が乘りたる船に同乘の人々中最も興趣多き同伴者は先づ獨逸の知名なる建築家にして樞密顧問官たるエンデ君なり。君は此度日本政府の大なる建築を管理する爲め遙々招聘され、錫蘭島より余等の道連れとなりたり、（同君は現今伯林の高等美術學校の校長の職を奉じ居れり）。次は建築顧問官ホイグト氏及ステグミュルラル君等にして、香港迄の旅路は余等殊に愉快を覺えしが茲に互に別れを告げざるを得ざるに至れり。そは前に揭げし諸氏は余等と異りオーダル號にて上海に直航されたる故なり。余等一行はトリエスト港出立の際はふさ〳〵しき厚き毛皮の冬衣を着して上船せしが土地の氣候の變り行くに從ひて其服裝を變じ遂に輕く薄き白の夏衣を着くる迄に至りしが、こゝより又日本迄は更に緯度の高くなり行くにつれ、再び冬着を取出しつゝ凡そ一年中に要する衣服は皆此航海中に用ひざるを得ざるの有樣にて、斯くも多くの荷物を携ふるは、妻子を伴ふ遠路の旅客をして一層の困難を感せしめたり。

かくして「ゲネラル、ウエルダル」號は千八百八十七年四月廿九日の曉横濱港に入津せしが、其前日よりしてことさら航程を緩うし夜明けし後に入港せんことを準備したり。横濱は海岸一體平坦にして、其景色は香港の美に比すべきには非ざれど、一帶の丘陵上に廣々と庭園を構へたる莊屋の連立せるを見、又稍低き市街には多くの商店櫛比して廣袤甚だ廣きに亘れるを望み觀たり。時に外務省の青木君の部下に在りて同省の重き位置を占めたるジャストムンド君（同君は余の亡父の舊知にして、且其人の父も亦亡父の友人なりき）及びロバルトモール君（フランクホルト選出の聯邦會議員）先づ甲板に來りたり。兩氏は余等を迎へん爲め既に數日前より横濱に在りて余等の到著を待ち居たりしと、猶甲板上には總理大臣兼宮內大臣伊藤伯爵の代理たる長崎式部官も來られ、余等を歡迎して大に上陸の便を謀られしが、余等が一行は既に前にも言ひたる如く甚だ多人數なるのみならず、之に從ひて亦荷物も多きにまして家具をも携へしかば、其上陸の容易ならざりしは勿論にして殊に茲に附言し置くべきは、斯く家具迄を携へたるは全く余等の誤りなりき。何となれば余等の住居に當てられたる家屋には（猶後に至りて詳說すべし）既に十分に家具を飾り付けられ、猶必要を感ずることあらば、横濱市內に於て自由に歐洲風なる家具を購求し得べく、殊に藤細工の如きは實に土地に有り餘れる程なればなり。余等は上陸の後、前の兩君と共に埠頭に人車を馳せしが、歎

賞すべき風景の中に高燥なる土地を選びて歐洲風なる家屋相連り、而も萊園青々として波光瀲連たるは誠に賞すべき景勝の地なり。

かくて後汽車に乘じ、約一時間にして東京に著し、かねて宮内省より差し向けられし黑塗の馬車にて長崎式部官と共に鹿鳴館に入れり。此館は外務省の管理に屬し、外來の國賓を止宿せしむる處にして其空氣の新鮮なる、其裝飾の優美なる、實に稀に見る處にして、余等は玆に宿して余等の住居の準備の完成するを待ちたり。猶他日聞く所によれば、かくも趣味に富める裝飾中、幾分は友人ヘルムート氏の盡力によりて宮中より出し品々なりきと。余は到著後、日ならずして公使官通譯官フヨン、ツアンダー氏の案内により、獨國公使館を訪ひホルレーベン公使に面謁して、伯林よりもたらせ來りし公書其他の書類を傳呈し、玆に余が初回の訪問を果したり。

日本に於ける獨逸の勢力

抑もホルレーベン公使は千八百六十年紀、ハイデルベルヒの大學々生たりし頃、ヴアンダーレン組の有名なる副長として、余は既に一面の識ありしが、千八百八十七年彼は日本國に於ける最も有力なる外國の代表者なりき。同公使の愛嬌と才智とは大に日本人の人望を博し、又獨斷專制の擧動をなすが如き愚を爲さゞる彼の見識は、啻に日本政府の信用を得しのみならず、殊に困難なりと稱せらるゝ獨逸人の同情を博し得たり。されば日本の政治家は事の大小となく彼と協議せんが爲めに日々來訪するもの多く、彼の壯麗なる永田町公使館門前、日本貴紳の車馬の跡を絕つこと甚だ稀に獨逸國の外交上及學問上の勢力は同公使が誘導の下に著しく發達したり。横濱、神戸、長崎等に於ける日本在住の獨逸國商人は、既に日本の開港及外人の居留許可以來（千八百六十年の半より同七十年紀の始めに亙り）外國移住民中の有數なるものにして、其勤勉寛容廉正等の諸德は、大に他國人の尊敬を來たし、又其生活の質素淳朴なるは、各自の資產の富饒を致し獨逸國の商品と之に附帶せる航海業とは大に發達して、正に最大の勢力を有せる英國と競爭するに足るに至らしめぬ、獨國の商船旗は東方亞細亞の通商國の海岸到る處其影を認めざるはなし、就中優良なる總領事ツアツペ氏は横濱在住の獨逸國人の爲め大に其力を致して之が發達を謀りたり。又將に組織さる可き獨逸艦隊は東方亞細亞に繫留港を得べく現に横濱港には洪大美麗なる病院艦碇泊して、該時の司令官は精神家を以て、名ある海軍々醫ドクトル、クレツフエル氏なりき。

されど獨逸の勢力が日本の政治上若くは大學の組織及軍隊の組織に及ぼせるは前者に比して甚だ遲く、其最も早く顯出せるは醫師及博物學者にして、そは彼の有名なる和蘭の軍醫エスフラン、シーボルトに由來せるなり。シーボルトは當時の和蘭の通商地と定められし長崎の出島に上陸し、其有名なる著述によりて日本の開國に著大なる效力を致したり。

千八百七十一年始めて歐洲の醫術を日本に紹介せんとし、永く同國に根底を有せる漢法醫に對して戰を挑み、數年間之と健鬪せるは、普國の軍醫正ドクトル、ミユルレル氏にして、今日現に流行の醫師たる宮中顧問官ドクトル、ベルツ氏は、ウエルテンベルクより、又大學教授ドクトル、スクリバ氏はヘツセンより東京大學に招聘せられ、共に醫科大學の組織發達を謀り、又他の模範たるべき醫學校を設立するに盡力せるも、皆ミユルレル氏に因緣して此結果を生じたるなり。而してベルツ、スクリバ兩氏の性格は飽く迄獨人の眞面目を存し、其講義の言語も獨逸語を以てして今に至る迄曾て之を變更せざるなり。フヲン、ブラント氏によりて創設されたる獨亞會は、學術的なる會合にて、一の倶樂部を有し、時々講義を聞き又有名なる雜誌をも發兌するものなるが、世人をして東亞の諸國特に日本の事情に通せしめ、日本の眞相を知らしむるに於て效あること甚だ大なり。

又海軍の出身者にして第二代目の獨逸公使たりしフヲン、アイゼンデツヒエル氏は其巧妙なる外交手腕と愛嬌多き交際術とによりて、益〻日本人をして、獨逸の事物に同情を表するに至らしめしが、其繼續者たりし第三代の獨逸公使オットー、デーンホーフ伯は始めて獨逸婦人社會の風習を日本の宮中に誘き入らしめたる人にして、伯の夫人ミラ、デーンホーフは實に其衝に當れる人なり、(夫人の生家はシユリツペンバツハ伯爵なり)。

抑も歐洲に於て獨逸國の如きものゝ存在するを知りしは是れ日本人に取りては誠に珍らしき發見なるべし。獨逸國は學問技術に於て世界の頂點に達し、治國の術又神妙を極め、皇室の制度一の異議を入るゝ可きなく、軍隊の組織は世界に雄を稱し、然も其國體は嚴格なる王國の態度を備へたり。而して日本人の殊に奇異とし訝る所は、此獨逸大帝國が大小數多の聯邦に分れて互に存立しつゝ、更に一大範圍の結合を保ちて國勢の擴張を謀り得るの一事なるべし。此國體は恰も日本舊時の封建制度に似たる處ありて、獨國が其聯邦制度を連續しつゝ、能く世界の各國に對峙し、敢て不利を感せざるは最も日本人の驚く所ならむ。何となれば彼等は封建制度より立憲國に發達せしめんことは甚だ困難なることにして、唯佛國革命の如き過激なる方法によりて而已之を爲し得べき者と信じて居たればなり。然るに今日本人に對して實に稀なる類例を示せるは日本人の大に喜ぶ所にして、斯く獨國の事情を會得せしむるに最も力を效せるは數回伯林駐在の公使となり、永く獨國の宮廷に出入せる青木公使にして、其伯林に滯在せること二十年の久しきに亙り、此大都に住せる重なる政治家、美術家、學者等に熱心に交際し、能く獨逸文學の趣味を解し、特に獨語に精通して獨逸國民の思想感情を傳へしこと誠に獨人に異ならず。又同公使がエリザベツト、フヲン、ラードと稱せるポンメル國の貴女との結婚は、更に交際の範圍を擴めて北方獨逸の諸家に數多の知己を得、伯林に於ける日本公使館は日本國有の高尚なる美術の精神と優美なる獨逸の風習とを調和するの府となりき。

斯くして獨逸國の日本に知らるゝに至り、之に次いで又墺利亞國も日本に知られしが、此間に立

ち始終日本に在りて大に媒介の働きを爲したるはアレキサンドルシーボルト男及ヘンリー、シーボルト男（共に前にも記せる研究家ピー、エフ、フヨン、シーボルト氏の子息）にして、兩人共に能く日本の言語に通じ、兼ねて巨細の事情に明なりしかば、兩人が東京に在りて經歷せる種々なる位置に於て日本流の見解と歐人風なる見解の調和媒介者となり、其勢力各種の方面に及びたり。アレキサンドル、フヨン、シーボルトは公使館附顧問として外務省に出仕し、現今は歐州に在りて無任所日本辯理公使の職を帶び、其弟ヘンリー、フヨン、シーボルトは日本駐在の墺國公使館書記官兼代理公使たり。

偖、日本政府は愈獨逸國の文明に倣はんとし、同國の學者、官吏及士官を以て其教師となすに適せるものと信じ、米國、英國、佛國人は單に之が參考者たらしめんとするに至りたり。茲に於て政府は伯林駐在の青木公使に命じ、或は東京駐在の獨逸公使に托して公務に從事すべき種々なる方面の人々を招聘せんとせり。余の日本に在りし頃は、大學を始め諸官省及び參謀本部に數多の獨逸人聘用せられしが、今僅に其一部を擧げんに、先づ法律及經濟の方面に於て獨逸人のアレキサンドルフヨン、シーボルト。モツセ。ルードルフ。マエツト。フヨン、ジヤスムンドの諸氏は各省或は內閣に講師なり。ラートゲン、ミヒヤエリス兩デルブリユツクス。ハウスクネヒト。ワイブレヒト。エツゲルトの諸氏は大學に在り、又ドクトル、グラスマンは山林事務に從事し、警務顧問ホエーンは警察事務の改革に盡力し、彼の有名なるメツケル少佐及び其繼續者たるフヨン、ブランケンブルグ、フヨン、ウイルデンブルツフ、グルートシユライベル男等は、何れも普國參謀本部附の士官にして、日本軍隊組織の基礎を定め、其成果は日清戰爭の時に際して世界の驚歎を喚起したりしが、こは實に前に揭げし人々の功勞を證するものには非ざりしか。更に又獨逸建築學の方面に於ても（猶後章に再說すべけれど）數年間の久しき日本の首府に其代表者を止めき。

軍隊に於ける佛蘭西國の勢力は既に將軍時代に於て拿破列翁三世と交通せる頃より、日本に其根據を固めしが、今や漸く衰へ來りたり。又コデイフヒカートル、ボアソナードの盡力によりて拿破列翁式法典に則り、全く佛國流に編制せられたる法律も漸く變じ來りて獨逸風なる法律の見解行はれ、遂にヘルマン、ロツスレル教授は主としてバイエルン國の憲法に倣ひて日本の憲法を起案せしが、これ實は模範を獨逸國に取りしなり。

次に又國家の發達に關する實務的方面に在りて、特に日本に取りて最も大切なりし一事は當時猶未だ全く獨逸人の感化を受けざりし艦隊にして、此時迄佛國の海軍造船技師ベルタンは軍艦建造の設計をなすの任に當り、一年十萬フランの俸給を取りて數年間之に從事し、又英國の艦長（カピテン）インゲレスは航海事務實地練習の指導者として傭聘され居たりしに、後此形勢漸く變じて獨逸國にも亦造船の注文を爲すに至り、而して當時既に獨逸人の手に於て爲し得たることはクルツプ砲を以て艦船を

武裝せしむる事にして、そはクルップ會社の技術代表者たりし中佐イルグネル氏の才幹と、アルトネーアの商人イルリースの斡旋によりてなりしものなり。獨逸の官吏、士官及び學者等が總べて斯く勵精し熱心に勉强せる中心は、實にホルレーベン公使にして、同館には所要ある人々常に出入し職務上困難なる事柄は玆に種々なる助言と助力とを得、又往々日本人に對しての誤解より來れる不快なる問題を公使の勢力によりて無事に解決し、或は又獨逸の勢力の擴張を喜ばざる諸外國の代表者の壓力をも同公使によりて防衞せり。而して獨逸公使が能く斯かる地位に立つを得るは、固よりヰルヘルム帝第一世と有爲なる宰相とが歐洲に於て外交上に振へる手腕とに因るものにして、他國の者若し此輩に傚はんとせば如何に大なる力を費すも此極東に其效果を見ん事極めて困難なるべし。

余は今斯く云へばとて、決して我公使の效勞を小なりとするに非ざるなり。何となれば我が公使は頗る能く其本邦の事情を紹介し、且つ巧に之を八方に利用する才幹を備へたればなり。然も能く獨逸國の價値ある所以を知了し、之を以て自國改良の模範とするの必要を感じたるの明は、恐れ多くも日本の　兩陛下と賢明なる政治家の效に歸すべく、若し此前提なからんには、如何なる智略政策も亦施すの地非ざるべし。斯る周圍の事情の下に余等は宮中顧問たるべき精纖の職に就きしは恰も五月の初旬(千八百八十七年明治二十年)に在りて此朝廷の御血統こそ既に二千五百年來の長きに亙り天地と共に極りなくして、御儀式(ごぎしき)千代にかはらず搖がぬ御代、常磐かきはにいと芽出度宮廷なりけれ。

東　京

舊江戸は將軍が天下の政を執りたる政廳のありし處にして、其政廳を幕府と稱せしが、此幕府瓦解以來、東の都と云へる意にて東京と改稱し、舊帝都たりし京都と相對して日本東西の兩都なり。京都は又西の都と云へる意にて公には西京と稱すれども、普通に其名稱を用ふること稀なり。明治二十年の頃、東京は全然日本風なる市街にして、舊時より存する數多の記念碑は德川家將軍時代の繁盛なる昔を偲ばしめ、現今の帝國政府は單に舊政府より殘留せる宮殿と政廳を占むるに過ぎざるなり。

當時東京に於て吾人は歩々種々の偉蹟を見て、此江戸を首府に選定せる將軍家の有名なる祖先家康が、如何に政治的烱眼を有せしかを追懷し、又其後繼者が如何に有力に且如何に壯麗を努めるかを追想せり。偖て吾人若し日本の事情を會得せんとせば、先づ日本第一の國職(大官)は卽ち將軍にして、彼は陸海軍の總指揮官たり、外交內治の主宰者たり、諸國大名の引率者たり、國家財政の調理者たることを常に眼中に置かざる可からず。猶切なる語を以て云はゞ、將軍は恰も神聖なる皇帝陛下(帝(みかど))の世襲元帥にして、且世襲總理なり。此古き日本の國職は家康以來德川家にて相續し日本の平和秩序及美術の隆盛、商工業の發達等は皆之を德川家の恩澤に歸せざる可らず。殊に三百年の久しき全く外國との交際を絕ち、鎖國の主義を執りしが爲め、京都帝室の守護を固くし、諸國

大名の制御を嚴にし、國事一も意の如くならざることなかりしが、猶此國職は依然たる官職たるに止まり、唯最高なる委任たるに過ぎずして、一將軍の薨去に際しては、其後繼者たるもの新に其職に就くの認許を得ざる可からず。彼の政治的帝王若くは大君（タイクン）なる語は、初め日本の國體に通せざる歐人によりて將軍に當てられたる名稱にしてそは全く其性質を誤れるものなり。實（げ）に日本全土を知ろしめす可き、まことの大君は、永く京都にましませる　天皇にして、よし或る時は雲深く御手拱（みてこまね）かせ給ひしことあるも、二千五百有餘年皇統連綿たる神裔にして、歐洲ぶりに申しまつれば、御身一つに法皇と帝王とを兼ねさせ給ふなりけり。

されば千八百六十八年京都宮廷に於て一難事の起るや否や、忽ち國内の戰亂となり、江戸政府に反抗を來たし、有力なる諸大名は其首領たる將軍に從はず、皆京都の宮廷に赴きしにより、日本全國の財力を竭くして、さしも巨大に築き上げたる德川幕府の政治舞臺は一溜りなく崩れ去りたり。偖、此政府の廢址の上に新日本の帝國政府は建築せざるを得ざる窮境なりしかば、當時の東京は恰も假政府の有樣を呈したるも亦怪むに足らざるなり。申すも恐れ多き事なれど、日本の　天皇陛下は、曾て將軍の住める宮殿にましまして、未だ他に渡らせ給はず、德川家の紋章は未だ之を宮殿に見つ可し。新皇居の御造營は舊將軍家の本館たりし敷地跡を選み給ひてものし給ふ御計營なれど、工事未だ全く終らず、又帝國政府の多くは舊政府の建物を用ひ、或は大名より沒收せる邸第を以て猶之に當てたるなど、一語を以て之を許さば未だ維新戰亂の跡を到る所に視ると云ふ可し。

抑も東京は隅田河の兩岸に擴がりて甚だ大なる平地にして隅田河は東京灣に注ぎ入る大河の一なり。此首府には人家稠密なる市街地の外大公園あり、小園囿あり、又數多の古城壁と昔床しき濠水ありて、東京固有の景色を示せり。余等の東京に着せしは仲春五月の初旬にして、恰も櫻花の盛時なりしが、大輪にして優美なる薔薇色の花を以て稍一面蔽はれたる樹木は散在の園囿に滿ち、或は街路の兩側に連りて其觀光の美麗なること、そは一見せし者に非ざるよりは之を信ずること能はざるなり。又市の塞外の堀に滿つる蓮花盛に咲き出づる時は、或は白く、或は紅に、其景色の美麗なること眞に言語に盡す可からず。此市は固と三部に分れ其中央なるは卽ち現今宮殿の在る處にして、樹木鬱乎たる宏大なる花囿あり、四方城壁を以て圍繞し、之を第一廓とす。次は大名卽ち舊來の諸侯の住居たる數多の邸第の在りし處にして、今は多く政府の建築物各省及國會議事堂等を以て滿され、第三廓は普通人民の住地たる商品市街にして、其周圍には古き塞壁及塹濠を繞らせり。街道の多くは木造の大名の邸宅、然も其破壞し行くに任せるもの相連りて淋しく變化なく、其後方に在る廣き園囿は墻壁に遮ぎられて隱蔽さるゝを常とし、歐洲風なる邸宅は未だ其數甚だ少なし。西洋風なる旅館又稀にして、外國人は多く賓客たる待遇を受く。鹿鳴館の如きは外務の管理に屬し、外人の便宜に供せらるゝ建築物にして、余等は先づ玆に住居したり。獨、英、露の各國公使館、參

謀本部及北白川の宮（獨逸にて軍隊の教育を受け、後臺灣にて戰死し給ひたり）の御邸第、陸軍大臣大山伯の私邸等は僅かに當時に於ける歐洲風の建築なり。

此等歐洲風の建築物は千八百八十七年（明治二十年）始めて强き地震に逢ひしが、そは前例少き强震なりしに、千八百九十四年（明治二十七年）更に烈しき强震ありしかば、多くは其壁土を崩され、甚しきは倒潰するに至り、獨逸國公使館の如きも亦此不幸の災厄に罹れり、これ日本開國以後始めて東京に入りたる技師等が、斯く震動の恐れある地盤に堅牢なる建築物を立つるの方法を知らざりし故なり。此時未だ歐洲人は何故に日本人が千年以來實驗しつる、木造建築而已を固執し、火災の憂ひ、防寒の不利を顧みずして歐洲風なる煉瓦作りを採らざるやの理由を知らざりしが、今や斯る災厄に逢ひて玆に思ひ半に過ぎたり。夜中若し突如として地震に逢ひたる時に當り、樓上なる寢室より自己のみならず全家族を逃れしむるの困難なるは容易に之を推察し得べし。宜なる哉、日本人が木造の平家を以て最良の便宜の家屋とせることを。

抑も東京市は凡そ百萬の人口を有し、廣く四方に散布して居りて馬車人車多からざる故、知人の訪問往來の爲め意外に多くの時を要し、僅かに通ずる鐵道馬車は歐人の利用する者甚だ稀にして、今日の如く四通八達連絡輪囘せる鐵道は當時未だ見るを得ざりしかば、余等が鹿鳴館を出で、必要なる訪問を爲さんとするに當りては、一日前より地圖を出して其目的地を探知せんため、先づ東京市の地勢を案じ、まゝ之が爲め幾多の時間を徒に費したりき。偖政府にて余等が爲めに借り與へられたる家屋はアイゼンデツヒエル公使の命によりて永田町の獨逸公使館を建築せる佛國技師が建築したるものにして、赤色なる煉瓦の二階建なり。周圍には廣やかなる庭園ありて前面には常盤木を植ゑ、屋後には楡の古木を植ゑたり。此後園の片隅には厩ありて又外圍の墻近くに門衞及び使丁の住居を構へたり。これ彼等は日本流に疊、引戸等を備ふる家屋に住するを好むが故に、歐人の主人と同住し難きが故なるべし。

今此家屋の間取を記さんに、階下の左方には主人用の二室ありて（張り出し付き）一は應接間とし、一は書齋兼圖書室とす。右方の一室は四窓を備へし客間にして、其後方には大なる食堂あり。將軍大山伯は佛蘭西派の教育を受け、萬事拔目なき貴紳なるが、此家屋を其優婉なる夫人（吉井宮內次官の令孃（原書の儘）にして亞米利加にて教育を受けたり）に命じ、歐洲風に飾り付けしめたれば、客間の窓掛け及び家具には擬アウブソン紙（有名なる織物製產地西陣の如し）を用ひ、壁間には歐洲の景色を寫せる油繪を懸け、又階上の寢室には流行の大なる寢臺を据え、食堂も亦相當なる飾り付けありて、別に不足する處あらざれば、余等が秘藏する眞物のアウブソン織を始めとし、ペートルスボルクの骨董店にて注意しつゝ買ひ集めたる大切の家具を遙々歐洲より携へ、荷作り及び積みおろし等の爲め破損さるゝの危險を侵して世界の半分道を運送したりし愚さを悔ゆるのみ。

かくて余等始めの間は未だ荷物の著せざる故、唯此家屋を見廻はすのみにて、其廣く且立派なる建築なるに滿足せしが、庖厨の具備はらざると、浴室等の附屬品の日本風なるは好ましからねど、其他は總て歐洲にても得難き程なる物のみなれば、余等が荷物の著せし上にて足らざる所を補ひ得んと心の中に喜び居たりき。

余等は懇切なるホルレーベン公使に誘はれて各國の公使を訪ひしが、當時東京駐在公使は獨逸國の公使の外には、英國公使サー、ヱフ、ブルンケット、伊太利公使ド、マルテイノ、露國公使シヱウイッチ、佛國公使ジエンキウイツ、蘭國公使フアン、ポット、清國公使、西國兼葡國辨理公使、及横濱駐在の白耳義公使ネット等なり。然るに何れの公使も皆不在なりしかば、余は他日を以て面識の榮を得んことを待たざる可らざるに至れり。其後間もなく長崎式部官は宮内省より廻送の馬車にて余等を誘ひ、余等が長官たる總理大臣兼宮内大臣伊藤伯及伯爵夫人に紹介の勞を取られ、猶同日外務の壯麗なる官舍に住する青木子爵及び同子爵夫人を訪問せり。

伊藤伯は市中なる大臣官舍に住せずして高輪の自邸に在りしが、邸は海岸にありて廣濶なる庭園を控へ其眺望甚だ佳なり。首相は齡五十の半を越せる人にして黑髯を貯へ身長甚だ大ならず、態度沈靜にして禮儀懇切に又自重自信の氣象あらはれ、亞米利加政治家の風采に似たり。此勢力ある改革者にして當時總理大臣と宮内大臣を兼攝せる伯爵の好意を得んことは、余等の身に取りては甚だ肝要なることなり。

伊藤伯は青年時代其友人たる井上伯と共に長州侯に仕へたる人にして、共に留學の爲め歐洲に送られ、後幕府瓦解の際（千八百六十八年）歸朝したるが、朝廷に早くより御身方せる二大諸侯（薩州長州）の一にる舊藩主の勢力と自己の才幹とにより、國家變動の機會に乘じて漸々今日の高位に昇り、遂に帝室に於て甚だ勢力ある位置を占むるに至れり。舊日本に於ては伊藤伯も到底今日の進路を取ること能はざりしならん。これ伯の生家は昇殿を許さるべき貴族に非ずして、京都の帝室には一歩も入るゝこと能はざる士族なりしが故なり。されば此一例によるも（數多の例ある中の一例なり）日本の國家及び社會には如何に變轉ありしかを見るべく、又如何に人才の登庸せられ、帝室及政府の爲めに用ひられしかを知るに足らん。立憲國たる日本今日の眞相は實に此伯爵と（現今の伊藤侯爵）伯の政治的卓見の力とに歸せざる可らず。伊藤伯爵夫人は齡既に若からざれども、元氣ありて懇切なる愛嬌多き擧動を示し、萬事に器用なる名ある人にて、其夫と同じく洋服を裝へり。伊藤令嬢は能く英語に通じ、母と共に懇切に室内を案内し、内部の日本風なる居間と外部の歐洲風なる客間とを示し、其建物の二部に別れ居ることを告げたり。日本の當時の家々には何處にも此區別ありて邦人の客なる時は日本の客間に請じ、外人の來る時は洋館に誘ふを常とし、凡て當時の洋室の飾り付けは拙劣なるもの甚だ多かりしが、同家の客室には美麗なる花ありて、其挿方の巧なるは

實に一の非難すべきなく、こは各級の日本人が能くする所の技術にして、此一事以て日本人が美術的の遺傳を有し、其感情の優美なるを證するに足るべし。又夫人の語る所によれば、伯爵の令息は獨逸國に留學中なる由なりしが、獨國の何地にと問ひしに、委しくは知らざれども「伯林の近傍」と答へたり。此令息は今日宮内にありて天晴なる高等官なり。

伊藤伯は同日中に余等を答訪し、余等は又伯が宮内に在職中は常に伯及び伯爵夫人の好意を得て其職に從ふを得たり。されど唯茲に一言す可きは、多くの場合に伯の意見は他の日本の政治家に同じく吾人の意見と異なり急進にして、伯は先づ舊儀式、舊習慣及び舊制度を一掃せんとし、或は既に一掃せるさへありて、此點のみは吾人の屢〻同意し能はざる所なり。例へば宮中の祝日に當りて日本の服裝を廢止せることの如きは誠に悲しむ可きことなりしが、余等が日本に到着せしは既に其廢止を決行して勅裁をも經たる後なり。是等の事に關しては余等屢〻非難を試みしことありしが、事實問題に於て衝突せること稀にして却て益〻親近し來れり。模樣ある宮中の婦人服は古きより帝室に用ひられ、一の歴史となれるものにて、殊に貴婦人に對して此服裝は優にやさしき振舞をなさしめ、又立居に安心ならしめし者を、一朝にして之を廢し窮屈なる洋服に替へしは果して是れ何の心ぞ、美術家にとり、好畫家にとり、眞に千歳の憾と云ふべし。翻て歐洲を見るに、歴史的なる儀式を復興し古代の服裝は宮中を飾らんとするの潮流動き來れる今日誠に惜む可きことならずや。

余等は後日に至りて此事のみは到底伊藤伯の意を翻すこと能はざりしことを悟りしが、こは實に伊藤伯の政治的卓見を傷くるものにして、此服裝問題は余が後章にも論ずる如く、伊藤伯をして一般の人望に背かしめる原因となりたり。偖余等は此多事なる日を終るにいと愉快なる月夜の人力車行を以てし、車上より舊日本の狀態を存せる市街を眺めつゝ、種々珍しき事物に接して親しく市民生活の情況を視察し得たり。

教會の情況

五月一日日曜日なるを以て外國人の居留地たる築地の獨逸プロテスタン教寺院に參謁せり。他の耶蘇教寺も多くは皆此築地に在るなり。

此獨逸のプロテスタン教寺院は吳底（ゴート）型に建築されたる祈禱所にして、又亞米利加の教會に屬し、唯一教（ユニテリアン）の祈禱所にも兼用するなり。獨逸新教の宣教師は獨逸本國の一般の信徒より渇仰の聞えあるスピンネル師にして、師は瑞西國の出生なるが、ワイマーに於ける大侯國索遜宗務局と、獨逸新教布教會の協力によりて東京に派遣された人なり。今は獨逸に歸りてワイマー宮廷の僧正たり。日本在住の獨逸信徒は從來索遜ワイマー國のカール、アレキサンドル大侯の恩澤に浴し居りて、大侯及大侯夫人（最も慈愛に富めるソフキー夫人）は日本の布教の爲めに有爲有力なる助力を與へ、其貢

献する所甚だ多く、實に能くエルネスト家オラニス家の遺志を繼ぐ者と云ふ可し。大侯爵が日本に於ける獨逸信徒を保護したる功勞は是れ東亞に不朽の記念碑を植てたるものにして、又大侯爵夫人が東京の信徒の爲めに寺院に用ゆる美麗なる銀造の器具を喜捨せしは、これ又東方に永久の記念を殘せしものなり。而して又スピンネル師が再びワイマーに召し還されて、獨逸寺院の弘教の職に就きしは、是れスピンネル師が在日の際能く困難の境に處して布教の效を奏したるを證するなり。偖獨逸公使は根柢よりの新教信者にして必ず祈禱會に參詣し、毎回の日曜獨逸寺院に公使及公使館員男爵ドルンベルク顧問官フオン、ツアンダル通譯官を見ざること稀なり。又此信徒中日本信教の自由を示すべき好例は、外務大臣青木子爵が其夫人（獨逸夫人）と共に令孃ハンニーを伴ひて毎日曜必ず獨逸寺院に參詣せしことなり。其他日本政府に聘用されたる者は、皆公使の模範に從ひ家族を率ゐて參詣するを常とせり。

スピンネル氏は獨逸信徒の靈魂を濟度するに勉めしのみならず、更に布教の爲めに盡す所あらんとし、謝金を求むることなくして多數の日本兒童に獨逸語を教授し、之によりて信仰の端緒を得んことを謀りたり。

東京には獨逸の新教寺院の外猶壯大なる吳底（ゴート）型の英國寺院ありて、大僧正之が司教となり、既に數年前より存立し、猶數多の教會堂を有すれども、信徒未だ多からず。此他美蘇的斯（ミソデスト）土教、洗禮（バプテイスト）教及米國の不勒斯北得（ブレスビテル）教等ありて、米國の信徒は最も熱心なる宣教師と豐富なる傳道資本を有す。

羅馬加特立（カトリック）教の佛國寺院は日本に於ける耶蘇教の最も古きものにして、他國の舊教皆之と合同す。此舊教寺院の建立は遠く葡萄牙外交時代に遡り、初時の布教は其勢力の過大なりしより、遂に千七百年紀の不評なる耶蘇教排斥となり、爾來千八百七十三年迄全く其布教を禁じたるが、舊教寺院は近年に至りて漸く盛に、たとへ日本人中之を疑惧する者あるも、佛國エートランジェレの宣教師フレレス兄弟の不撓忍耐なる教授によりて遂に再び其基礎を固ふせり。又露國の正教信徒も近時益〻隆盛となり、此教會に在りて日本人中に熱心なる傳道者を生じて說教をなすものあるに至れり。こは畢竟國民の宗教に冷淡に、且日本國教の不完全なるより招ける現象なる可し。然れども此露國の正教を除きて他の耶蘇教傳道事業は其熱心と巨多の給資と永年の精勵とに拘はらず、未だ成績の著しきものあるを見ざるなり。露國正教派には日露の信徒の大僧正なる一人の祈禱者ありて、露國公使館は其公使館附とし、其身は外交的事務に關係するの特權を有せり。而して彼の外一人の露僧も日本に永住するものあらざりしも、然も多數の日本人をして耶蘇數に歸依せしめ、正教派の寺院の司教者となりて互に信神の道を勵ましむるに至れり。宏大なる露國の大伽藍（大僧正の司教する寺）は東京に特立せる丘陵上に建築せられしが、其建築費は日本に於ける喜捨金による而已にあらず、莫斯古（モスコー）及比德堡に於ける須刺勃尼（スポニア）人の委員は巨額の醵金を支出し、此建築費に充て、又東京の露國

大僧正に歸依する日本人を保護する爲めに使用せしむるとの傳說なり。而して正教派が斯く日本に盛況を呈するは、必ず其寺院の外觀の大に佛教の伽藍に類するものあると、且宗教上の儀式も或は神像を拜し、或は金色なる畫像を飾れるなど、兩者大に近き處あるとによるならん。又露國人が亞細亞人と交際する習慣及び之と同等なる立脚地を有する等のことは、露國の傳道事業をして大に容易ならしめたるものなる可し。然るに事實日本政府は怪疑の眼を以て此傳道を注視するに至れり。これ宗教の旗幟の下に政治上の野心を有するが故なり。然れども新日本政府は既に信教の自由を以て之を公言したるが故に、今俄に之に干涉するの機會を捕捉し難く、又他方に於ては正教信者は多く日本臣民なるが上に、正教の大伽藍も亦日本人の建つる處、且既に云へるが如く日本在住の露國僧侶は只一人にして、且其身は特に公使館所屬なれば之に處すること益〻困難なる可きなり。抑も日本の貴族社會には宗教の勢力を流布せしむること甚だ難く（僅の例外はあれど）殊に宮廷に至りては毫も之を入る可きの道なきなり。

余等が事業進行の一として宮中の貴婦人の胸底に宗教の種子を播かんことは容易なる業なる可けれとの助言は余等が聞きし所なれど、余は其好意を謝すると共に斯かる助言を與へらるゝは此等の事に經驗淺く、余等の境界を察せざるものと言はざるを得ざるなり。

余等にして果して前記の如きことを爲さば、余等は啻に其目的を遂ぐる能はざるのみならず、却て不信用を招くの不幸に陷りしならん。そはこれ等の事を說く時は、却て日本國の宗教的起源が眼前に現出し來る可ければなり。現に某有力者よりいと露骨なる言葉を以て、余等に固く宗教の事を說く可らずと戒められしが、余等も亦決して是等の事を試みんが爲めに招聘されたる身に非ざることを自覺し居りたり。

芝

日本現在の耶蘇教界は外觀極めて沈靜なれども、內部には元氣ある精神を有す。今稍〻之と反對なるは舊日本の國教たる佛教にして、二者の照應を目擊せんも面白かるべしと、余等は同五月一日を以て芝公園に車を馳せて將軍の墓所に參詣したり。

古木列れる一體の並木は正に是れ市の中央に位せる公園に導くの道路にして、巍然たる赤色の大建築、所謂大門なるものを過ぐれば、卽ち廣濶なる公園に達す。此地には千八百七十四年（明治十三年）に至る迄、增上寺（原書ホウデウ寺とあり）と稱する大伽藍ありて、其周圍には德川家十五代の靈廟あり、其壯麗今日尙人目を眩するに足れり。他の日本社寺地に於けるが如く、露店、雜貨肆、掛茶屋等相混じて連るが故に、此等の中に道を求めて漸く本堂に達する時は、先づ靜に心を修め、而して後其建築の美を觀せざる可らず。此地は固小民の俗眼に觸れ、又外客の來觀するをも許

さゞりしが、千八百六十八年（明治七年）舊政體を改めし以來、特に千八百七十四年增上寺燒失後より始めて公衆の入るを許せしが、惜むべく風雨のすさぶに任せて其荒敗を防ぐの道なし。固此等の佛閣寺院は將軍保護の下に立ちて、幕府より扶持所領を十分に與へられしに、王政復古により、今や前時の反動として佛閣寺院の建物等は之を社會の用に供する事とし、從來の所領收納を擧げて政府に返還せしめたれば、今は廣大なる佛閣堂舍も修膳保存をなす能はざるに至れり。

抑〻芝の殿堂は之を日光の宮殿に比す可く、共に華奢を極め、人工を盡し、日本の建築の標本なれば、余は又他日を以て必ず日光に行かんことを願へり。芝の建築は木造にして、赤漆を以て之を塗飾し、金色其他種々の彩色せる彫刻物到る處に見ざるはなく、又名工の所作に係る彩色せる圓柱（マルバシラ）、彫り透したる欄干等、彼を飾り此を粧ひ、又日本の動植物を彩色美麗に畫き出せる、或は青銅の金物飾り、或は德川の紋章を散らせる、實に人目を眩せしむるに足れり。又門柱となれる赤色の圓柱に、金色の龍を浮き彫とし、蜿々として柱を繞ぐれる狀態（アリサマ）、又上部に紅白の蓮光を透かし彫にしたる妙手、或は美麗に畫かれし植物の綠なる枝の上に、取り〴〵に栖（とま）れる小鳥の眞に迫れる彫刻の巧、苟も美術に心あるもの誰か歎賞せざるを得んや。

猶進んで巡觀すれば、此處には石燈籠あり、彼處に蒼然たる青銅燈籠あり、寄送主たる諸侯の紋章は粲然として金色に輝けり。又方形なる鍾樓あり、赤漆の色鮮かなる木造にして、土工、木工、金工共に各其巧妙を極め、人をして眞に當國技工の花たるを知らしむ。而してこは未だ廟所及拜殿の外部の裝飾を記せしに過ぎずして、余等が之より靴を脱して內部に入るを得たりし後は、更に又驚かざるを得ざりしなり。床は黑塗にして柔き疊を敷きつめ、歩む時は兩足等しく沈み入るの思ひあり（譯者曰く疊柔かなる故足の入る心地すると云ふ意なり是れ西洋上等の厚き柔かなる敷物の上を歩む時の感なれど、我が國にて柔き疊とは如何天井を說くものなれど彼國にあらざる故言ひ表はし方甚だ不充分なり）。壁も亦黑色にして貴重なる掛物と金屏風を以て飾られ、塗り木の格天井は其組みたる角に金物を打ち、各框の中には彩畫あり（譯者曰く、組及び佛式の祭典に要する諸品列り、又青銅或は木質にして造りし人大の尊像と、以太利國レナサン風に彫刻され彩色されたる木像の脇立（ワキダチ）をも見たり。堂內の周圍には祭典讀經に際して、住職及び僧侶が使用すべき小卓の竝列せるを見たり。此殿堂は未だ曾て見聞せざる程の壯麗を極め、余等の驚きは暫時止まざりしが、千六百三十二年（明正九年）に薨去せる二代將軍秀忠の廟所に至りて、又此驚きを重ねたり。こゝには實に世界の最大最貴重なる乾漆像ありて、眞にこれ技工の上乘なるものなり。

他の諸墓所は此本堂より數百歩を距つる所にありて、直立せる圓き簡單なる墓標にして古の秘傳により竝び立てる青銅の狛犬は調和尤も佳にして景色特に幽趣を得たり。

斯くも壯麗なる廟所を造營する口實として、各廟に必ず將軍の謚を記せる木額ありて、此木額こ

そはかしこくも　天皇（歐人はミカドと稱し奉り京都にまします日本の帝王なり）親ら御筆を染め給ひ、將軍の功勞に對する名譽の記念として下し賜ふなり。こは外形より見れば　帝王（みかど）を尊び戴くの心より出し如くなれど、實は之によりて將軍の威を輝さんとするの手段にして、又能く其目的を達し得るなり。何んとなれば將軍の職を繼ぐに當りて、其祖先を祭らんが爲に、諸侯を集めて此壯麗なる廟所を拜さしむる時は、諸侯は其勢力の盛なるを觀、自ら服從の念を抱くに至らん。然れども眞面目なる觀察者は此勢力ある將軍の術數を知るが故に、更に其甲斐なく、却て此等の術數相重なるに至りて、遂に國政全體の破滅を誘起するに至りたり。

然れども將軍が三百年の平和を保ち、余が後章に述ぶべき彼是の工事を起し、技術家及工人に其手腕を振ふの機會を得せしめたるの功德は、決して此を忘るべからず。日本工藝の發達は實に此時よりせるものにして、創作の勃興せる、技術熱の發動せる、優に伊太利のレナサン時代及バロック時代に比するを得べし。既に前百年記に於て、路易十六世時代の佛國の流行が和蘭人の携へ歸りて、東洋技術品の影響を受けたりしが、更に又二十年來歐洲及び亞米利加の工藝に大なる影響を與へて、何處の工藝品陳列場にも特種工藝品の目に入る者多きは、即ち是れ日本よりの動機によるなり。此建築物若くは之に類する建築より種々の分子を取り來りて之を歐洲の技術に調和應用したるは既に世人の知る處なるべし。

以上の見解と日本に來遊の便宜を有せし歐米紳士の嘆賞とは、是れ佛教と之が守護者たりし德川將軍に慊焉なる日本當時の政治家をして寺寶保護の道を講せしめたる一理由なるべし。

偖、此等社寺の彫刻物は風雨の損害を防がんが爲めに黑板を以て掩はれ、其黑板の腐朽せる物には或は修膳を加へ、或は之を改造し、而して從來貧困なる僧侶の盜奪に委せられたる國寶は、漸く政府保護の下に管理せらるゝに至るべし。往年にありて最も貴重すべき社寺の重寶も僅少なる金圓にて容易に償ひ得たるものゝ知し。これ社寺の屋蓋崩落して數多の重寶は徒に雨滴に浸さるゝの止むを得ざりしによるなり。又多くの僧侶は自己の飢餓に迫るものあらず、或は靈寶を守護する力なきにも非ずして、頻に其寺院の寶物を賣却せるものありしが、是等僧侶は一旦殆んど全滅せんとするの運命に遭遇したるなり。芝の寺院より出でし大なる珍らしき掛物が、八十年紀（明治十三年）に歐洲及亞米利加の美術商の手に入りしは既に世人の知る所なり。されば當時日本に在留せる外國人が多くの美術品を蒐集し、又巴里のビンク組其他有名なる輸出商が神戸其他の開港場より、日本の美術品を多く輸出せるは又怪しむに足らざるなり。偖、余等はこゝに割愛して、此公園の優美なる花卉及鬱乎たる大樹に別を告げ其言ふ可らざる幽趣靜閑に背き、眞に日本過去の大記念碑たるべき仙境を辭し、再び繁華なる市街を過ぎりて自邸に歸りしが、興味陶然として忘るゝことを能はず、親友アレキサンドル、シーボルト及エーチ、ヤスムンドと共に猶日本の所見を語りたり。

御所

五月二日午後二時、赤坂御所に於て余等に拜謁仰付けらるゝに付、參内すべき旨長崎式部官より通知ありしかば、今日迄未だ開けざりし荷物を明け、此儀式に着用すべき旨達せられたる余等が服裝を取出したるが、余は侍從官の小禮服、妻は訪問服（ヴヰヂングドレス）を着し、余等二時十五分前に御所へ出づべき樣内達ありたり。

皇帝陛下を御始めとし、宮中の方々には、當時（千八百八十七年、卽ち明治二十年）未だ赤坂の假御所に在らせられしが、此御所は舊將軍家の御殿にして、外觀は壯麗なりと云ひ難けれど、御門内に入れば、丘陵あり、森林あり、水流あり、甚だ宏大なる御庭園にて、且市街を少しく隔れ居れば自ら莊嚴なる思ひあるなり。

余等は先づ御外圍ひの壁に添うて馬車を驅ること數町にして御門を入り、御影石を以て敷き詰め、掃除極めて行屆きたる廣庭を過ぎ、上部に金の御紋章を打ちたる白木造りの御玄關前にて馬車を降り、本日余等の案内役たる長崎式部官及青色の制服を着せる舍人等に迎へられ、數室を過ぎて大廣間に入れり。此大廣間は御質素なる飾り付けなるが、余等は又此廣間を出で、兩側に白又は鼠色の紙にて張りたる黑塗緣の襖を立てたる長廊下を過ぎ、やがて一室に入りしに、こゝに數多の宮内官

に迎接せられ、甚だ榮譽なる初對面の御挨拶をなししが、中にも式部長官鍋島侯爵は以前羅馬駐劄の全權公使をも勤められ、舊肥前の國主にて、皇室に忠勤を擢んでられし大諸侯なり。年齡四十前後と覺しく黑鬚を貯へられ、穩かに挨拶されし樣誠に氣高く、初對面の節より何となく慕はしく感せしが、英語をも話されたり。又同侯爵夫人は然るべき貴族（公卿）の息女にして、容貌の麗はしきを以て名高く、日本交際社會の中心たり。侯爵には式部長官として固より俸給を受けられざれど、常に熱心に職務大切と奉仕せらるゝとか。次は高崎式部次官にして、聞く所によれば同氏は國學の大家にして外國語を能くせず、隨て歐洲當時の事情には通ぜざれども、深く國文に達し、宮中の歌人として名高き人なりと。又同氏の經歷は寧ろ政治及軍事に關係深き人にして、當時の他の宮内官と同じく、維新の際には皇室の爲めに大に勇戰せりと。又宮内次官吉井伯は宮内大臣伊藤伯の次位にある人にして、舊武士（サムライ）の階級に屬し、劍道の達人にして、維新の際大に勇戰せる經歷ある人なりと。

偖、四人目に挨拶せるは香川皇后宮大夫にして、小兵（こひやう）ながらまる〳〵として心地よく鬚髯を綺麗に剃られ、賢こげに勢よく見受けらるゝ人なるが、余等は同氏によりて何となく一種日本人を愛敬するの感を起したり。同氏は（後日子爵を賜はりたり）歐洲語には通ぜざる由、されど發明なる人にして、余等實に思慮ある愉快なる交際を結べり。同氏によりて日本　皇后陛下には余等に歐洲の事情を御下問遊ばさるゝ而已ならず、種々の御用をも命ぜられ、絕えず有難き思召を受けしかば、

余等一層の勵みを生じて御奉公を常に愉快に感じたり。香川氏には溫良なる一人の息女ありしが（後に宮中の女官となられたり）常に親父の爲めに通譯せられ、余等には一入懇切なりき。

偖、其他壯年紳士の式部官諸氏は一樣に小禮服を着けられしが、其服裝は天鵞絨の立襟金釦の燕尾服にして、我が獨逸禮裝と異なり、劒をも帶び居たり。余等は是等式部官の案内により、廣き宮中を通過して謁見室に入りしが、やがて　皇帝陛下、　皇后陛下には御洋裝にて出御あり。余は皇帝陛下の御前に立ち、妻は　皇后陛下の御前に立ちて拜謁の榮を賜はりたり。

歐洲人の「御門（ミカド）」と申し奉る日本　皇帝は、御正稱を　天皇と申し、宮中にては「御上（オカミ）」と申上ぐるなり。當時御齡四十歲に涉らせられ、黑き御軍服を召させられ《英國及舊ブラウンシユワイグ國（獨逸聯邦の一）の軍服の如きもの》御胸に菊花大綬章を佩ばせられ、御頭には何物も冠むらせられず、申すもかしこきことながら、少し黃がゝりし御色合にて、黑き御髮黑き御鬚を貯へられ、御年よりは若やかに見上げられ、御目ばたきの外は少しも御動きなく端然として御直立あらせらる。

皇帝陛下に竝び賜ひし　皇后陛下は御長け高からぬ方（はう）にて、絹の洋服を召させられ、御姿（すがた）麗はしくして優れて氣高く、如何にも高貴の御方とこそ見上げられける。　兩陛下には淸き高音調にて極めて靜かに御言葉を賜はりしが、御傍に侍りし長崎式部官及北島女官は直に之を英譯して余等に御諚の意を傳へたり。余等が拜謁は凡そ二十分間に渡りていと有難き仰せごとあり、先づ伯林の皇帝、皇后兩陛下の御起居を問はせられ、次に皇太子殿下、皇太子妃殿下の御健康を御尋ねありて、遂に余等の旅行に付き御言葉を賜はり、殊に　皇后陛下には有難くも、そちの子供は如何せしやなど尋ねさせ給へり。此御物語中　兩陛下には特に　皇帝陛下には、少しも御威容を崩し給はず、御殿としては稍狹く薄暗き感ある此御室の中央に直立し給ひて、一歩をも移し給はず、又御手をも賜はらざりき。

皇后陛下には他の高貴なる婦人の方々が總べて余等外國人に對し興がり給ふが如く、稍々御活潑に渡らせられ、且は御なさけ深く慕はしき樣をも拜しまゐらせたり。

斯くて余等は體を屈めて退歩しつゝこゝを罷り出で、他の室に請せられて數多の宮女に打ち圍まれ、香氣ゆかしき綠茶の饗に逢ひ、猶今日の拜謁に付きて種々の物語あり。口々に其榮譽を祝はれしが、宮内大臣伊藤伯爵の令室も亦此座におはしき。

偖、此拜謁の終ると共に余等は各皇族を伺候せんとて、有栖川宮、伏見宮、北白川宮の御邸を訪ひ參らせたり。各官には皆御洋裝にて御目見え仰せ付けられしが、各宮妃殿下にも同じく洋服を召させられ立派なる御殿内に於て拜顏の榮を賜はりたり。有栖川宮熾仁親王は參謀總長にて元帥をも兼ねられ、皇室第一位の宮家にて、　皇帝陛下より御齡長じ給ひ政治家として天晴なる御技倆を有し給ふと聞けり。又同宮妃殿下には殊に深く歐洲の文明を好み給ふとか。伏見宮殿下は近衞騎兵

の將官にして、久しく佛國に留學し給ひ、巧に佛語を談じ給ひて、御樣子佛國の士官に似たる樣見上げたり。又御痛しきは同宮妃殿下にして、後日神經を腦み給ひしが、當時既に其御兆候ありき。北白川宮殿下は久しく獨逸伯林に御滯在あらせられ、普國の近衞龍騎兵隊に御入隊ありしことありしかば、普國の騎兵士官風にして、御體格少しく小兵(こひやう)瘦形にはましませど、御服裝ひたと御身に合ひて御風姿尤も善く、且つ伯林調にて巧に獨逸語を談じ給へり。同妃殿下は宮の御後添なれど、御年若く美人に入らせられ、薩摩侯の御息女なりとか、同宮殿下御邸第は吳底(ゴート)式の建築にて、眺望よき高地に建てられ、其周圍の歐風建物の雅致なきは、御本館に似合はしからぬ恨みあれど、御庭園の廣きは實に心地よく誠に結構なる御宮(みやゐ)居なり。各宮殿下妃殿下が余等夫妻をいと御懇切に引見せられしは、未だ御馴(なじみ)見なき朝廷に招聘されし余等外國人にとりて殊に有難く感ぜられ、爾後此事を思ひ出しては感謝に堪えざる心地せり。

天皇陛下

かしこくも現代を知ろしめし給ふ。

睦仁皇帝陛下には、一千八百五十二年（嘉永五年）十一月三日（原書の儘）京都にて御降誕あり。其前例なき大政の御改革に付きては、種々なる御噂申上ぐるものありけり。されど九重雲深くして皇帝陛下の御身親(みづから)は固より、宮中の御事ども之を伺ひまつること難ければ、其眞相を畫き出でんこと固より望むべきに非らず。殊に外つ國人は大和の言語に疎ければ、宮中の御模樣に付きても彼是れ人傳に承はることのみ多ければ、誠の事を伺ひ知らんこと一入難く、殊に日本の人々は大君の御事とし云はゞ、御噂申し上ぐるさへ恐れかしこみて口を聞く事少なければ、我等は唯偶然に聞き出しつる事を便るの外なく、こゝに唯其漏れ承はる所を記して聖德を仰ぎまつらん。

皇帝陛下には、千八百六十七年（慶應三年）未だ御若年にて位に卽かせ給ひしが、御踐祚の御當時は實に一方ならず御心を惱ませ、且は勵ませ給ひしならん。御父帝孝明天皇は、聖明の君にましませしが、舊日本將さに大改革に就かんとするの時、俄に京都に於て崩御し給ひけり。恐らく孝明天皇には總て從來の舊慣の如く御隱退御無爲にて御一生を過させ給ひて、將に來る可き復古維新の政變には御たづさはりなき御運命に居らせ給ひしものならん。

されば孝明天皇の御后にて御名を夙子と申し上げたる皇太后陛下にも、曾て今樣めきしことを好み給はず歐洲風の新なる式の同宮に入るを許されず、千八百九十七年（明治三十年）一月十一日御高齡にて東京に崩じ給ひし迄、永き月日を青山御所にて坤德いと高く、極めて御質素に御閑靜に過し給へり。されば皇太后陛下には舊來宮中にて用ゐられし御模樣ある御服裝の外曾て他を召させ給はず、御側に侍べる者も皆日本の守舊家にして、外國の男子は勿論婦人をさへ召し給ひしことなく、

又御外出もいと稀にして、行啓の時は必ず車窓を蓋はせ給ふ。かゝれば歐風の飾り付けは決して御所に用ゐ給はず、卓子椅子の類は御存じもなき程にて、食匙、小刀も亦御手に觸れしことなかるべし。されば此御所にて御膳に上るを見得べきものは、唯日本の品のみなるべく、又此御所にて聞き得べきは唯日本の言語のみなる可く、年若き當時の宮内官の此舊御所に參る時は、何事も愼み、おごそかに事へまつる由傳へ聞きぬ。

皇帝陛下を御始めとし、皇族方御一統より宮内官、政務官に至る迄　皇太后陛下を尊敬しまつることは大方ならずして、殊に皇帝陛下には屢〻御見舞の爲め參内ありて、帝室に關することを御語らひ之あるも　皇太后陛下には絶えて差し出で給ふことあらせられずと。

皇太后陛下には孝明天皇のましませる床しき音を偲ばせ給ひ、節の間も忘れ給はぬ御眞心より、新しきことを厭ひ給ひて何の御催しにも出で給はねば、余等はつひに見上げ奉るの折を得ざりき。皇太后大夫杉子爵は内匠頭をも兼ね沈默なる人にして、歐洲語を解せず、體格大柄にて風采立ち優さり溫雅なる紳士なり。

皇室の御遺風と宮中守舊の御習慣とは　皇帝陛下の日々聞こし召し給ふ所なれば、　陛下が新規を好ませられざる決して異とすべきことならぬなり。されど政治上の必要よりして　陛下には日進月歩の御方針を定め、從來の大政は皇祖皇宗の靈に告げまゐらせ、大御心にのみによりて定められしを立憲國に改め給はんとのことなれば、由來如何に大御心を勞し給ひしか推しまつるも愚なりけり。かゝる時に當りては唯若き盛の　大君のみこそ全國を改革もし、全社會を導きもして立憲制度を確立し給ふことを得べけれ。しかしながら一つには又、將軍家の非政によりて國民は愈

皇帝陛下の御威德を慕ひ、飽く迄之に忠順ならんことを欲したるが故に、　陛下は容易に舊態を打破し給ひて新政を建つるの機運に乘じ給ひしものなるべし。こは實に日本國民に取りて如何ばかりの幸福なりしぞ。今余等日本のかゝる現象を會得せんと欲せば、日本の建國は實に神教に基づきたるものなることを忘る可らず。抑々日本皇室の御祖先は天照大御神の裔にして、天地のむた盡くることなし。而して斯る考へは日本國民の胸中に深く根ざせる所にして、往時は國民等若し神聖なる　天皇の玉體に近づく時は、稜威恐ろしとて大地にひれ伏したる程なるが、國民は京都にて生れ給ひし（一種神聖の地と信じ）今日　天皇を今尙斯々敬ひかしこあり。

かゝる有樣にて　皇帝陛下の御傍に日々奉仕する人々は舊式を固く守り、又宮中の御奧向には守舊の風殊に强くして、總て外面に顯れたる形式の改革を要するものあるも、多くは皆舊慣に執着して之を改むること能はざりき。

然るに政治の方針に就きては變革を來さゞるを得ざるもの多かりしに能々其改革を大成し給ひしは實に　陛下の御大勳と申す可し。されど此等の改革に付きても、　陛下親ら好み給ひて其舊

慣を抛ち給ひしとは申し難く、寧ろ時世の風潮によりて自然推移に任せられしにて、そは却て國家に利ありき。然も　陛下がかく穩かなる漸進主義を執り給ひし爲め、急激なる改革派の諸大臣の經營は蹉跌せるもの尠からず。然るに幸にして京都の宮中に從來忠勤せる人々の中に稀世の英雄生出して遂に帝室を奮ひ立たしめ、數百年來帝室を離れし政權を舊に復して若き御門の御手に入れんと經營する者あるに至りてこゝに御威力振ひそめたり。

されば實に　皇帝陛下の御奮進あるべき時來れるにて、今は靜かに京都に奠座し祭事にのみ從はせ給ひ、或は公卿縉神家より撰び出せる秀媛才姫と詩歌管絃の藝に遊びて安居し給ふべきにあらず。ましてや維新の機已に熟して、內は國民奮ひ進み、又開國の時既に迫りて外には洋夷國扉を叩く、國家の多事なる思ふ可きなり。而して幕府此時に際し土地政治、通商に關する幾多の權利を外人に與へて開國を約しける故、國民上下皆將軍の施政に對して不滿を抱けり。たま〳〵此時先帝崩じて今上帝御踐祚ありしが（千八百六十七年卽ち慶應三年）幸にして御左右には岩倉三條等の賢臣ありて、共に皇室に忠勤を抽でられ、此國步艱難なる時に當りて御踐祚ありし幼主を擁し、能く輔導の任を盡せり。前記の賢臣等は陛下の御從弟（原書の儘）にあたらせ給ふ將軍の政道を先づ改め正さんものと御先代に其ためし無き左の勅諚を江戸將軍に送り給へり。

一、外夷を日本國より擊ち攘ふべきこと

二、勅許を經ずして私に貿易を許せしこと

右勅諚に對して早速御答へ申すべき旨仰せられたり。皇室より斯る督責を發せられしことは千六百三年（慶長八年）家康就職以來未だ曾て例なきことにして、將軍も事の容易ならざるを知り、遂に軍兵を動すに至りたり。然るに皇室に忠順なる薩摩長州肥前等の諸侯に屬する勇健なる士（さむらひ）の忠戰によりて將軍の兵敗衂し、自ら帝室に不順なるの罪を引き、速に官職位階を辭し、且其居城をも立退きて全々私人として退隱したり。かくて將軍の嗣子は今や父の職を襲ふこと能はざりしかば

皇帝陛下は玆に國民の爲めに立ちて親ら大政を執り萬機を親らし給ふに至りしが、彼の淸淨なる神仕（かんづかへ）の往時に兆しては、日々御煩はしさの限りなる可し。されは古をのみこひ慕ふ宮廷の人々の眼より觀るに、かく　皇帝陛下が親ら大政を握り給ふ時は淸淨界たる京都よりして政治の俗塵界江戸に移り給ふを要するが故、是れ神近き淨境（神仕（カンヅカヘ）の身）を捨て人間界に降り給ふなりと。かくも床しき京都を去り給ひて將軍の居城に移り給ふは悲しく痛ましく御嘆きのことなりしなる可し。既に十有餘年を經たる千八百八十七年（明治二十年）に至りても宮中の人々は猶舊都を慕ひ給ふ有樣あるを目擊しけるが京都の噂を言ひ出づる每に歎息のみぞ多く聞こゑし。

かゝる樣なる舊日本の今や世界の國中に立ちて最大國と踵を連ね東西に雄を稱し、剩へ東洋唯一の新大憲政國となるに至りしを見る時は、　皇帝陛下の御身親ら幾變遷を經給ひしかを推し侍るに

難からざるべし。

陛下未だ御幼少にてまします頃の時代に在りては　皇帝は生ける神の如く、人目をもて視ること難く、深く京都の禁裏に在(ねま)して國民は唯其敬すべきを知り御容姿をさへ拜せざりしなり。されば　皇帝は唯國民の上に立ちて此神國の御祭事をのみ司り給ふものにして、將軍が江戸にて執りし政治の如き人間業に　皇帝親ら携はり給はんとは思ひよらざりしなり。而して又非常に嚴格なる儀式の束縛と、公事に携はるの不可能と、　皇室の甚だ高貴なることとは、歐洲の帝王の如く國民を代表して政を執るが如きことを自然に厭ひ給ふに至れり。されば今此理由よりして皇室の內部の福祿が果して外部にて受くる尊敬に伴ひしや否や、又過度の節制が總ての情勢の根本たるに至らざりしやを疑はしめたり、　皇帝陛下には總て內國の御政治向には大に聖慮を注がせ給ひ、殊に火金兩曜日に內閣會議の開くる每には必ずともに臨御ありて、百般の國政を明斷し給ふ。又總理宮內の兩大官は每日　陛下に咫尺しまつりて其日の事共奏聞すれども、其他の內閣大臣にありては日々御前には參らざるなり。　陛下は屢又兩洋室に閣臣を召し集へられ御陪食を命じ給ひ、特に大臣等の歐洲より歸り、或は其他重臣の歸朝等には必ず御陪食の命あるを例とす。

偖　陛下には御政治向に御心を勞させ給ふ傍、調馬及乘馬術に御心を注がせ給ひ、御乘馬の巧なるは宮臣皆敬服せざるはなく、禁苑內には彼方此方に御馬場の設けありて、侍臣を具して馳驅あらせらる。蓋し此れ玉體の御健康に益し給ふ御心なるらん。主馬寮は熱心なる藤波子爵の主宰する所にして、諸事整ひて間然する處なし。子爵は固と京都の公卿にして、帝室に緣(ちなみ)故ありとか。此他總て　陛下の御用は夫々仰せを承り居る侍從官の擔任にして、御軍服掛御勳章掛又は御美術品掛等各かしこみ事務を掌理す。又御身近く奉仕するは貴族中より徵しつどへたる宮仕への女房たちにて、日本古風の衣服を着し、御手水御給仕等に侍りて皆婦人の掌る所なり。　陛下には又深く狩獵を好ませ給ひ、日本古來の方法によりて之を催さゝること多し、余は後章にも猶說く可けれど、概して此狩獵は帝室御料の御獵場にて、或は鷹を用ひ、或は網を用ひて鴨、雁鷺及他の水鳥を捕獲し、漁獵亦此御遊に屬す。舊くよりして狩獵に從事し功者熟練の老主獵官若くは新進若年の面々は忠誠穩良なる主獵局長山口氏の下にありて常に御獵の命を待てり。されど野獸（猪熊等）の狩獵は日本にては甚だ稀にて、余等が所謂狩獵なるものは之を知らずと言ふにはあらねど、獨逸の如く盛ならざるなり。　天皇陛下には余は御儀式の節を以て拜謁の榮を得せしのみなれば御平生を盡くし難し。

陛下が御演說遊ばされしことに付余等曾て承りしことなし。概して日本宮內官吏が外人を宮中に入れ　陛下に咫尺し奉ることを好まざるは、一は儀式の制裁により、一は政體の緣由によるなり。されば請願上申等直接には申し聞ゆるを得ず、皆宮內大臣によりて傳奏すべき御定めにして、唯口

頭の奏聞中僅に譯官（日本宮廷に特色なる且必要なる官なり）によりて直接に上申し得べきことあるのみなり余等日本在任中　陛下の御平生を伺ふに、博く衆を愛し給ひ、御元氣爽快にして稀に諧謔を漏し給ふ。此他猶　陛下の御平生に就きては筆の進むに從ひて記し奉るべき御仁德の數々によりて推知し奉るべし。

皇后陛下

皇后陛下の玉姿すぐれて麗はしく入らせられ、其氣高き御ふるまひは歐洲帝の高貴なる方々に喩へつ可しとは、既に記し奉る所なるが、此君には千八百五十年（嘉永三年）天地草木の裝ひ尤も濃かなる、五月の廿八日を以て、うらやすの平安城京都に生れ給ひ、御諱を美子の君と申し上げまつる。君には人を憐むの御情（ナサケ）と世を知るの才（さえ）とを兼ね給ひ、誠に宮廷の御魂にて、又御魂たるべき君なれば、皇后（ゲビータリン知ろしめす女君の意）の御稱號を奉りたり。御身の長（たけ）は昂からず、やさしき方なれど、大和ぶりの御學と才とは高く豐かにおはすとぞ承りぬる。歌、美術、本草學の御嗜み、これ君の時を過ごさせ給ふ御料なりとか。玆に余等歐洲人の奇しく考ふるは、斯程の君にましましながら、萬の事例に侍る人々の力にのみ任せられつゝ、特に皇后宮大夫と御侍從の婦人に全くよらせ給ふことにて、こは外目にもいちじるく思はる。恐らくは歐洲風（ぶり）を深く知ろし召し給はぬとの御心づかひより、斯くはことさらおくれ給ふにや。そもまたむべなる哉、昔の日本の貴き女の君は申す迄もなく、なべて女は表に出るを忌み給ひしにて、維新の改革このかた始めて歐洲の人々に接するの止むことを得ざるによりて、漸く公に出で來たまひしなりけり、されば今は心あるありて人は夕つ日の西の國の帝后王妃を型として、其樣をならひまねび給はんことこれ切に望み給ふ所なりとか。獨逸帝の后普魯亞王の妃アウグスタは日本の皇后陛下には其善き例（タヽシ）なるべし。日本の皇后陛下が國民の教育に御心を注ぎ給ふこと、病者御扶助のこと、赤十字社を率ゐ給ふこと、外交の庭に出で給ふこと、東京の朝廷を音づるゝ數多き外國の王公貴妃に接し給ふこと、時勢人心の進歩を與かりと思ひはかり給ふこと、およそこれ等を伺ひ奉れば　皇后陛下の御心ばえの如何に尊く慕はしきかを知る可し。而して前にかゝげつるは皇后の日に御心を注ぎ給ふ所にして、いやが上にも其全からんことを欲して獨逸皇后の例など鑑み給ひしは誠に益多かりしことなからん。一度皇后陛下の聖容を拜し奉るの幸を得たる人は、如何に君の御慈悲深くましますか、如何に坤德の變らせられざるか、如何に氣高き御心を備へ給ふかに深く感じて畢生忘るゝことなかるべし。

皇后陛下美子の君は御先代の皇后と同じく五攝家中の一家より上り給ひしにて、日本にては皇后は總べて前の五家中より選ばるゝの定めにして、此五つの御家すじは何れを高しとし低しとするの差なく、京都公卿の最も古き御門系なり。此數千年を經し御定例は今も猶かはりしことなく、現に

皇太子殿下の御妃も亦五攝家中より入内ありたり。　皇后陛下の御生家は藤原姓の一條家にして、其他の四家と申すは近衞家、又皇太子妃殿下の御生家たる九條家、此御家よりは皇太后陛下も入内し給へり。之に二條家鷹司家を合せ、總てを五攝家と稱す。當時伊藤大臣は德川家を五攝家と同じ列に加へんとの考へありしやに聞きゝしが、余は此の如き宮廷の心に反せる提議は其成功覺束なかるべしと思へり。

偖今筆の序を以て當時江戸の德川家が如何に熱心に京都の御定めに倣はんとせしかを知らしめんため記さんに、德川將軍家に於ては御三家と稱する三つの家すじを特定し、京都の五攝家の組織に同じく、將軍の御臺所は必ず此三家より選ぶこととし（原書の儘）若し又將軍に其職を繼ぐべき男子なき時は、御三家より出でゝ將軍家を襲ふの定めとせり。御三家とは元德川家より出でたる水戸、紀州、尾張の三分家なり。

唯前々代將軍の御臺所は皇室より御降嫁ありて、實に孝明天皇の御妹君におはしまし、兄天皇の崩御後猶十年の御齡を添えられ、千八百七十七年（明治十年）に薨去ありて、芝公園に御埋葬の式を擧げたり。斯る御緣によりて慶喜將軍は今上帝の御從弟（原書の儘）に當らせらる。

皇后陛下には御出生の御子入らせられざれど、千八百七十九年（明治十二年）八月三十一日を以て東京に生れ給ひし明宮皇子今の皇太子殿下の御正母に當らせられ、其御教育に付きては厚く御心を注がせ給ふ。日本朝廷に於ては（國民一般亦同じ）數多の后が皇室の御內人となり給ふ習慣にして、其御出生の御子も　父の君の御許によりて皇子たるは勿論、御位をも繼ぎ給ふ御諚なり、古來よりの御習慣として、皇帝には御心に任せ、十二人まで后を入れて宮中に侍らしむるを得、又そを撰び給ふには皇后にも御與りありて、皆貴き門閥より出でしもののみに限られたり。余等が仕へ奉りし當時には五人の后ありて其一は賞勳局總裁柳原伯の息女にして、皇太子明宮殿下の御生母なり。他の五皇女と近頃御かくれ遊ばされし御末の皇子も皆后たちの御腹にて、皇子を生み給ひし后は典侍に、皇女を生み給ひし后は掌侍？に任ぜられ給ふ御定めにて、斯く迄昇り給ふには又數等の階級を經るを要す。

此等の貴婦人は他の宮女と同じく常に古風の日本服を著し給ひ、殿中にて人の前に出で給ふことは甚だ稀なれど、若し出で給ふことあれば人は大方ならず之を敬すること東洋一般にして、殊に土耳其國に於ては帝の后を尊ぶ風いちじるし。

皇后陛下は別殿に住まはせ給ひて、御殿の御飾り唐草御紋章等又ことならざる思ひあり。御食膳も常には別に羞むれど、　兩陛下の共に聞こし召さるゝこと又多し。古來よりの御ならはしにて、　皇后陛下には夜を隔てゝ御寢殿に參り給ひ、其間の夜は后たちの殿居にて、偖后たちの侍り給ふ序次は京都にては宮中に勢盛なりし尙侍の定むる所によるなり。さるに此尙侍の勢あまりに盛

なる時は、或は政治上の妨げとなり、或は　皇帝に御不便宜なることあるにより、尙侍の官は明治元年の維新以來缺位となりて今尙之を補はず。

かゝる舊來の見解組織、風習は歐洲人には甚だ奇異なる感あれど、日本人には決して不思議に非るなり。されど日本人も歐洲人の耶蘇教主義を知るが故に、此事情に付きて口を箝ぎて多く語らざれども、余は玆に全く之を看過するを得ず。何となれば余は時々此等の事に關して談話する所あるを聞き又文明史上に於て甚だ興味多き問題なればなり。

又他の一種特色なる風習の京都より江戸に傳へられたるあり。そは孝德を顯はすべき慣例にして、皇太后陛下の御席次を皇后陛下の上に在らしむること是なり。古は世にまします　皇帝陛下が御位を禪り給ひて、親ら御閑遊の御身となり給ふこと往々ありしが、御順次は之が爲めに變ぜず、先代の老帝は常に後代の天皇の上に坐し給ふ皇后も亦之に同じく同じ世に兩　皇后ましますの時は、先代の　皇后上座を占め給ひ、當代の　皇后之に次ぎ給ふ御掟なり。此順次は世に能く知られたる如く、露國皇室にても同じ定めなれど、日本に於ては　皇太后陛下と　皇后陛下の御同席なる場合稀なれば、かゝる御定めの實用さるゝこと甚だ少し。既に記せる如く　皇太后陛下には曾て歐洲人を御引見遊ばされしことなく、又外國人の陪席せる御儀式又は饗宴等に出て給ひしことなし、唯純粹なる日本流の饗宴にて　兩陛下の暫時御同席のことありしが　皇后陛下には式の如く其席を讓り給へり。そは余が日本に滯在中ありし事にて、德川公爵が東京の自邸に　皇帝陛下の臨御を請ひまつりて大饗宴の催しありし時なり。此催しの初日には德川の舊臣に流鏑馬を演せしめて　皇帝陛下の聖覽に供し、第二日には能樂を催して　皇太后皇后兩陛下の御覽に供したり。

こゝに又　皇帝皇后兩陛下の御同等にましまさんことは、未だ日本人の思ひ及ばざる所にして　皇帝陛下には　皇后陛下より一段の高きに居らせ給ふとは、皆是れ一般人民の信ずる所なり。されば　兩陛下の同時に出御あるが如きことは成るべく之を避くることとし、彼の歐洲の風に倣ひて　皇帝皇后兩陛下の御同車に召させらるゝは誠に異例の御沙汰なりとす。されば遠遊の外國王子に歐洲風の饗應ある際、現今の如く　皇帝陛下が皇后陛下の御腕を把り給ふに至りしはなか〳〵容易の業には非ざりしなり。

皇帝陛下に斯く新なる御ふるまひを願ふは其始め實に六ヶ敷して、往々首相宮相の相談を要し、屢懇願を重ねたる上漸く日本流の考へにては異(おかし)けれども、歐洲風にては是非然かせざるを得ざるが如き作法を　皇后陛下に對してなし給ふことゝなりたり。されば日本古來の風習と歐洲の作法との差異が、宮中に如何に混雜を感せしめしかを推す可し。日本の作法と歐洲の作法とは實に正反對なりと云ふなる可く、時としては到底調和折衷の道を見出すこと能はざるなるなり。

偖　皇后陛下には其坤德の大なるによりて宮中擧て渴仰尊敬するの御身となり給ひし而已なら

ず　皇帝陛下が此方あり精神あり名譽心ある國民を御し給ふに當りて、　皇后陛下を此上なき內助と思し召し給ふに至りたり。今當時　皇帝陛下の御側近く仕へまつりし人々を擧ぐれば　皇太后陛下の御兄君なる强乎たる日本古風の公卿九條公爵（掌典長）及び同じく古風の貴紳侍從長德大寺侯（後の內大臣）あり、又大膳大夫岩倉公は年猶若く歐洲の教育を受けたる方にして有名なる大臣岩倉公の一男なり。內大臣は三條公にして前の大政大臣なり、京都公卿の出身にして賢明且淸肅なる人にして其風采は獨逸第三の總理大臣ホーヘンローヘ公に似たる所あり。三條公は皇室に御緣故あり、且親しき御仲合にて岩倉公と同じく維新の際大勳を立てたり。公の當時世に尊敬されしは其官職に因るのみに非ずして實に國中第一を以て稱せられたる人なり。

さるに公は漸々人世に遠ざかり、日本帝室の重臣たる西鄕伯（後に侯爵）之に代れり。伯は其兄老西鄕が千八百七十七年（明治十年）薩摩に亂を起せしに與みせず、帝室に忠誠を致せしかば政府は大に之を德とせり。こは他日西鄕侯が宮中に於て特別なる席次を得たるによりて知る可く、千八百九十年（明治廿三年）後は宮中の御式の時は宮殿下と最高勳章を有するものとの間に其席次を占め、又陪食の時に際しては特に設けし食卓に就ての榮遇を受けたり。余が日本にあるの日は侯は海軍大臣の職を奉ぜしが、其容貌魁偉にして廣額巨頭なる一見其豪傑たるを知る可し。斯の如き人にして一言の歐洲語を解せざる又實に世界に稀なる人なる可し。侯は其容貌のいかめしきに似ず體質强からざるものの如く、千八百九十一年（明治廿四年）（原書の儘）日本に流行せるインフルエンツアに罹り、遂に高年に達せずして薨去せり。侯の長女は岩倉公の令息に嫁せり。

皇后陛下に奉仕する典侍には室町伯の息女正七位室町氏高倉伯爵の息女正七位高倉氏あり。皆懇切なる愛嬌多き圓滿なる貴女にして、殊に高倉氏の微笑を湛えられたる其麗しき昔を忍ぶべく、曾て　皇帝陛下の御側近く仕へられしことありしとか。又掌侍には英語に熟せる北嶋孃、及佛語に熟せる大山伯爵夫人の妹山川孃ありて、共に常に誠實を以て　皇后陛下に仕へ通譯を勤む。此他猶奉仕の女官多く他日香川皇后宮大夫の息女も其一人となりしが、余等が在任の頃は歐洲語を談々し得る者甚だ少く、主として內部の勤務に從へる者の如し。當時余等は同僚の日本人を自邸に訪ひしが男子も多くは和服を着し、女子は皆殆んど和服を纏ひたり。之を以て考ふるに恐らく自宅に安居する時は寧ろ好みて和服を着し、出てゝ公務を執るに際して特に洋服を用ひるならん。

偖こゝに宮家の第一たる有栖川熾仁親王殿下は其莊麗なる第宅（半部は洋館半部は日本造）に於て盛なる舞踏會を催されしが、今や此會を機として余が助言を實際に試みんとせり。抑かゝる會合に於て來客の混雜を防がんには先づ來賓中に就きて舞踏するものとせざる者とを分ちて各便宜の席に就かしめ、又閣下と稱すべき貴顯は之を別室に案內するを可とすべし。されば豫め斯く準備せしが、やがて雲の如く叢れる東京中の來客は皆洋裝にて來會し、殊に一層目立たるは各宮家より盛裝し

給へる貴婦人と、軍服を着け給へる各宮殿下の共に來臨し給ひしなり。主人たる親王殿下及妃殿下は總べて來客の集りし後始めて會場に出でゝ種々御挨拶歡談ありしが、人々はそを新案と稱へたり。伊藤伯爵も亦此夜の席に在りしが穩和單純例の如くなりき。

從來宮家の方々は神官若くは法親王などになり給ふ者多く、軍事には全く關係し給はざる慣例にして、軍事は武士（サムライ）の階級に在るものの從事する職なれば、高尚なる宮家には適せざるが如く考へられしに、今斯く各宮殿下が皆軍服にて參會し給ひ、剩へ然も宮家の貴婦人方は金銀寶石の美を盡したる盛裝のことなれば、之を目擊せる日本人には實に異樣の感を起しつゝならん。將軍の時代には流行を追ふ盛裝贅澤は固く之を禁じたる法令さえ出來しことあるなり。此舞踏會は盛なる會食を以て閉ぢられ來會者又皆滿足を表したり。

偖余等は家の整理を付けんと遙々携へ來りし荷物を開き見るに、海運中に鏡は破れ家財は毀れ、又大切なるピアノは荷造のまゝ庭に出し置きし內、一夜雨に逢ひて濡れそぼちたる等失望せること多かりしが、稍々室內の整理終りし故、今はとて宮內省に出でゝ職務に就きたり。宮內省にては省中の庭に添ひたる一小室を余の事務所に當てられしが、室の甚だ立派なるに似ず、据え付けられたる卓子及腰掛は甚だ粗末なるものにて、ワイマー國のトーン製造所の製品なり。此室は長廊下の末端にありて人出入多き宮內大臣の室より遠く離れ、又宮中の內部の見えざるやう十分注意して圍はれ居るが故に、直接に宮中との交通をなすこと能はざるなり。室の內部は黑緣を打ちたる金の張壁にして、天井は低けれども黑塗緣にして、且周圍には靑銅の釘かくしを打ち、金襖の把手は菊の御紋章を表はせる精巧なる靑銅なり。蹈石は竹垣を繞らせる庭內に步み入るの便となり、植込み、小池、流水、石燈籠等ありて庭の廣さは實に數步に過ぎず。人の語る所によれば此金色を以て飾れたる室はもと有栖川熾仁親王殿下が參內の節其休憩所に充てられたるものにして、近頃不用になりしものなりと。北室の一方、園に對せる硝子戶を開く時は花咲ける樹々を視る可く、鳥の囀る聲は虫の音に和し、太陽は穩かに室內の金色と相暎じて甚だ長閑なるを覺え、密叢せる生墻を透しては綠蔭中ほのかに紅袴の閃くを見る可く時としては宮女の嬉々として庭中を步むを垣間（かいま）見ることあり。

此閑室に於て沈思すること時は此奇異なる然も最も文明なる日本國に就きて深き感慨を生ぜるを得ず。而して恰も此室內の周圍の古き日本流なる工作は益々余の感情を高むるの基にして、余は實に此歐洲風なる修飾によりて此室內の優美なる雅味を沒却せるを悲むものなり。余は今深く日本の爲めに同情を表せざるを得ざるは、一面に數千年來の優美なる風習慣例と共に、善美なる風土精巧なる技術を有する日本が、他面外國との交際によりて或必要を感ずる限り從來の風習慣例を改廢せざるを得ざること是なり。而して既に歐洲風を模して不完全に設備されたるものは之を矯正補足して趣味あるものとせざる可らざること勿論なる可し。私邸に於て多く見るが如く、宮城も亦和洋二

種の建築に分る。日常御起居の宮廷は　皇帝陛下皇后陛下御兩所とも純然たる日本造にして、壁は黄及白にして金色を使用すること少く、木品は皆素木にて床に敷ける疊の緣は白色に黑模樣ありて總て宮內の御裝飾御器具等苟も此に用ひらるものは京都宮殿の模範に則りしものにて、數千年來の慣例と永年變更す可らざる定式とによりしものなり。　兩陛下に御食膳を供する者は皆女官にして、跪座すること勿論なるが、其他些少なる御用事と雖も(歐洲朝廷にては給仕の掌る可き)　兩陛下に對して奉りて直接に御用を便するものは唯貴族の子弟に限らるゝなり、政府及宮內の高官の人と雖も宮中に參りて兩陛下に咫尺し奉るには必ず伏拜せざる可らず、されば歐洲人は決して禁內に入ること能はざるなり、官女も亦御前に於ては必ず膝行す、此宮城の御建造の丸木造にして神道廟(原書の儘)卽ち皇祖の大廟に似たるを見ても知る可きなり。

前に反して內閣會議の場所と內外國人に謁見を賜はるべき所とは皆之を歐洲風に設備せり而して謁見を仰せ付けられし人及其事務に關係する者は皆洋服を着し又宮中の官吏には禮服雜役者には制服の定めありて廐も之を洋風とし馭者及雜役者に至る迄皆洋服を着すれども其樣甚だ不完全なり又陶磁玻璃にて造れる皿コップ等の器具は歐洲風の饗應の爲めに備へられ銀器は無趣味にも洋銀を以て代用せられたり之を要するに宮中には諸物豐かに備はれりと雖も肝要なる注意を缺きたるが故斯く甚だ沒趣味なるは畢竟是れ當事者其人を得ざるに因れり而して斯の如き事情は漸を追ひて益明になりしが故にこゝに於て大に善良なる助言者を要するなり、余は先づ宮內大臣伊藤伯爵に謀りて如何にせば　皇帝陛下が獨逸朝廷の實況を御推想遊ばさる可きやを考究し先づ普國王室の宮廷と其組織とを模範とせんことを欲したり。

公務

余が公務を執るに當りて其據とせる所はステイルフリード氏の著述せる「普魯西王國の宮廷及政府」と同「普國宮廷の儀式」との二書及びマロルテイの著書「宮內長官」の數章を拔抄せるものにして後又ヘルマン、シュルツヱ氏著「獨國貴族家憲」をも加へたり。

余は每朝十時頃前に記せる宮內省の事務室に出頭せしが或は乘馬なることあり人力車なることありたれど雨天には(往々水潦を生ず)馬車を用ひたり、長崎省吾氏は式部官にして當時宮內大臣秘書官をも兼ねしが余と共に事務を執る爲め余が室に來るを常とせり余等は先づ「宮廷及政府」の書中より普國の宮廷及政府の一般の制度に關する部分を拔抄し余は之を長崎氏に英譯し且說明せり而して長崎氏は其聞きたる所を望むらくは正しく會得したる所を更に日本語に譯して之を筆記せり。

或る章の如きは又儀式書をも引用することゝせり例へば忌服に關すること或は勳記に關することなどにして、勳章のことは之を好める日本人の先づ第一に研究せる事柄なりしなり。

毎日晝十二時半迄は前記の如く執務しそれより食事をなさんとする者は省中の一室に設けたる食堂に行くを例とし省内の官吏殆ど茲に集り來る食堂には二列の食卓ありて一を勅任卓とし高官の者之に座し余も亦之に列れり他を奏任卓とし前に列せざる總ての階級の者之に坐す此席に列する諸氏の禮儀に篤く且懇切なるは言語に盡せぬ程なるが恨むらくは日本語に通ぜざる者は深切なる隣席者の歐洲語に譯する者あるに非るより此食卓に於ける趣味あり且愉快なる談話に與るを得ざるなり余が日本語に通ぜざる爲め斯の如き場合に於て幾多の益を得逃したるは常に遺憾とする處なりき。此省中に於ける食事の爲め賄者は列席者より月々僅少の金を醵出せしむ。

午後に至れば長崎氏は余等が午前に仕上げし部分を日本語に重譯し大なる支那文字を以て之を記し猶其筋の者之を國簿に記錄し宮内大臣を通じて　叡覽に供さるゝ由。

此研究に付き宮内大臣の意を留めしはひとり宮中の組織のみならず軍事費國事費の關係宮内省と宮内式部寮との權衡會計檢査院と國務省との關係宮内の長官次官及官吏の任命、目的事務、　兩陛下の宮中の組織及王室の他の官吏、宮女官女及使用女の地位、報酬、皇子、皇女の教育其他貴族に關する家族法例へば長子相續、分家諸子同權等數多の問題なり、殊に財政の事に關して帝室御料を國家に交付すること帝室費、皇后宮歳入、皇子皇女及各宮家の世襲財産支給の確定、帝室會計審査局、内藏寮寶物取調局等の設備會計檢査院をして帝室會計を監督せしむる方法（普國の例に倣ふ）又宮内高官の俸給の高額及總ての宮内官吏の俸給等皆日本朝廷の注意せし所なり而して我が宮廷（普國）に俸給を支給せざる幾多の名譽官あるは甚だ意外とせしものゝ如く長次官侍從長及侍從が無報酬なりとは殆んど考へ及ばざりしなり然も實際我が國（普國）にてはさる場合甚だ多きことなるが此組織は日本人の從來の思想に合したる故大に之を聞きしことを喜べり。

其他又深く政治界に入りて種々なる問題に付きて例へば内閣（樞密顧問官）の組織又其會議に宮家の出席及議會の諸問題貴衆兩院の聯絡等に付說明を求められ且其梗概を記せんことをも委囑されたり少からぬ文書は今日尙宮内省の記錄所に埋沒し居らんと思はるゝがそは余が在住二年間折に觸れし時によりて起りたる種々なる問題に就きて記述したるものにて余が未兩親の家にありし頃先考ロペルト、フヲン、モールの口づから語り給ひしを若き時より記憶し居りしが不圖も此時に大なる用を爲したり。偖午後は家に在るか若しくは散步を試みて時日を過せしが東京市中又は近郊に於て種々興味多きことを見聞せり先づ第一には　皇后陛下が新に建設し且之に保護をも與へ給ふ病院の開院式なりしが伯林なるアウゴスタ病院は定めし其模範たるの用をなしゝならん　皇后陛下には宮中の女官を從へて行啓ありしが各宮家の貴婦人は固より多くの招待客來集し　陛下にはこれらの人々に謁見を給ひしが其しづまり給へる重々しさと慈愛深き御氣色とは偵にたち上りて日本一人の御女性とこそ見受け奉りたれ。

陛下には新に調へさせ給ひし見事なる御箱馬車にて行院ありしが此御車は英國にて造らしめられ日本にて上漆塗をかけ金色の御紋章をも附けしめられし物にて實に華麗なるものなり。

陛下が病院に上がらせ給ふ後別當は直に馬を外し白布を以て全く車臺を蓋へりこは一は塵埃を避くると又群衆の御車を見んとて混雜し來るを防ぐなり　陛下御降車の後斯く白布を以て車臺を蓋ふことは此後余は諸所に於て目擊せり。

此病院は固より健康に適せる地を撰みて廣き園中に新築され始めより此目的に適するやう計畫されたるものなれば實に批難すべき點なく伯林のアウゴスタ病院に比すれば其周圍の餘地甚だ多く且準備萬端大に優れり東京大學に於ては既に多くの學識ある醫師を養成し適當なる位置を得て內外科の醫師となり其技倆を試みんことを願ふ者多し就中日本醫師の頭領として最も有名なるはドクトル橋本博士にして軍醫總監の職にあり兼ねて帝室の侍醫をも務むる人望隆々たる國手なるが此博士は實に此病院院長の大任を負へり博士は伯林及維也納に勉學せる人にして巧に獨語を繰れり。此式場には舊大名中の歷々たる諸侯參列せり先づ長州の舊領主毛利公次は蜂須賀侯爵にして其夫人は德川家の連枝水戸侯の妹なり。侯爵は巴里馬德拉（マドリット）、里須本、ブリユッセル、ベルン等の公使に歷任し風采剛毅なるが如く明敏なる頭腦は金色の眼鏡と共に輝きて全然歐洲人の如き觀をなせり當時は賜暇歸國中なりしが後侯爵は歸朝して貴族院議長の重任に當られたり。此兩大諸侯卽ち毛利公蜂須賀侯は式部長官鍋島侯（肥前の舊諸侯）と同じく宏壯なる東京市內の邸第に住するが故屢斯の如き會場に參列すれども他の諸侯例へば日本第一の貴族と稱せらるゝ前の將軍の繼續者德川公の如きは參會甚だ稀なり、薩摩公は鄕里の首府鹿兒島に在住するが故に唯特別なる場合のみ來京す。

ヘッセン伯

世界漫遊の途に上れるヘッセル伯（單に爵位を有するのみならず領土を有す所謂國持大名の如し）は五月中旬日本に來遊せり伯は千八百五十四年（安政元年）に生れ名をフリードリッヒ、ウイルヘルムと稱し普國の故カール王子（伯林に住せり）の孫なり此機に際し日本宮廷は玆に外國貴賓を迎接するの模例を示さゞるを得ず伯は獨逸公使館內に宿泊しホルレーベン公使の斡旋により　皇帝陛下皇后陛下に謁見し式後鄭重なる饗宴ありしが此御宴は謁見所より長き展覽室を通過して至るべき食堂にて催されたり（赤坂御所內）

迎接準備の詳細は會議を開きて先づ献立より席次及び展覽場を御案內すべき官女等を定めたり。偖饗宴は始められしが時を經れども終らず獨逸の慣例によれば永きに過ぐるの嫌ひありしが如何なる御催しによるにや　皇帝皇后兩陛下が伯爵との御談話は兩陛下の後方に立てる式部官大命を承りて之を英語にて伯爵に通じ伯爵は又英語にて御答へ申上げたり、御食卓は花飾りの爲め實に見事

なる觀を呈したるが恨むべきは御給仕に侍りし人々が唯制服を着たる宮内省の課員と云ふのみにて迚も御給仕の役を果すべき模範とは云ひ難き人々なり皿、肉刺、小刀等は給仕所の卓下に投げられ其喧しさ堂内に溢るゝばかりなり唯茲に賞讃すべく歐人も之を模範とすべきは食卓音樂の準備なり此帝室の軍樂隊は硝子戸を以て隔てたる所に奏樂所を設けたれば其音樂の優美なること誠に云ふ可らざる味ありて蒸すが如く騰つが如く聞え來る音樂は實に軍隊の遠きより近きに來るが如く自然を極め天然を模し微妙又言ふ可らず之を彼の銅羅喇叭の囂々に比する實に天淵の差と評すべし然も歐洲の宮廷にてはまゝ喇叭銅鼓等の喧噪なる音樂に脅かさるゝことあるなり。

此他當日の所作に付きては余は其批評を記述せしこと觀兵式の講評の如くなりしがこは實に余が第一に經驗したる歐洲貴紳の迎接にして此批評は伊藤伯爵により或は奏聞の榮をも荷ひしか。

ヘッセン伯爵は猶數日逗留し諸所より相應の饗宴ありしが就中北白川宮殿下の莊麗なる邸第の招待外務大臣青木子の饗宴、ホルレーベンの大夜會余が鹿鳴館に招請せる饗應先づ數ふべき招應と云ふ可しさるにいと惜むべきは獨國の黑鷲章唾馬の白象章を有する伯爵が日本に於て菊花綬章を得る能はざるの一事にして日本にては此綬章唯國君にのみ與ふる例なれば素大名に等しき伯爵には與ふ可からずとの說なりし故此伯爵の近親が皆歐洲の國君なるの例を擧げて之を論爭したれども遂に其効を奏する能はざりき此不幸なる伯爵はよし勳章を得たりとするも長く其榮譽に誇ること能はざりしならん何となれば伯爵はバタヴィア、新嘉坡間にて船窓より身を海中に投じ其一生を畢り給へり、さりとて日本滯在中は大なる狂ひは勿論、少しとも怪む可き跡の人をして斯る終を取らしめんとは思はしめざりしを痛ましきことの限りとや云はん。

偖伯爵を饗應せる經驗によりて先づ第一に斯樣なる場合に馴れざる男子の宮人に一層深き訓練を與ふるの必要なること明白となれり依りて此道に堪能なる者を聘せんとし先づ獨逸の宮内大臣シュライニック伯家に奉仕せる伯林の割烹師に交渉せしが其談判は遂に不調となりしが後東京に於て頗る適當なる人物を求め得たり。そは近頃東京にて死去せる露國公使ダヴィッドフ氏に仕へし人にて同公使の死去後一時伊藤伯の許に寄食し、其技倆を顯はすの機なきを歎じ居たるデウェッテ氏にして、此地位には甚だ適當なりしかば、多額の俸給と住居とを與へられ數年間の契約にて聘用され其結果幸に善良なるを得たり。

然るに宮中の御膳部は毎日日本料理にして唯外國公使若しくは外國貴紳に對する時のみ洋食を命ぜられしかば、洋食の御用ある折甚だ稀なりし故、更に洋食の給仕として奉仕すべき宮内官吏を練習する爲め、一週二回づゝデウェッテ氏の指揮により、假の饗宴を設け、空の食卓にて給仕する練習をなすべき必要起りたり。デウェッテ氏は此事に付き頗る熱心に從事せしかば、從來寂寞を極めし宮中の食堂も火木の兩日は膳部長デウェッテ氏の命令にて大に賑はひ、又其練習として皆々給仕

に熟達し、此後宮中に招かれたる貴紳より大に其熟練を嘆美せらるゝに至りたり。

皇后陛下の御誕辰祝（地久節）

五月二十八日　皇后陛下御誕辰の祝賀式ありしが此時　陛下には早朝より御内廷に於て宮内官吏の拜賀を順次御受け遊ばされたり。私かに見上げ奉りしに　陛下には多くの洋裝せる宮女に侍られつゝ其中央に立ち給ひ、御室の硝子戸には　陛下の御德にも喩つ可き長閑なる春の日照り渡り宮内大臣伊藤伯皇后宮大夫香川子は御兩の脇に奉侍し　陛下には穩かに祝賀申述ぶる人に御言葉を賜はり數ならぬ余が妻の如きも亦其榮に預りて、漸くまさりゆく御慈愛を嬉しみつゝ罷りたり。祝賀申上ぐる人は引きも切らず午前中打ち續きしがそれの終りし後は別に何の御設けもあらざりし樣承れり。

偖余等は早や永田町の住宅へ移り得可きこととなり、其準備亦速に運べり。余等は亦毎日在留の外國人を訪問し、就中獨逸人の許へは屢尋ね行きしが爲めに多くの知人を得彼方よりの訪問亦頻煩となり、其中には今日迄其交際を續くる者亦少からず。當時日本に在留せる諸外國人の中にて尤も勢力ありしは獨逸人及英人にしてこれが爲めには英國公使サー、フランシス、プルンケット及其夫人（米國婦人）又其後繼者たりし代理公使ル、ボエル、トウレンチ氏與りて大に力ありしなるべし。

雅樂部及演劇

六月一日余等は始めて宮廷中に興味深き練習所あることを知りしが、そは京都時代より存在して東京に移されしものなるが、今や日本政治家の革新熱の爲め其存在さへ覺束なきに至りし雅樂部にして、雅樂部の部員は同時に又演舞者にして世々其業を襲習するなり。

耶蘇紀元以來猶分明には千六百年來日本宮廷には古服を着けし支那傳來の演舞及奏樂を採用し、宮廷内の雅樂部に於て今日迄殆ど變化なく保存し來れり。同部に附屬せる東京の奏樂所に行きて其演奏を聞く時は是等伶人が技倆の造詣する所を知るを得べし。特種なる古琴及太鼓を以て奏する樂は吾等歐人の耳には決して喜ばしき音に非ずして、其全く異なれる調及音節は吾等には寧ろ喧噪の思ひあるなり。

されど全體より云ふ時は一種歴史上の價値あるが故、今此特殊なる音樂と模樣ある華麗なる珍しき服裝を着けたる演舞（拍子に合せし動作）とを廢せんとせしは大なる誤りなりしなる可し。日本人は余に此演奏は歐洲人には滑稽なる思ひあらずやと問ひしが、余は決して然らずと答へ、余は却て此雅樂部を保存し且其保護を謀らざるべからざることを斷言するものにして、他日此特色ある演奏を宮廷に用ふ可きの機あることを告げたり。而してそは果して事實に顯はれ來り、今日にても猶

宮中のいかめしき御式には殿中に特に設置せる樂壇にて雅樂部の演奏ある例となりしが、余は舊日本の一節を宮中に保存するに與りて、聊か力ありしことを喜ぶものなり。

余は其後間もなく東京の名だゝる料理屋、伊勢源（原書イセゲンヨ）にて藝者馳走の音樂を聞くの機會を得しが、そは前の神佛的雅樂及雨だれ的能樂に反して甚だ俗なるものなり。

余等が此音樂を聞くを得しは獨語の御上手なる御如才なき丹羽式部官の御招待によりしにて、此藝者の音樂にも亦日本の踊子の靜かなる動作の舞ひありしが、或は扇を飜へし或は美しき廣き袂を打ち振りて繪にもかきたらんやうなる舞ぶり、小松さん（原書の儘）とは此美しき踊子の名なりしが、燭臺の恍惚なる光の前にて其舞ぶりを余等に見せぬ。偖此席に出されたるは米より釀造せるおさけと申す飲物にて、其微溫なるを陶器の小さき杯に注ぎて頂戴せしが、偖溜らぬと云ふ程に興を催せしと云ふ譯にてもなく、又なれぬ疊の上の坐りかたは歐羅巴人に取りてはあまり勝手宜しからざりし方なりしにも拘はらず、此御馳走は一種奇妙の興味ありけり。

前の如き宴會は其後打ち續き殊に紅葉館の華麗なる日本間にて、屢日本の知人より招待されしことありしが、此他余は猶屢新富座の劇場に行けり。劇場は高貴の人々の嫌厭する處にして、元來日本の俳優なる者は社會の最も卑き地位を占むるものなるが故に、斯の如き者の演ずる技藝を見んことは宮廷人の思ひもよらざる所なり。されど余等外國人は斯の如き日本人の解釋に顧みるの要無ければ、若し余等の其内容の幾分を解し得る演劇なる時は喜んで劇場に行きたり。當時の演劇に於ける總ての役は皆男俳優によりて演ぜられ、未だ女優なる者無之又戯曲は多く歴史上に關する者にして長時間續き午前より開場して一日に亘れり。

看客は土間一杯に設けたる桝の中に坐したるが、余等は棧敷より此建物を見渡せしに、全體の見物場所は恰も教會堂の坐席の如く見え、舞臺は圓形にして道具（景色）の變る毎に之を廻轉し得るなり。俳優は看客の頭上に横はれる長き橋を過ぎて（花道を云ふ）片側の口より出入せり。

偖今舞臺の光景を見しに、勿論古代の飾り付けなりしが、有名なる歴史上の事實若くは傳說を演じたる者にして、看客は皆感激賞嘆し終日其續曲を見て猶飽かざるなり。俳優の技倆は巧妙にして自然に協ひ、若し肝要なる臺詞の處に至れば實に感に堪へざる所あるなり。言語の通ぜざる歐人には興味固より深からざれど、日本人の注意する樣子を觀察する時は如何に其技に心を奪はれ居るかを知るに至るなり。アレキサンダル、シーボルト男爵は余等を伴ひ行きしのみならず、且懇切に其戯曲の内容を說明せり。そは卽ち家康將軍の時代大阪に於て一貴女と其二子の自害の場、其二幕目は賴仁王の遁逃にして、僧より通券を貰ひ之によりて落ち延び關所に至り幾多の問答の後漸く其關所を通過するの條を演ぜるなり。

六月は東京に於て堀切の茶亭を訪ふ可き時にして、そこには實に見事なる庭園あり、杜若滿開し

て實に美しき眺めなり。此月は若し雨天に非ざれば實に良季節にして、綠蔭濃かに地上の眺め總て豐かに爽かにして殊に美しく長き莖に咲ける花輪は（杜若を云ふ）誠に稀に見る所のうるはしさなり。

余は同日又堀切より人力車に乘じて隅田河に至り草木の芳ばしき園中に建てる別莊の主人深切なる若き宮內官吏式部官松平子爵を訪へり。子爵は固と德川家に緣故ある人にして、榮枯盛衰定めなき時世の變遷に關しては悄然として語られしが、飜然として又慨る所あるが如く、懇切に余等を待遇されたり。維新前子爵の父君には城廓を有し國土を領し江戸にも又居殿ありて多くの臣僚を養ひ飛鳥弓弦の昔に落つるの勢ありしに、其後繼者たる子爵は僅かに別墅の主人たると宮內の官吏たるとに過ぎざりき。日本流なる大工が綿密なるは既に人の知る所にして、此別墅も亦良材を用ひたる精巧の建築にして、塗障子の美なる新疊の綠なる甚だ快心なる所、主人松平子は余の爲め家傳の珍寶を見せんと余等が階上に在りて茶を啜ひ氣を吸ひ休憩せる間子爵は箱を開き被を解き其家の紀念なる珍寶を取り出せり。

劍及刀是れ日本人の神聖とする處、然かも美麗なる塗鞘を添へたるが今更高尙なる有名なる刀鍛冶の槌音を聞くの心地す。象眼入若くは蒔繪の手箱、古渡陶器、北齋及其他の有名なる畫家の軸物、見る每に目を眩せざるはなし。此珍寶中歐洲古代の蠻況を畫ける陶器あるは殊に記すべき價ありて此畫によれば歐洲人は尾を有し、水牛に似たる角を有し、且赤き舌を吐けり。此等の寶物は一年に唯一回日光に曝すのみにて、こは過去の記念且は余が家の記錄たれば、余は注意して是等を曝出するを喜ぶなりと、伯は（原書の儘）語られたり。此懇切なる主人公は永く余の宮中の信義ある同僚として存在せり。

官等及爵位

偖今は既に屢記せる爵位に就きて聊說明するの時機なるべし。余の聞く所によれば、日本に於ては既に古代より官位及爵位ありて、總て支那の模例に倣ひ漢字を以て記し來れりと。然るに又歐洲より現に英國及佛國に用ひらる爵名プリンス、マルクイス、コムテ、ヴイコムテ、バロン等の稱號あるを知り、之を日本支那舊來の階級に當て公侯伯子男と譯し之を授與允許するの權は困より　天皇の握り給ふ所とせり。デユーク、ヘルツヲーク（共に元帥の稱號）は日本にては當時之を採ることを避けたり。蓋し是等の稱號は國主なる意を有するが故にして、これ政府が最も厭惡せる記號なればなり。而して上の如き見解の今猶存するや否余之を明にせざるなり、プリンス（親王）の稱號は之を皇族の方々に賜はり、公爵は日本の三大諸侯德川薩摩長州と公家より出でし舊太政大臣三條及岩倉（王政復古の功ありし大臣の子）に賜はり、侯爵は大諸侯及門閥高き公家に賜はり、後日二三

の國務大臣例へば伊藤侯の如き之に加はり、伯爵及子爵は貴族の門閥の品位に應じて之を授け將官大臣及宮內官亦此榮に與り、男爵は多數の文官及武官に授けられたり。又後日に至りては授爵と共に帝室より賜與金ありしが、帝室財產及帝室費の御規定ありし以來は國庫より之を支出せり。されば爵位は決して空位にあらずして資產之に伴ひ、各階級に應ずる資產の收入によりて生活するを得べし。而して其資產の額は當時公に定められしもの無し、これ其所有主の資產額を世に知らしめるが爲めなり。

元來日本の爵位は歐洲の爵位と全く同一なる歷史と、同一なる意味を有せしが、歐洲の爵位と同品位たらしめんことを欲したるの結果遂に、吾等の熟知する爵號を採用せしが、こは余も信ずる如く、歐人に奇異なる感想を起さしめたり。近時に至り男爵の授與甚だしきは侯爵伯爵の授與さへ頻繁に行はれ、恰も奈那翁の貴族の如く新古門閥の混交日本に顯出するに至れり。

余等が宮內省に於て執れる事務中、宮內及政務官省の組織或は個々の問題として普魯國宮中の忌服令の事は從來の如く每日午前著々進捗せしめしが　皇后陛下より每週一回午後余が妻に出仕して陛下の御下問に應じ歐洲宮廷の模樣を申し上ぐ可きことを命せられたり。

アレキサンダル、ミヒエロウ

イツチ大公爵ノ來朝

千八百八十七年（明治廿年）六月初旬、露國アレキサンダル、ミヒエロウイツチ大公爵は海軍士官として露國の軍艦に乘り込み來着するの豫報ありしかば、宮中には之が迎接の準備に多忙を極めしが、同大公爵には歐洲貴賓迎接の爲め東京灣頭の園中に建造せる延遼館に止宿し給へり。同公爵歡迎の爲め宮中にて盛なる饗宴ありしが、之に先だちホルレーベン公使をして豫め大公爵の意を探らしめ、余等若し其宴に陪するも露國の外交官に於て異存なきやを確めたる後は陪食するの榮を得、此に於て又未だ不充分なる點多き宮中給仕の批評を試むるの機會を得たり。大公爵は目立ちて丈昂（タケ）くやさ形なる立派なる人にして　皇帝陛下の御意にも適ひし如く一般に如才なき人なりし感ありき。

大公爵には東都を去られし後、猶京都其他名勝の地に遊ばれしが　陛下よりは其案內の爲め殊に宮內官吏を派遣せられたり。

公務

其頃の事なりき、亞米利加合衆國の公使ハツバアドの夫人逝去せしかば、宮廷にては其埋葬の時

如何に弔意を表す可きかの程度に付き評議ありしが　皇帝陛下には宮内の高官を　皇后陛下には官女を喪服着用にて差遣され且花輪を贈賜せらるゝことに決定せられたり。

偖宮中の給仕等は十分の熟達を見る迄新任膳部長デッウエッテの指揮の下に猶實地の練習を爲したり。

猶余が關係せる公務の方面にては宮中官吏の諸階級、上は侍從長より下は厩丁に至る迄の新服裝を定むるの必要ありとの説稱へられしが、余は其決定の參考に供する爲め重なる歐洲の朝廷、普魯西、墺地利、伊太利、英吉利、露西亞等より現用の禮服及制服の圖を取寄せんことを提議せり。而して其標本及圖の歐洲より到着する迄は之が決議を延ぶることゝせしが、後日之が爲め宮内官吏中に委員を置き、殿中にて定例の會議を開き後章にも記せる如く滿足なる結果を得たり。

散歩及遊覽

凡そ萬般の公務を實地處理決行するに當りては、其苦慮困難の大なること、其成効の後之を聞きて想像するが如きの地に非るなり。然るに種々興味多き市中及近郊の散歩は此熱したる頭腦に實に愉快なる變化を與ふ。されば或時は小兒を伴ひて樹木茂り海氣清き禁苑に參り、或時は多くの殿堂數百基の石燈籠を有する上野公園に遊び、又或は具足武器大砲等を陳列せる遊就館に遊べり。又有名なる殿堂中莊麗なる淺草の觀音堂は、其周圍に露店茶屋等ありて混交せる人界の活畫なり。又仲通りに於ける數十戸の古物商及故衣(フルギ)商は常に日本新古の美術工藝の生産物を自由に觀覽買得するを得しむ。驚く可き多數の古き美麗なる漆器、銅器、武器、衣裝等は仲通りの諸店に山積し、僅少の勞力と些少の金額とを以て元大名所藏の銀器、武器或は故主の家紋を附けたる手箱或は往時の服裝等を購ひ得可し。余等も亦こゝに購求を試み日本技術の精巧なる製作品を集めたれども、然かも余は猶充分なりきと云ふ能はざるなり。聞く所によれば今日にては古物甚だ少くして然も非常に高價なりと、英國人米國人巴里のビング商會神戸横濱の輸出商等は殆ど盡きざるの觀ありし日本の古物の源泉を汲み盡せり。斯くして太平三百年間に貯藏せる充溢品（此間は和蘭商會マヅハッペーが僅に長崎の出島にありて僅少の輸出をなししに過ぎず）は僅々二三十年の間に汲み盡し之を各國に散布せり。

内閣更迭

歐洲との條約改正に際し國民の輿論と政府反對黨とは政府が歐米十六の條約國に對し讓歩に過ぐることを攻擊せしにより、六月中旬内閣交迭ありし結果宮内大臣の地位動搖するに至れり。

明宮殿下の御教育掛土方氏は農商務大臣に任ぜられしが、獨逸人社會にては誤りて彼の樞密顧問

官ヒンツペークル氏と併稱す可き人と信ぜられしが、次いで後日の子爵たる土方氏は益々昇進して伊藤伯の後任を襲ひ宮内大臣となれり。偖條約改正は裁判權の爭ひよりして大に困難を生じ、爲めに無期延期となりしが、そは日本國の方面より尤も緊要なる要求として領事の裁判權を裁判所に移すの議出でしが、歐洲の公使は埃及の立合裁判の方法に倣はんことを提議し、爲めに日本愛國黨に一大憤激を與へたるによるなり。而して此憤激は佛國の法律家ボアソナード及其援護者によりて益煽動されしが、そは佛人が之によりて獨英の勢力を削がんとの下心にして又遂に徒勞に歸したり。

英國公使フランシスブルンケットは條約事件落着の後日本を去り、ル、ポエール、トウレンチは代理公使として日夜職務に鞅掌せり。又余が知己アレキサンダル、シーボルト男爵は歐洲に派遣され、日本の外交官として未だ日本を信ぜざる土地に日本の眞相を知らしむる爲め大に盡力することとなりしが、彼に取りて大に名譽なる此行は我に取りて大に悲別の因となりたり。

京都旅行

日本にはよき習慣ありて諸官省は毎年盛暑の候七月十一日より九月十日まで閉鎖して此期間は事務を執行せず（原書の儘）唯僅かに少數の官吏を殘して緊急の事件を處理せしむ。故に國民も亦此期間には官省に依るべき事件を進捗するを得ずと推算して事を爲すを以て、官省にも實際執行すべき事務多からざるなり。東京の諸官吏は斯く休暇を得るを以て多くは都門を去るにより、茲に余等研究の目的を以て京都へ旅行する事に決したり。然るに皇室にてはその傳來習慣に變更を來すを好まざるを以て、別に暑中賜暇なき故、當世の風潮に慣れたる近侍の紳士貴婦人等は少しく失望の氣味なるべし。

此行には余の補佐官たる長崎式部官相伴ひ、且長崎式部官は奈良に於ける御寶藏の鍵鑰を携帶するの大任を負へり。一行は千八百八十七年（明治廿年）七月廿三日出發、横濱より海路神戸に向ひしが、横濱港に於て再び老船「ゲネラル、ウェルデル」號を見しが、數月前と同じく膠著しありて「ビルヒワツセル」は依然惡臭紛々たりき「ビルヒワツセル」は水夫の使用する言語にして、船の龍骨の周邊に溜れる腐敗せる水をいひ、絶えず之を汲み出さゞる時は船體を腐蝕せしむ。一行は海上には二日間天氣快晴として心地よく七月二十五日神戸港に到着せり。此重なる開港場神戸に接して往時よりの商業地たる兵庫あり。余等神戸に獨逸領事コーテス氏を訪ひたる後直に兵庫に向ひ歴史上有名なる古戰場を弔へり。此地は一千三百三十六年（延元元年）南朝の忠臣と足利幕府の開祖尊氏と血戰せる古蹟にして、皇軍大に敗衂し其將正成は回天の事業成らざるを見て遂に七十二人の忠臣と共に湊川に戰死せしが其忠魂を祭りて世人今日猶之を崇拜せり。

余等は是より更に歩を移して武功赫々たる神功皇后が三韓征伐に當りて（耶蘇降誕の頃）建立せ

る生田の神社に謁で、次に景色頗る佳なる神戸の瀑布を覽しが、瀑布の水は恰も薄絹を高巖に懸けたるが如し。巖上には猿猴群遊し、茶亭は景勝の地に據りて客の休憩に便し、又酒食をも鬻げり。又此近傍なる一の谷は中世紀の一大古戰場にして、一千百八十二年（壽永元年）源氏と平家との間に大戰ありて源氏の大將義經（原書ヨシツメ）は連戰連勝遂に平家の軍を海上に逐へり。此戰爭に平家の若君敦盛卿は敵に捕へられて首打たれしが、討手は自ら悲哀に堪えず、武器を捨て身を墨染の衣に換へしが、此哀なる物語は後日本史劇の一曲に作られたり。午後は絶景なる舞子濱に杖を曳き、清き潮に俗塵を洗ひ、同夜更に汽車に乘じて大商業地大阪に着せしが、時に天滿天神の祭禮に當り、數知れぬ燈籠提灯四方に輝けり。數多の堀割及淀川の支流（淀川は其源を琵琶湖に發し大阪にて海に注ぐ）は數百の小舟を以て塞められ各舟皆燈火を點じ花を飾り三弦を彈じ嘻々として笑ひさゞめけり。

自由亭ホテルの窓より此滿飾せる小舟の往來を眺むる星月夜の光景は眞に美麗を極めたり。ホテルは二部に分れ、一部は清淨なる趣味深き飾り付の日本間にして、一部は裝飾頗る簡單なる西洋館なるが、余は此場合に於ても亦當時日本に代表されし、歐洲の文明は日本の趣味ある裝飾に對し遙かに遜色あるを認めたり。大阪は當時日本の最も重要なる商業地にして三十萬の人口を有し、殊に同地の城塞は難攻不落として數百年來將軍家の居城となり、西南諸大名を抑制するの地たり。城は市に近き丘上に峙ち、大阪及其附近海岸に至るまでを統治し、往昔より堅固なる防備を有したるが、余等の此城を訪へるは七月二十六日にして、其城壁の純粹なる石垣なるには驚嘆せり（漆喰を用ひざる石垣に驚けるなり）

此城壁を圍繞せる岩石は極めて巨大なる大さを有し、蒸氣力、電氣力等の發見せられざりし當時の工作により、斯の如き重量を山上に運搬せるは如何なる方法によりしか殆ど會得し得ざる程にして、此城塞は實に日本中世史の中心なり。而して今日にても亦一の城塞たるを失はず、現に大阪師團司令部となれり。此城は秀吉が莫大なる金額を費して築造せるものにして、堅固莊麗なる將軍家の城塞たりしも、一千八百六十八年（明治元年）將軍家の將士敗戰の餘火を放つて東走せしを以て、爾後近世兵舍風の無趣味なる建築物を以て之を補ひ、單に實用に適ふのみにして、吾人の興味を醒せり。之に反して附近の光景山海の展望等は實に莊麗觀を呈し、吾人をして長く抵回して去る能はざらしむ。一千八百六十七年（慶應三年）及び一千八百六十八年（明治元年）諸外國公使は此大阪城に於て德川末代將軍慶善公より接見せられたる事あり。

大阪には貨幣の鑄造所あり、又伊太利人の技師長たる大砲鑄造所あり。其他近世の工業博覽會ありしが、その內容は價値少なく全然無趣味なり、此大都會には寺院の數も亦頗る夥しく、其中特に見るべきは天王寺として、其境內頗る宏大にして、日本に於ける佛教の庇護者たりし聖德太子の紀念

物を存し、耶蘇紀元六世紀頃の開基に係り、爾後數次改築增築せられたり。數多の殿堂中特記すべきは大なる塔にして、此塔に象の彫刻あるは是れ佛教の根源を印度に有するの徵證にして、日本には元來象の棲息を見ざるなり。此塔は綠又は眞紅に彩色せられ、之に昇れば寺中は勿論大阪市を眼下に展望するを得べし。余等は此寺院に就きて彫刻佛像寺寶等を見たる後、住吉神社を拜觀せしが、此神社は皇室より改築せられたる神社にして、余等は龜の群集せる池に架せる有名なる太鼓橋を見たり。ホテルに歸るに途次道頓堀の芝居小屋通りを過ぎしに芝居、踊其他有らゆる種類の娛樂場ありたり。奇怪なる踊は歐洲風の服裝を用ひて夜間興行し居たるが余等には毫も興味を與へざるなり。

市の商店に至れば絕美なる絹織物陳列せられ、骨董店には珍奇なる美術品あれど、其價格の高きは吾人の買ふに堪えざる所なり。市には無數の溝渠縱橫に通し之を以て日本のブヱネーデイヒと稱す可く其市の富と商業の繁盛とは永く吾人の記憶に存せり。

奈　良

余等一行は七月廿八日人力車を以て舊都奈良へ向け出發せり。人力車旅行は土地の風光、人民の風俗等を觀察するに頗る便なれども、亦大に車夫の勞苦を察せざるべからず。されば車夫は時々代り合ひ、且前曳を附けざる可らざれど、然も彼等は嶮惡なる道路を速に走らざるを得ず、殊に奈良に通ずる道路は極めて嶮惡にして、爲に二人の車夫は全く疲勞し、止むを得ず之を半途に殘したり。今聊か人力車夫の組織を記さんに、旅人の要求を滿さんが爲め一地方に亘れる組合組織ありて、何れの立場にも要すべきだけの車夫を備ふるなり。

中途郡山其他の宿驛に休憩し、寶隆寺にて隨行の料理人の調理せる午餐を喫し（隨行の料理人の食事を料理せるは此時を以て初回とす）同く一千年前の舊都奈良に到着するを得たり。

奈良に入りて間もなく、神社の公園に到りしに、境內なる並木は鬱蒼として繁茂し、馴れたる鹿は群り來りて吾人に餌を請へり。武藏野といへる旅館は社寺の間に在りて彼の騷客に歌はれたる、三笠山（原書ミコサヤマ）の麓に在り、余等は此離座敷に投宿して近く穩靜なる圓山を眺め、又遠く鬱蒼たる峰嶽を望めり。然るに奈良には蚊多くして甚だ煩はしく、蚊遣火の勢にも恐れず、大阪知事の親切に贈りし蚊帳附寢臺も防ぐによしなく、終夜蚊軍の爲枕を高ふする事能はざりき。余等の到着日の午後正倉院（原書セウジョウイン）と稱する皇室の御寶藏を開くの豫備整ひ居れり、同行の友人長崎氏は此寶藏の御鍵の保管者として、之を開くべき命を受け、宮內官吏山縣氏は有名なる古器物の鑑識家なるが、監督役として同行せられ、又寶藏の主管者等之に立會ひ一千年の星霜を經て古色蒼然たる組木の建物を堅固なる木箱の中より取り出せる半古の鍵にて開きたり。藏の內部

は三部に區分せられ、各部又それ〴〵鍵を有す。俗間に天皇の御土藏（火に安全なる倉と云ふ意（原書ゴドウンとありて明ならざれど土藏の字を嵌めたり）と稱ふる正倉院を開くの式は往時は極めて嚴格にして、德川時代にありても將軍は僅に三度之を開きしに過ぎず、御藏品は武具、什器、樂器、鏡、織物、古代の屏風等にして、日本の工業史上及び文明史上に一大價値を有するものなり、是等は中世の戰亂に際して風雨に暴露せられたるを以て門外漢の見る時は實に屑物にも等しかるべけれど、人類學上の識者及工藝博物館員等には無限の趣味を與ふる事疑を容れざるなり。此寶物は一々美麗なる彩色畫として官より公表せられ、大に有識の士に趣味利益を與へしが、惜むらくはその附言は悉く日本文なり。

翌朝更に又此寶藏を巡覽せしが、此庫の藏品は優に千二百年以上の星霜を經たる物にして、古代は皇帝の崩御ある時は御所有の品を御連枝及侍者に分配せられたるものなるが、或帝に至りて御先代の所有品を此寶藏に納められたるなり。此寶藏の周圍には高き塀ありて巡査之を護衞す。此寶藏に近く一千二百年を經たる東大寺の鐘樓ありて、四圍明け放ちたる鐘樓には巨大なる梵鐘懸りて、其鏘々たる音響は一千年來毎夕八時奈良の平野に響き渡れり。

偖一の宏大なる殿堂はその廣濶なる石階幾星霜を經たる周圍の老樹及其巨大なる建物によりて吾人に莊嚴なる印象を與ふ。此殿堂の內には彼の大佛安置され、像の高さ十五丈六尺ありて、蓮葉の臺上に坐せり。此大佛像は西曆七百五十年代（聖武天皇の時）の鑄造に係り余等は此佛像に登りしが其頭は殿堂の屋根に達せり。大佛の後方には當時寺寶の展覽會ありたり。奈良には時々地震ありしを以て、此殿堂には少しく間隙を生ぜる個所ありしが、全く破壞するの憂はなきなり。日本に於ける建築術の進步は奈良の古き建築に於て最も明瞭に觀察するを得べく、之によれば當時既にたとへ地震によりて土地の震動することあるも、猶建物を維持し得べき構造法を知れり。彼の東大寺の大梵鐘の如きも千二百年前と等しく依然として同一の鐘樓に懸り、如何なる强地震も此樓を破壞せざりしが其建物の支持せらるゝ柱は下部を圓滑にして靑銅の金具を附し、四隅に埋めたる柱石の上に立ち屋根は極めて重くして鏁にて堅固に連結され、如何に土地の震動あるも全家屋は碁石上に動搖するの餘地を有するなり。是等の建築物は斯く數百年間强震に堪へたれども、悲哉近年東京に建築せらるゝ歐洲風の石造は之と異り一千八百九十一年（明治廿四年）及び一千八百九十四年（明治廿七年）の强震に際しては破壞破損を免れざりしなり。

東大寺の內庭に廻廊にして四角形に圍繞せられ、その中には技術絕妙なる古き靑銅の燈籠あり。靈地たる奈良は社寺の連列せる地にして到る處靈地ならざるはなし。思ふに往時若し吾等、歐人にして奈良の地に足を入れなば恐らく直に殺戮されしならんに、有り難くも今日に於ては余等は皇室に特別なる保護及尋常ならざる依囑を帶び、斯く有らゆる寶物を觀覽するを得たり。同夕刻更に皇

室の保護の下に立てる春日神社の莊麗なる社地に參り、數千の獻物の石燈籠の立ち竝べるを見たり。神官の娘（原書の儘）等は美麗なる服裝を著け、鹿を畫ける金屏風の前に立ちて古雅なる神樂を舞へり。此他幾百年を經たる老杉の下を流るゝ小川のさゞやき、眞紅に塗れる社祠の屋根、廣き石階を蔽へる並樹新鮮なる空氣等皆吾人をして抵回去る能はざらしむ。余等は名殘惜しくも此處を去りて白色の靈馬を巡覽したるが、其馬は參詣者の喜捨によりて生活し、木造の厩に繫がれしが、死したる後は又之に似たる白馬を以て補はるゝと云ふ。尙公園中を進みて池岸に出でしが、此池には一千年前皇帝を戀ひたる宮女が身を沈めし事ありとか、それより又興福寺（原書ロククジ）と稱する寺院に至り、茲に五重塔の聳ゆるを見たり。寺内の八角堂には夥しき銅像を有し、皇太后陛下の御庇護の下に立ち傳來の漆器、劍等の美麗なる古器物を示されたり。

是等の多くの社寺の中にて春日の宮は特別なる感想を起さしめ、實に公園の中央に於て靈妙なる國光を放つの思ひありて、何れの參詣者も皆此公園の自然の美と幽邃とに其地の神聖を感ぜざるはなかるべし。

余等は風光及び歷史上の材料に富める奈良の都に極めて趣味ある二日を費やしたる後、更に歩を進めて七月三十日古寺中の最大なる寶隆寺に至れり。此寺院は聖德太子の建立に係り、西曆六百七年（推古天皇十五年）竣工せる寺院なり。殿堂、大塔、廻廊其他無數の禮拜堂等は廣濶なる境内に滿ち、奈良の主なる寺院として富裕なる土地を所有せしが、維新後悉く政府に回收せられたり。此大梵刹には尊嚴なる老僧他の六人の僧侶と共に留り住み居れど、寺院の屋根は傾き人衆は皆退散し去れり。此寺院を維持する爲め内務省は年々二千圓を支出し、又皇室よりも寄附せらるゝ所あれど、是等の金額にては僧侶の生活費及寺院の修繕費等を支持すること能はざるなり。

現今此等の寶物として存在するは拜殿なる朝鮮流の壁畫塔形の水晶の寶器に藏せらる佛舍利（水晶の佛眼）にして、此舍利は日々正午頃參詣者に拜觀を許す。其他美麗なる繪畫漆器床几（一個は朱塗一個は黑塗）多數の刀劍屏風等も亦貴重なる品にして、現今宮中に存在する漆器はもと悉く寶隆寺に有せしものなり。之によりて觀るも該寺の寶物が政府に收受せざりし以前は如何ばかりかの富を有したるか想見るに餘りあり。該寺は陛下に百點以上の重寶を献上し、陛下よりは更に一萬ダラーを下賜せられたり。既に記せしが如く政府よりの下賜金と此一萬の金圓とは決して此大寺を支ふるに足らざるなり。故に僧侶が峰藥師と稱する八角の特別なる堂に貯藏せる藥師の刀劍鏡等を漸々賣却せしは怪むに足らず。之によりて又古代の鈴が絶えず賣買せらるゝ事實を說明し得べし（藥師には千餘の鈴貯藏されしと）余等は老僧に面會し、日本茶を饗せられたる後奈良に歸り、夜間更に二月堂へ散策せり。二月堂は西曆七百五十二年（孝謙天皇四年）開基せられたる莊麗の寺院にして、その階上に登れば奈良の光景は勿論遠き山々までも展望するを得べし。

京都

清淨閑靜なる奈良の靈地を去りて京都に向はんことは誠に名殘惜しく感じたり。奈良市を發すれば沿道皆稻田にして、其蒼々たる中を横きりて進みしが、廣き田野は景色よき連山によりて圍繞せらる。製茶を以て其名全國に冠たる宇治に到り、萬屋といへる美しき茶亭に入りて、側を流るゝ宇治川の清流に遊泳を試みたる後、其水に設けたる離座敷に於て茶を味ひぬ。余等には非常なる注意を以て護衛の巡査を附せられしが、此土地は府縣の境界なりしを以て、巡査は茲に交代せり。一行は漸く舊都に近づき、遂に日曜日の黄昏京都に入り、彌阿彌ホテルに投宿せり。ホテルは風光絶佳なる土地にありて、四境を繞る青山、その靈底に在る市街等の眺望誠に宜し。ホテルの食堂には歐洲風の食卓竝列し、來遊中なりし英米人と邂逅せり。余等は窓を上げて市街の光景を展望せしが、京都は西暦七百九十三年（延暦十二年）以來皇居の地となり、四圍には連峰ありて甚だ幽邃に且健康に適せる地にして、一見往時の皇都たるを知るべし。一千八百六十八年（明治元年）遷都せる東京は甚だ不順なる氣候を有し、且皇室と宮内省とは密接して極めて狹く往時の皇都たる京都に及ばざること甚だ遠し。

御所

余等は市を廻覽するに當り先づ御所を拜觀せり。皇城はあらゆる設備完全なりと雖も、當時は全然荒廢に委せられたり。白壁の宮殿空虛なる拜謁所等を拜觀し、尚親切なる殿掌取締冷泉伯爵（公卿華族）は特に玉座の御間の拜觀をも許されたり。此御間は非凡なる趣味を以て作られ、實に華美を盡し建築は言ふまでもなく純粹の日本風なり。宮殿と宮殿との間には大小無數の中庭ありて、海岸に產出せる美はしき灰色の小石を敷き、　兩陛下の御殿の前面は之に代ふるに綠の芝生を以てせり。日本古風の建築は總て白木作りにして、白壁を有して構造頗る簡單なるが、皇城は總て此法式に則りて建築せられたり。鴨居の下には襖を立て、其緣は漆塗にして靑銅の金具を用ひ、又美麗なる繪畫あり。床には美しき疊を敷き詰め、白色に黑色の模樣ある緣を附けたるは是れ御座の間の徵にして、其他の間の疊は總て綠色の緣あり。又往時最も宮中にて尊敬されし尚侍の住へる室をも見しが、此尚侍の官は既に述べたる如く今日にては缺位となれり。往時は宮廷の重臣悉く城中に住へるを以て皇城は無數の建物庭園等を有するなり。而して是等の公卿は各階級によりて、茲に其職に從事し、其生活は稍乏しかりしも、その高位高官を以て全國に誇れり。皇城は此處に在ること數百年なれども九重の奥深く全く政治と絶ちて專ら祖先の祭祀、美術、繪畫、詩歌管絃等を以て事とし給へり。

此御居城は市街の中央にありて城壁溝堀の如き武備なく、將軍は軍兵を備へて保護し奉るの名を以て實は皇室の御擧動を嚴密に監視し、諸國の領主卽ち大名との往復を全然遮斷せり。皇室の式微は實に一千八百六十八年（明治元年）に至るまで繼續せしが忠愛なる國民は雲上に隱れ給へる　天皇陛下の政治的主權を握らせ給はん事を熱望して止まざりき。されど天皇には依然として從來の如く祭祀を事とし、國土の萬民の安全を祈りて將軍執政の勞を輕減せんことを謀り給ひ、決して之を滅亡せしめんとはし給はざりき。吾人は京都より都を遷させ給へるを悲しむものにして、若し政治上の必要より出でたりとせば余は　御上の御健康上より又御靜養上よりも時々京都へ行幸ありて特に東京の不順なる夏期を避けさせ給はんことを希ふものなり。將軍の城砦、二條城は皇城の近隣にあり、封建時代の城塞建築に則り、城壁溝渠を以て圍繞し又樓閣を備ふ。此城は維新後政府の管轄に歸せしが、一時亂雜に使用して大に荒廢せり。然るに近時皇室御料となりて宮內省の管轄に歸し、技術的紀念として永く保存さるべき計畫なり。城門には維新後菊花御紋章を附せしが、此門を入れば內部は三百年來の封建時代建築の絕美なる裝飾あり、塗緣を以て美麗に組まれたる合天井絕美なる繪畫を寫せる金襖、無數の彫刻等至る處の室に滿ち、殊に將軍が上服に座して賓客を接見せる大廣間は今日の日本に於ては再び建築すべからざる程の壯觀を有す。燦たる繪畫透彫の彫刻等を施せる欄干及美しき絹の總を有する寶庫の引戸は最も注目すべき價値あり、將軍家城砦の裝飾は筆紙に盡し難き壯觀なれど、皇城の高古閑雅なるには比すべくもあらざるなり。將軍は二條城に住したるにあらずして、五年每に天機を伺ふ爲め上洛せる時使用したるなり。將軍の宮廷に伺候するや、恰も埃及の副王が土耳古の宰相に隨從するが如く、皇室に奉仕せる二三の高位高官には席を讓りたるを以て、參朝の旅行は將軍の餘り好める所にあらざりしとか。又將軍は五百の從者を率ゐて參朝すべく、此際皇室に奉呈する金額も莫大なりし故、此旅行は將軍の爲め巨多の費を要したり。將軍の政權を握れる間、皇室費は年々三十萬ダラー（六十萬圓）程なりしかば、朝廷にても此天機奉伺の爲めの獻金に大に重きを置き給ひしとか。二條城は現今東京の皇城と等しく宮內省の管轄に屬せり。

二條城の溝及白壁の城櫓に沿ひて車を馳せ、日よけの爲め葭簾を以て街路を蓋へる芝居通りを通過し、河岸に出でたるに、河の淺瀨若くは小石の上に凉臺を並べ、群集は此處に凉風に浴し居たるが納凉の法として誠に珍らしき良工風なり。

終日趣味津々たる境に出入し、歸りてホテルの階上に憩へば、夕陽は將に沒せんとして西天に紅を流し、寺院の晩鐘は遠く響きて洛陽の暮景誠に言ふ可らざるものあり。

京都近郊

余等一行は早朝クルマを馳せて川を遡り、峽の彼方に行く事一時間にして建物庭園等のある處に達せしが、是れ　天皇陛下が春秋二回行在あらせられたる離宮なり。此建物の一部は極めて景勝なる地に建てられ、蒼々たる京都市街の眺望甚だ佳にして、殿堂庭園共に能く舊狀を維持せり。此離宮は簡單なる木造なりと雖も、有名なる畫家の手に成れる繪畫の裝飾を有す。此の御園の美しき楓樹櫻樹は　今上皇帝陛下の御祖父に當らせ給ふ仁孝天皇の御手植なりと承れり。

皇帝陛下には從來修學院の離宮へ行幸あらせらるゝ例なるが、其行幸には歴史上有名なる牛車に乘らせ給ふ。

此牛車の圖は往々古き屏風等に畫けるを見るべく、此御車の乘輿には常に御簾を垂れ給ふを以て、人民は全く　龍顏を拜し奉ることを得ざるなり。離宮の附近には北野天神の社ありて《西暦九百四十七年（天暦元年）以降》銅製牡牛及び狩野の虎の石炭畫を藏す。是等は獸類の象なれども神意を寓するを以て、日本の習慣によりて隈なく紙片を吐き附けられ、極めて醜態を呈す。午後は京都獨特の有名なる商工業を視察せむと決し、帝室技藝品管理者山縣氏の先導によりて先づ骨董商林（原書ヤシ商店）に至れり。主人は美麗なる漆塗書架三個を示せしが、こは竹の金蒔繪にして其價二千五百ダラー（五千圓）なり。是等は或る大名家より出でたる品にして、卓拔の作品なるが余等は古き金屏風及廉價なる小漆器などを購買せり。同夜はホテルに在りて懇切なる殿掌取締冷泉伯爵と歡談せしが、伯爵は美麗なる畫扇及小箱を贈らる（妻は非常に喜びたり）總て日本人は他人に物品を賜るを好み、若し之を快く受取り、且それに對して僅少なる物品にても答禮する時は常に大に滿足の意を表す。

京都は日本國中神社佛閣の多き地にして、其多くは山に據り樹木鬱蒼たる中に在りて繪畫の如き觀あるなり。殊に稻荷神社は風光他に優れ剩へ珍らしき想像より成れる狐の石像夥しく、こは稻荷大神の本體を顯はせるものなりといふ。東福寺には金の襖、畫額、金地の繪畫、大なる青銅器、無數の軸物等、技術絶妙にして大なる價値を有する寶物多し。其他眺望に可なる堂閣ありて其破風は佛陀の像を以て裝飾せり。之より更に三十三間堂に到れば金色なる一千の觀音ありて悉く一殿堂に竝列せり。最後に清水寺を見てホテルに歸り、午後は陶器商店の連れる街路に至り、各種の陶器製造所を見たり。京都は往古より陶器製造を以て名有り、近時に於ても依然其名聲を保ち、家毎に町毎に陶器の外一物もなく普通の實用品より精巧なる工藝品に到るまで只皆是れ陶器なり。

最も有名なる製造家は帶山及び幹山なるが、其工業は大規模の製造所と言はんよりは寧ろ小規模の手工にして、如何なる製作品も皆主人自ら手を下して製作するなり。此處にても數個の小器を購入注文せしが、歐洲各國の博物館に所藏せば極めて珍重せらるゝならむと思ふ製作品夥しく、良好なる製作品は其價も頗る高しと雖も各個特有の性質を有するなり。

一行は早朝有名なる西本願寺を巡覽せしが、同寺は日本佛教一大宗派の本山にして、莫大なる財産を有し、近時大なる堂閣を新築せり。建築の際使用せる婦人の毛髪より成る大綱は此寺院の記念品として高き天井より懸垂せり。寺院の新築未だ完成せざりしを以て觀覽すべき處多からず、余等は大谷管長の代役僧に面會せしが、大谷師の令孃は公使館書記官岩倉男爵に嫁し、余は同男爵及男爵夫人にはセント、ペテルスブルヒにて會へたることあり。

陶器の外京都の工業は絹布製造にして、之を見るは大に有名なり。絹織工場にては日本産の重量なる絹絲を以て種々樣々なる色模樣に織り出し、赤黃等は殊に見事にして、其模樣極めて複雜なれば日本古風の裝束には適當なれども、現今の趣味には少しく適せざる思ひあるなり。

皇后陛下は洋風の御服裝にも日本産の服地のみ用ひさせ給ふやう御決定相成りたるを以て、余等は特に多數の織機を見しに、是等は皆陛下御料の錦襴其他の物を織りたれば、又御料服地の花紋の撰擇及色合等に就て二三の注意を與へしに、製造者は喜んでその忠告を容れたり、此處にて使用せる機織器械は極めて簡單にして、殆ど創始時代の形を存し多く人の手を以て織り出すなり。

京都にては機織と共に又刺繡の業盛大にして、彼の歐洲人が驚嘆する刺繡は皆此處より製出せらる。其他諸色の天鵝絨も製造せられ、獅子、虎等の動物其他風景草花等を模出せるは實に見るものをして驚嘆せしむ。又繪天鵝絨の美麗なる衝立優雅なる白紗地等も大に人の眼を惹けり。これ等の絹布の陳列場は階下に在りて公衆の觀覽に供し、階上には一層良好の物品を陳列し猶貴重なる品は特別なる室に藏せり。

午前中府立女學校（女工場には非ざる歟）を參觀せしに、乙女等は習字刺繡、舞踏、音樂、點茶等の技を習ひ居たり。女性は皆美麗なる衣服を纏ひ疊の上に端座し、男女の教師はその修學を監督し、舞踏の教室にては余等の爲め京都特有の踊を舞ひ且之に屬する樂器の音響も聞けり。茶の湯には種々の規則ありて長き時間をも要する禮法にして、之を完全に教授せんが爲め專門の學校存在する程なれば、此女學校に於ても亦學科目中に之を加へて此困難なる禮法を學ばしむるなり。

午後には象眼及漆器製造の商店を巡覽せしが、同店にて德川家の金蒔繪の戸棚を標本として示しし、其價格は五千ダラーなりと、此商店には往時の大名の家財多く、極めて價値ある工藝品なれば、其價格亦極めて高し。次に余等は象眼細工を見しが、其丹精をこむること實に一方ならざるものなり。

彌阿彌ホテルの近隣に日本風の浴場ありて入浴に佳なれども、日本の風習によりて其湯の溫度甚だ高し。總て日本人は溫浴を好み、家毎に湯殿を有し風呂桶を具へて頗る高度に湯を沸かす設備あるを常とし、京都にても亦勿論斯の如くなれども、歐人の考には殆どゆでられんとする思ひあるなり。風呂には全家族入浴し、第一に主人先づ浴し夫れより家族順次に入り、最後に婢僕之に浴し、

初めより終りまで同一の湯を用ふるが故に、歐洲人が家族各自に新らしき湯を請求する時は却て奇異なる感を起せり。余等は骨董商店に立寄りて曩日購求せる物品を荷送りせしや否やを確めたる後金閣寺へ行けり。金閣寺は其名の如く全部黄金を以て飾れる佛閣にして、日本人の好んで見んと欲する殿堂なれば、京都見物に來りし外客は必ず參觀すべき處なり。此堂の模形は一千八百九十三年（明治二十六年）シカゴ世界博覽會に出品せられたり。生茂れる老樹は池の面を蔽ひ、鯉其他の魚類は其中に群り、又其池の中央には龜の形を成せる奇異の岩石二個を存し、池の側には十四世紀頃將軍足利義滿の建築せる高閣あり。是れ卽ち金閣寺にして三層より成り、下部より上部に至るに從ひて狹少となり、全體の高さ凡六丈あり。その最下層には義滿の座せる像あり、神像は皆金を鍍し有名なる彫刻家雲慶の作なり。二階には數多の彫刻の外西暦一千五百年頃（永正年中）狩野正信の畫ける天井あり、されど惜む可し濕氣の爲め頗る毀損せり。

三階は壁天井は云ふ迄もなく床に至るまで悉く黄金を塗りたるものなれど、現今は黄金剝落して金閣寺の名を存するのみ。又屋根の頂頭には赤銅製の鳳凰を据えたり。日本人は此の建物を宗教上尊重するが故に、靴を脱がせざれば内部の觀覽を許さざるなり。之に接近して雅趣なる茶亭あり、往昔より玆にて茶を點せし處にして、茶の湯の動作は總て靜肅を要し、節度穩雅にして全然古來の法則を確守して亂れず、故に閑居靜養の爲め適當なる娯樂たるべし。

一行は歸宿の途上ホテルの近隣なる淨土宗の寺院智恩院を巡覽せり。該寺の殿堂は既に一千二百十一年（高倉帝の御世）に建立せられたれど、數回の火災によりて烏有に歸し、現今の建物は西暦一千六百三十年（明正七年）德川三代將軍家光の時代に再建せられたるなり。寺院は風景に富める丘上に在り。境内も亦頗る廣濶にして京都市街の展望頗る妙なり。莊麗なる佛壇合天井金色衒立等の美術品數多ありて見る者をして驚嘆せしむ。廣大なる建物は巧に栽植せる樹木を有する庭園の中央に峙ち、僧侶の住房あり、接客の大廣間ありて金色の壁精巧なる青銅の金具及種々なる彫刻等ありて實に王侯の宮殿の思ひあり。其側なる老樹の下には大梵鐘を有する鐘樓ありて其光景亦極めて佳なり。されば明治維新には皇子が此寺に法親王として住ひされしも亦怪むに足らざるなり。

余等は此靈境の垣一重を隔てゝ彌阿彌ホテルの菜園料理場及旅館の建物等を見、又其中に働ける婢僕或は無頓著なる英領濠洲人等を見て、新時代は再び余が眼前に立ち戻れり。

西本願寺大谷管長の令息は父に代りて翌日午前八時余等を答訪せられたり。日本の訪問時間は午前七時より九時に至る間にして、此時間には家にありて來客を待ち、又此時間中に他人を訪問するを以て禮に適へるものとせり。此日は京都滯在の最終日なりしが、余等も尙刀商を訪ひ名工の鍛えたる刀劍及塗鞘等を見、數點を購求せり。其他又名ある青銅器製造處に至りて諸種の美麗なる銅器を見しが、是等は皆美術館羨望する所の物なり。

琵琶湖

京都は極めて趣味深き地にして、十分之を巡覽せんには數週間を要すべきに、余等の行程は半ば同行官吏の都合に任せたれば、鴨川の早瀨大佛像等は見るを得ずして、八月七日の夕まぐれ人力車を驅りて琵琶湖畔の大津に赴かざるを得ざるに至れり。偖大津に到着して一茶亭に入り、湖上に突出でたる部屋に宿りしが、夜は清く冴え星は燦然として輝き日本第一の湖は足下に漂渺たりき。

翌日琵琶湖及之に連る山峰を展望せしに、此湖と故國のボーテンゼーとの間に肖似せる點を發見せり。琵琶湖の大さは殆どゼネバ湖（瑞西國）に比すべしと雖も、湖邊の連峰はアルペン連山を聯想すべからざるのみならず、又ハルツ山の高きにも及ばざるなり。大津は神戸大阪より京都を經て湖岸を走る鐵道の終點にして、余等は見物の爲め故ら之に乘せざりしが、京都よりは又百五十萬ダラーを費し隧道堀割等によりて通せる大渠水あり、山腹なる公園には千八百七十七年（明治十年）薩摩の亂に際して戰死せる滋賀縣人百七十九人の靈を祀れり。大津市は即ち滋賀縣に屬せり。之より三井寺に參詣したるに眺望甚だ佳なり。三井寺は西暦六百七十五年（天武帝三年）天智天皇及天武天皇（原書ヱンム）御初湯の因緣によりて建立せられたる寺院にして、頗る美麗なる卷物を藏し僧侶は之を吾人に展覽せしめたり。

午後汽船にて石山寺に向ひしが、此寺は七百四十九年（天平勝寶元年）創建せられ、十六世紀の頃再興せらる。日本の文學家として有名なる紫式部が大部の源氏物語（原書クラジ物語）をものしたるは此寺院にして、物語は西暦一千年頃式部と同時代の人々を描寫せるものにして、風俗史上の一大價値を有する著述なり。小さき御堂より湖山等を眺むれば風景絶佳なるが、余等はこゝに茶を喫し尙貴重なる掛物古文書等を見たり又風致ある寺境の鐘樓には巨大なる銅鐘ありき。

薄暮汽船は蒼海原を横ぎりて唐崎に向ひ進行せしが、唐崎には有名なる老松あり、其枝方百歩に延び遠近歌人の詩材なり其枝を支持する爲め、湖岸に築ける斜面堤ありて長く水中に突出す、又其附近には坂本の志賀院と稱する寺院あり、その庭園美麗にして、綠蔭濃かなる樹木は潺々たる流水と共に避暑に好適の地なり、こは今寺院なれども三千ダラー（六千圓）を投ずれば之を買ひ取り得べしとのことにて、別墅には甚だ適當の地ならん。此處に住める武士は此等に傳れる寶物の相續者にして、政府は近年彼より五百ダラーの小額を以て其家寶を買上げたりとか、彼は見事なる武具古文書漆器及その家の重寶たる青銅の丸鈴等を示したり。政府は近時に至りて博物館の爲め全國に散在せる寶物の買上を始めたれど、時既に遲く惜むべし幾多の得難き奇品は既に外國に流出したり。

此夕余等は風雨に逢ひしが、汽船によりて再び大津に還り尙翌日を以て更に遠く出航せんことを期したるが、此夜より湖は大に荒れ汽船は出航することを得ざりしかば、止むを得ず一日を大津に

費せり。滋賀縣知事中井氏は伊藤伯の知人にして維新戰爭に與りし人なるが、大津に新築せる縣廳を案内せり。該建築は頗る簡單なる歐風の建物なりしが、同知事は頗る得意なる樣子あり。猶其他帆布製造會社をも巡覽せしが、こは琵琶湖の航海業に必要なる事業なり、此夜ホテルに華麗なる藝者踊あり、余等も愛嬌深き中井知事の招待を受けて參觀せしが、大津の美人集まりて歌舞を演じたり。中井氏の談話によれば大阪及大津の營所に在る歩兵聯隊の士官等は屢〻聯合して斯の如き宴會を開催する由なり。

琵琶湖出發

一夜吹き荒める暴風雨は黎明と共に收まり、旭日青天に輝きて天候頗る穩かなりしを以て、數多の日本人と共に汽船に乘じて風致に富める琵琶湖に乘り出でたり。大津より滋賀縣書記官余等の一行を送られ、且西洋料理を旅館より準備し來り、途次彦根に立寄りしが、此處は昔時大名の城下にして風景の絶佳なる恰もスタルンベルヒ海附近の如く、若し歐洲人の逗留に適する旅館あらば避暑には最も適當なる土地なり。

湖の東岸なる長濱は航路の終極點にして、同時に又名古屋に通ずる汽車の起點なり。長濱よりは有名なる白色若くは淺藍の縮緬を產出し、更に他市の染工場に送りて、緋其他の美麗なる色に染められ、此地は日本に於ける縮緬の特產地なりとす。長濱より汽車に乘じて尾州の首府名古屋に到着し、當時の內務大臣今日の元帥侯爵たる山縣氏の令息に招待せられたるが、こは彼の京都にて分袖せる才子皇室の御物係なる山縣氏とは同名異人なり。山縣內相の令息は名古屋にありて縣廳に出勤し、獨逸の諸學校及大學にて修業し、且伯林公使館附の外交官を勤めし人なれば、口に筆に獨逸語に巧なり。氏は余等に接するに極めて愛嬌深く、古風の美麗なる茶亭に招待したるが、座敷には美麗なる繪畫の襖を立て、疊も頗る美麗なるものを敷き、此家は多く內外人の出入する家なりと云ふ。暫くして山縣氏は名古屋の夜景を見むとて案內し、象眼細工及び陶器の大輸出商店を見しが、歐洲の市場に於て屢目擊せし雜品は恰も此處にも荷造中なり。名古屋城は現今名古屋師團司令部となり、封建時代の城廓にして、全國中尤も能く其舊狀を維持せる城塞なり。此城は一千六百十年（慶長十五年）家康將軍の子の爲め、二十諸侯に命じて建築せしものにして、維新の際まで之を維持し、尾張侯の子孫世々之に居れり。尾州家は德川御三家の一にして、將軍職を襲ふの權利ある系統なるが、此榮譽は嘗て尾州家に來れる事なく紀州家に落ちたるに止まれり。

尾州侯は常に此城に居住せるにあらずして其主君たり親戚たる將軍が京都の朝廷に上洛するの途次、或は國中を通過するの途次僅に將軍の宿營として使せられたるに止まれども、其構造は堅固にして城壘、溝渠、望樓等を幾重となく繞らし、望樓に登れば遠く四方を望觀するを得べく、殊に五

層に築ける望樓は誠に參觀の價あるなり。望樓の頂には網を蓋へる大さ一丈の有名なる金ノ鯱の閃めくを見得べし、此鯱の一は一千八百七十三年（明治六年）維納博覽會に陳列せられしが、其送還の途次メサジエリー會社の汽船と共に海中に沈み行けり。然るに海中の搜索は幸に成功し、名古屋人民は再び同市の徽標を漁獲せるを喜べり。

城の內部は封建時代の城塞建築術に成れる最も莊麗にして且趣味深き建物にして、欄干には精巧なる彫刻ありて、襖は金色に輝き張り壁は一流の畫伯によりて種々の禽獸を畫かれ、黑漆の天井緣亦光澤を放ちて大に人目を快うす。

然るに悲哉此處に營舍を指定せられたる陸軍課員は斯の如き技術品を尊重するの念なく、或はインキを注ぎ、或は釘を打つ等甚だ亂暴に住み荒らしたるを以て、余等の歸京後其筋に報告するの止むを得ざるに至れり。されど兵營に指定せるものを容易に陸軍より回收し難きを以て、陸軍の爲め新に西洋風の官舍を建築し、此技術上及歷史上重要なる部分は宮內省の管轄に屬せしむる事となりたり。

既記の望樓は陸軍管理者の認許を經るに非れば昇ることを得ざる定めにして、其下層より上層に至る迄總て精巧なる造作ありて、又柱の交叉せる所には最下層より上層に至るまで總て靑銅の金具を附したり。是れ非常なる奢侈にして國土の富貴と築城の豪奢とを示せるものなり。此塔の頂より四方を望まば數里の國土皆眼界の中に入り來るべし。

東海道

余は此名古屋に至りて有名なる東海道旅行の一驛に入りしが、沿海航路の開けざる時代には京都江戶間の交通は一に此東海道によりしものなり。

東海道には宿驛四十ありて（原書の儘）二百年前北齋の筆によりて世に紹介せられ、有名なる彩色の木板摺ありて此當時は四十板の內三十七枚迄は得可かりしが、現今此一帖を購求せん事は甚だ難かるべし。

余等は車に乘じて橫濱まで一週間の東海道旅行をなせしが、途中變化甚だ多く或は山嶺谿谷を過ぎ、或は海岸を傳ひ河川を渡り、或は老樹の鬱々たる並木を過ぎ、或は兀然たる山岳を越えたり。

道路は幅廣くして修理行屆き村落は連綿として其數を知らず。往々景勝の地ありて恰も名畫の如く、宿驛には到る處大なる旅館ありて往時大名の參勤交代の爲め準備せる美麗の客室を有し、又芝居其他の娛樂場各種の商店到る所に連れり。されど二十年來交通大に減じ本街道に多くの財貨を散布せる大名の通行絕え、二本差の武士亦其影を斷ちしかば、沿道爲めに衰憊せること甚しく、或は食に餓え或は衣服に窮し道路に彷徨するものあるを見たり。

當時の旅人は多く横濱より汽船に乘じて神戸に赴き、此處より更に汽車を以て京都に旅行せしが、現今は東西兩京を連絡する直通鐵道布設せられ、往時の東海道街は全く荒廢に歸したり。

余等は先づ岡崎に到着し桔梗屋（原書クキヤウヤ）に投宿せしが、市長は余等一行の爲め特に西洋風の卓子等を斡旋したり。余等が宿泊せる室は往時の十八名の入りし室なりしを以て甚だ廣く襖塗戸等亦華麗なり。

翌朝出發して途次家康の生れたる本多侯の居城を訪ひしに、土地眺望佳にして別莊の建設に適せる地なり。

本日午前中は或は繁茂せる樹木の中を過ぎ、或は打ち開ける稻田の中を經て豐橋に到着し、此處に人力車を換へたり。豐橋市の前面には豐川の流ありて此橋を渡れば大なる旅館あり、一行は同家に於ても亦大名座敷に宿り、美しき壁天井緣等に昔の名殘を見たり。此地には德川將軍家の姻戚なる松平氏の居城あり。

余等は隨行せる料理人の調へたる中食を喫して出發し、高さ一丈の巖上に安置せる觀音菩薩の銅像の前を通過して遂に新居に到着せり。これより猶樹木に蔽はれたる道を進みて大なる入海に達せしが、半ば橋梁を架し半ば堤防を築きて旅人に交通するを得せしめ、一方には高嶺を仰ぎ一方には青海原を眺むべく、風景誠に絶佳なりと云ふ可し。堤防の一端は二川と稱する所にして昔時は此處に關門を設け旅行者を檢閲せしと云ふ。

東海道鐵道の建設は既にこゝに及び、兩川の間は既に落成せり。之に續ける村落には方形に剪みたる高き生垣を繞らすを見しが、こは激烈なる海風を防ぐが爲めなりと聞けり。

薄暮人口千二百を有せる（原書の儘）富有なる濱松市に到着し、東海道中最上なる旅館に車を停めしに、多くの美しき少女は萬事よく斡旋の勞を取れり。此旅館の各室の隔には格子又は透かし彫の戸を用ひたれば、極めて是れ公けなる生活をなすものと云ふべし（風通しのよき爲めの設備なればあまりに見透しなれば西洋人には居心惡かるべし）

余等は黃昏後市中を逍遙せしに、本街道の兩側には紅燈の輝ける樓閣ありて、晴衣を着けたる若き婦人は路傍に腰打ち掛けて遊客を待てり。されど大名及之に隨從する武士の往復絶えしより婦人の職業亦甚だ思はしからずと。

翌日早朝旅裝を調へて靜岡に向ひ出發せり。此日は炎熱熾くが如かりしも到る處風光絶佳なりき。東海道は前後久しく荒廢に委し、稀には回修工事を施せる處あるも、粗雜にして凸凹極まりなければども、幾世を經たる老樹の此道に緣蔭を與ふるは甚だ愉快なり。

午餐は藤枝（原書フヂエド）にて喫せしが茶亭の主人は塵埃を蒙りつゝ余等の一行を村境に出迎へたり。これ蓋し縣廳官吏の送り來りしを以てなり。警察は東海道至る處に行屆き余等一行の人力

車の走り過る時巡査は制服を着して嚴然と立てるを見たり。

午後淸らかに偉大なる富士を仰げり。富士山は直立一萬四千尺の高峰にして、其熟知されたる形狀は幾百回か畫かれ、其淸秀なる實に日本を代表する徽標たり。街道は或は海に沿ひ或は山を越え變化極りなく風光絕佳なり。一行は四時頃靜岡に到着す。靜岡は海洋と富嶽との間にある優秀なる土地にして、往時德川親領の都邑たり。德川家の祖先家康は政權を讓りてよりては靜岡に退隱せしが、末代將軍慶喜公も同じく一千八百八十七年（明治二十年）此處に退隱せり。

余等一行は先づ書記官を先頭とし、次に余及長崎氏にして、同行の警官之が殿となり終日有名なる並木道を旅せり。

將　軍

余等の一行たま〳〵安倍川の廣き流れに架せる橋を過ぎたる時、一臺の三輪車に遭遇せしが、一人の馬丁前に走り、尙空人力車其後に從へり。三輪車に乘れる紳士は歐洲風の服裝に絹製の日除帽子を頂き、頗る優美の出立にて余等を瞥見せしも、余等は敢て意に留めざりしが、後にて書記官に問ひしに此貴紳は是れ以前の德川將軍なりき。

往時の日本に於て歐人に誤りて政界の天子と目されし將軍は、五百の武士を伴ふにあらざれば決して外出せざりし事を思へば、此遭遇は誠に驚かざるを得ざるなり。聞く處によればその生活の狀態は眞の地方貴族の如く、己の所有地に大邸宅を構へ、每朝日本の大新聞を通讀し、自ら主動的に政治を行ふの意なしと雖も、萬般の問題に注意し、午後は夏日は運動の爲車を驅り、冬は狩獵に赴くなりと。其賢明の人なることを思ひ知るべし。將軍は日本の親族法及慣習に從ひて自ら往時の權勢一切を擲ち眞に私人の生活に退隱せるなり。

余等と同行せる日本紳士は往時國家の主權を握れる將軍の近づくを見たる時は、一種胸中に騷擾を來せるが如き色ありしが、靜岡縣知事は將軍の起居を訪問注意すべき任務を有すと、當時尙ほ日本には私かに將軍に意を寄するの徒ありしが、將軍は毫も之に恩惠を加へず、又之を勵ますにも非れど、唯舊恩を忘れざる人々ありし事を忘る可らず。公の嗣子卽ち德川家家產の相續者は公の甥に當れる人にして、現今東京にある德川公爵是なり。勅令によれば公は帝國貴族の首席を占むる人なり。

余は偶然の遭遇によりて日本滯在中の記事に將軍のことを挿入するを得たるが、歐洲人にして近時前將軍に見えん事は容易に期し得べきに非るなり。

往時日本の施政者たる將軍が隱遯地として撰拜せる此土地は漂渺たる靑海原を控え白雲皚々たる富岳を負ひ、又繁榮せる小都會を成すが故、之を丘上なる公園の中央（淺間を祀れる神社あり）よ

り展望する時は其觀の美なること果して如何ぞや。偖余等日暮歸來せしに先づ余等の眼中に、映せしは實に華美なる一茶亭にして、亭の周圍は莊麗なる庭園を以て圍み、紅燈は燦然として四圍を照らし紅、綠の衣裳を着けたる家人歌婦舞女等肅然として金色の襖の前に靜坐せしが、今余等の歸るを見て立ち出で迎へたる樣恰も是れ一幅の名畫なりき。齡尙若き知事は余等一行を旅館に送り、將軍に關する趣味ある談話及び時世の變遷等を語りて遂に夜の更くるに至れり。

靜岡より三島驛に至る間に富士川ありて、此川には僅に水面に浮び得るばかりの粗雜なる舟を以て旅人を渡すが故に大に不快なり。富士に積れる氷雪は春陽の暖氣によりて溶解し河床に落下し來り、元來急流なる上にも尙其水勢を增し尨然たる河床に水は洋々として將に淵に溢れんとせり。此急流上には一の橋梁もなく鐵道を架すべき橋も設計せられたるまゝ當時未だ工事に着手せず、余等は唯不完全なる船舶を以て渡河するの止むを得ざりき。河の彼方には入海ありて清見寺岸頭に聳ゆ、此清見潟の光景は實に人をして感嘆せしむるに足る、一千八百六十五年（慶應元年）將軍上洛の途次清見寺に於て休憩せられしことありしと聞けるが、余等は時間の迫れるを以て此寺院の內部を見ること能はざりしは眞に遺憾に堪えざるなり。余等一行は興津にて海水浴を行ひ頗る神氣を保養したる後午後三島に到着したり。三島以東は所謂函嶺にして、道路は漸く峻嶮となるを以て、余等は駕籠に乘りて之を登りしが、階級の如き石徑には輿夫も頗る困難を極め、乘者も亦不快を感じたり。三四時間の後遂に箱根に到着し、日本風の旅館羽生屋に投宿し、風呂に浴して歐洲風の晩餐を喫し、玆に初めて神氣爽然たるを覺えたり。箱根湖は二千六百尺の高地にありて、箱根村より其名を得、四面蒼然たる連峰を以て圍まれ光景甚だ美なり。

次日の朝に至り余等は富士の高峯永遠の白雪を頂きて蒼然たる箱根連山を照すが如きを見、湖上又遙かに莊麗なる離宮の毅然として聳ゆるを望み得たり。離宮は洋風の建築にして大臣伊藤伯の建議により十年前建設せられたるものなりと　天皇陛下には一度箱根山中に行幸ありしも永く御逗留遊ばされしことなしと、是れ此離宮は東京より遠隔の地に僻在するを以てなり。されど健康上極めて有益なる地なるが故、そは余の常に遺憾とする所なり。

離宮は徒に諸種の設備を爲せるまゝにて、特にその建築趣味に乏しく、寧ろ旅館の如き觀あるが故に、到底日本宮人の住居に適せざるなり。故に如何なる方面にか之を利用せしむること可ならんと思へども、宮內省に賠償すべき金額の多きに恐れて志望者あるなし。斯の如くなれば離宮は有益に使用せられずして往々貴紳の避暑に充てらるゝに過ぎざれど、これとて又宮殿宏大なるを以て一私人の滯在には適せざるなり。されば最も適當なる用途として其全體を歐人の宿人の宿屋業者に貸附けなば、やゝ適當なる利用といふと得べけんも、此計畫は入費多くして實益少なきを以て當時は末だ斯の如き志望を有せるもの之無かりき。

離宮より出づる道路は湖岸に沿ひて見事なる杉並木を過ぎ、舊き寺院、赤き鳥居を眺めつゝ山峰を越え、内國人の群集せる硫黄溫泉蘆の湯に至り、次に歐洲流なる溫泉場宮の下に達す。此地はシユワルツワルド(獨逸國に在り)に似たる地にして日本在留の歐洲人間には熟知されたる溫泉場なり。

高等なる旅館は溫泉浴場を設けて客を迎えるが故、その滯在誠に愉快なり。余等は此地にて獨逸公使ホルレーベン氏に邂逅せしが、公使はベルツ博士の別業にあり、其他東京外交官の人々亦多く此處に避暑せり。余等は旅中に感じたることを知人に語りつゝ此地に數日愉快に滯在したり。

歸　京（東京への歸路）

宮の下を出でゝ小田原の平原に至る間には無數の瀑布斷崖に懸り、激しては玉を碎き、淀みては淵となり、夏を遮るの森林は鬱蒼として暗く、實に幽玄の趣ありて極めて愉快なる山路なり。今此空氣清爽なる景勝の絶佳なる土地を捨て汽車に乘じ去るは余等割愛の情に堪えざるなり。

偖余等の歸宅するや皇子御誕生の趣拜承せり。是れ昭宮殿下にして、御生後幾許ならずして薨去せられしが、全國の新聞紙は其報を傳へて國民恐敬奉弔の意を表せり。宮臣某語りて曰く　皇帝陛下の女御を置かせらるゝは歐洲の見解に從ふときは正當といふと得ざるを以て、歐洲人には可成之を告げざらんとするなりと、されど是れその見解を誤れるものにして、既に日本に定めたるの法律あれば之に從ふを以て正當とすべし（日本親族法による時は其子は全く適法にして又相續權を有す）

かねて御造營中なりし新宮に八月下旬初めて參候せり。此新宮は長き歲月の間工事を督勵し來りしが、其終りに近づき大に進捗して今や漸く其完成を告げたり。此新宮に就きては他日猶詳細に記述すべき機あるを以て、猶此工事中の新宮に付きては玆に筆するの要なく寧ろ之を後日に讓らん。

八月末東京の暑さは極めて甚だしかりしかど、余等は依然東京にあり、幽邃なる禁苑に小兒と共に車馬を驅るを許可せられしを以て、此處に清凉を樂むを得たり。皇太子殿下には屢々此御園に御出遊あらせられ、余が小兒等も陪遊するの榮を得たり。

宮内省にては此時外交官接待の規定を制定せんとし、日々之が起草に多忙を極め、之が爲には數月間宮中及外務省内に協議を開き、或は又重なる外國の外交官の代表と協商し、遂に　皇帝陛下の御裁可を經、英佛兩文に印刷して之を實施することゝし爾後は必ず之に依遵せり。

從來日本政府及宮内省と外交團體との間に起りし禮法に關する確執も外國の抗議に左右せられて確乎ならざりし外務省の方針も、共に此公布を以て結末を告げ、爾來待遇法は停滯なく行はるを得たり。

斯の如く規程を定めて來朝の外交官をして皇室が之を待遇するの標準を了せしむる國極めて僅少

にして、日本は露國と共に其規程を有するの國なり。余は既にセント、ペテルスブルヒに在りし日、斯の如き規程により一般の承認を經て之を實行せし利益を認めたる後なりしを以て、余が日本に滯在中國情注視の爲め來れる使臣の滿足するやう此待遇法を規定せられたるは余の深く喜びとする所なり。

偖其一二を擧ぐれば、日本には未だ常置の大使派遣せられず、故に又公使は歐洲各國及其朝廷に於て受くるよりも尙幾分か高き地位を附與せられざるべからざる事其一なりしなり。又殊に困難を感ぜしは代理公使の待遇にして、此極東の帝國にありてはよし一年には滿たざるも數個月代理をなすの場合は屢起る事實なれば之に對して特別の扱ひをなさゞるを得ざりしこと是なり。されど此等に關し外國使臣の請求と國務大臣の意見とは遂に調和するを得、從て紛紜の根本を斷つを得たり。

明宮殿下

西暦一千八百八十七年（明治二十年）八月三十一日明宮殿下には八歳の御誕生の嘉辰に當り、日本皇儲と御決定相成り、帝國の高位高官を集め總理大臣及宮內大臣伊藤伯爵によりて披露せられ、禁苑中の御殿にて午餐を下賜せられぬ。明宮殿下は長き廻廊によりて他の宮殿と分たれたる御料の御間にて拜謁仰付けられしが、白麻（りんね）の御服を召され、小さき拜謁の間に疊にて作れる低き御座に立たせられ祝賀の禮を受け給へり。日本人は云ふまでもなく殿下の御前に叩頭の禮を行ひしが、余等歐洲人には握手の禮を允許せられぬ。此間二人の少年は扈從として殿下の背後に跪坐し他の扈從は無言のまゝ壁際に並び立てり。

殿下に奉仕せる侍從は小禮服を着し、祝賀參內の人々はフロックコートを着用せり。他の人々は皆疊に伏して御祝申上げしが、余は是と異りて歐洲風の敬禮をなせしを以て、皇太子殿下には少しく呀かり給ふ御樣子なりしが、奉仕せる式部官が竊に何事か言上せしを以て直ちに握手を賜ひたり。皇后陛下は皇太子殿下の御養母に當らせ給へと、殿下の御養育の爲めに厚く御力を注がせ給ふを以て、殿下には頗る御發明に慈愛深く居らせ給ふ。殿下には時々御健康すぐさせられぬことありしを以て、その御慈愛深く御活潑なる御稟性も幾分沈ませ給ふ折ありしが、種々御手配の後御健康を回復し、益々御强壯にならせられ近年近衞家（原書の儘尤も後章には九條家は皇太子殿下の妃殿下の御生家たる由を記せる處あり）より妃殿下を入れさせ給ひ且つ今は皇子さえ居らせられぬ。

余等は日本滯在中屢々殿下に拜謁するの機を得たりしが、何時も御快活に御慈悲深く渡らせられたり。學習院は往時京都に在りし貴族の學校なりしが、後再び東京にて再興され、皇太子殿下はこゝに御物學びありき。後又伊藤伯が外國語を學ばせ給ふやう屢言上する所ありしかば、英語を御修め遊ばされしとか。余の滯在中は日本語の外は只漢學を解す爲め支那字を學ばせ給ふのみにて、外

國語は未だ何の御修業もあらざりき。近時新聞離誌にて拜承する所によれば、獨逸語をも學ばせ給ふ由なれど余の滯在中は此御事之れなかりき。

是れ畢竟するに漢學の修學は日本人に取りては恰も歐洲人のラテン語、ギリシヤ語に於けると等しく、五年七年の日子を之に費さゞるべからず。故に近世流行語の學習は遲延して十五歳以後となるなり。又歐洲の根本的教化は支那日本等の教育とは到底融和し得ざるを以て、日本人の語學上其他歐洲に關する智識は概ね不完全なるを免れず、然らざれば又自國の教育に缺點ある人たるを免かるゝ能はざるなり。幼少より全然歐洲に於て人となり一國若くは數個國の歐洲語を繰る日本人は多くは歸國後日本語に精通せず、漢學に至りては殆ど誦讀し能はざるの有樣なり。故に皇太子殿下には日本人の眼中に映ずる如き大缺點を避け給はんがため、若し歐洲に御漫遊あらせらるゝことゝなるとせば、その以前多年の間は依然日本にて御教育を受けさせらるゝの要あるべし。舊御殿は明宮殿下の御所と御決定相成りたるが故に、皇室が新宮に遷らせ給へる後は直に此處に御遷宮の筈なりき。されば又之と同時に又東宮職の御設けあるべし殿下は學習院に於かせられては同校の制服を召されたり。

下卷目錄

内閣交迭
獨逸皇太子殿下御病況の通知
日本國の紋章學
日本國民の服裝
日本に於ける名門の階級
上野公園
函嶺旅行
天長節
御狩獵
觀菊御宴
公使館參事官デルンブルク男爵
新嘗祭
日本帝室

侍從武官
小松宮殿下同妃殿下
新年拜賀式
フオン、ホルレーベン公使の出發
皇帝陛下の御不例
ウイルヘルム皇帝第一世陛下の崩御
メツケル少佐の出發
ツアツペ總領事の死去
觀櫻御宴
ウートレーメー暴行に逢ふ
日光旅行
御狩獵（放鷹）
地久節及ザクセン、ワイマルの王子ベルンハルト殿下の御來朝
ヘンリー、フオンオルレヤン殿下
フリードリツヒ皇帝の崩御

日本皇室典範
箱根湖
富士登山
宮內省事務
佛國公使シエンキウイツツの來朝
橫須賀に於ける軍艦進水式
ゲンフ條約成立二十五年祭
日本婦人勳章
天長節
昭宮殿下の御病氣及薨去
磐梯山に登る
加賀屋敷に於ける園遊會
獨國學者及建築師
慈善會
耶蘇降誕祭

千八百八十九年（明治廿二年）の新年御祝
新皇居への遷御
憲法發布式の次第書
ウイルヘルム二世皇帝の御誕辰祭
墺國皇太子ルードルフ殿下の薨去
千八百八十九年（明治二十二年）二月十一日憲法發布
有栖川威仁親王殿下の歐洲御漫遊
宮內省の外國顧問官廢止
歸　國

內閣交迭

かねて外國王子の日本に來遊せらるゝ通知ありしが、其到着期は九月中とのことなりしかば、宮中に於ては之が迎接準備協議の爲め頗る多忙を極めたり。其貴賓は暹羅國の王子にして、又バルマブルボル家のバルデイ伯は墺地利公使館に來らるゝとのことなりしが、其到着は共に余等が京地を出發せる後なり。

此時に際し當時の內閣の運命は益々危殆の狀に迫り、伊藤伯は宮內大臣の職を去りて新に外務の椅子に着き、同時に年來外務大臣たりし井上伯は宮中顧問官に隱退せり。宮中顧問官の職は獨逸の現任ゲハイムラードに比すべきものなり。又黑田伯は條約改正に當りて內閣の無益過大なる讓步に反對し來れる元老なるが、新に土方子に代りて農商務大臣となり、土方子は其希望を容れられ新に宮內大臣の職に就きたり。

此變動は宮中及宮內省に取りては非常に重要なることにして、大臣は誠に好意の人物なりしも、少しく狹量なる處ありて、且全く不羈獨立なること能はず。永く內閣總理大臣（伊藤伯）の指揮を受くるに至れり。

新宮内大臣は吾人の自己の地位に徐々に改革を感せしめ、宮廷現今の新組織の進行を以て己が責任事業とし、外國人を宮内省に入れ顧問として内助せしむることとし、鋭意其職に從ひしが、是等の改革事業は一時に急變せしものに非ずして極めて徐々に進行せられ、殊に大臣の屬僚中の或る者は一層適應せる改革事業の進行に對する計畫を有し、其職務の權限を明確ならしむることを勉めたり。

偖九月の降雨期に入ると共に、余は重き僂麻質斯に犯され、止を得ず相州宮の下及箱根の溫泉に暫く病痾を養ふ事とせり。此等の地は彼の大佛を以て有名なる鎌倉海水浴場及風景絶勝なる江の島等に近くして、其等の地に遊ぶこと甚だ容易なり。箱根地方は炎威燒くが如く、紅塵萬丈の東京と異り、峰は大氣新鮮にして且登るに容易なる二三千尺の高さを有せる誠に得難き避暑地なり。されば余等の若し不快なる時は忽ち宮の下に赴きて兩三日の養生を爲すを常とせり。日本にては氣候の變遷を豫知し易きが故に、歐洲外の國中にては日本を最上なる國とすべく、歐人の數年間滯在するもその健康を害すること無かるべく、又國土の風光は實に吾人を眩惑せしむるに足るなり。他の熱國に在りては外交官其他の官吏は其夏期に至れば必ず賜暇旅行を歐洲に企て、其費用の嵩むに拘はらず、各所の山間に入りて清鮮にる空氣を呼吸するを常とすれど、日本に於ては費用少くして愉快多きが故に、幼兒と少年とを問はず、殊に此等の地に夏期を過さしむること肝要なり。又近年鐵道は恰も蜘蛛の巣を張るが如く四方に聯絡せるを以て、箱根に赴くの途次を以て尙他の清涼なる避暑地を遊覽し得べし。

獨逸皇儲御不快の報

恰も此當時電報に新聞雜誌に獨逸皇儲の御不例及醫療御手當の事ども早くも世界に傳へられしが此悲しむべき報知に接したる人々は永く其事實を信ずるに躊躇したり。日本帝室に於かせられてもいたく御心痛あらせられ、爾後　兩陛下より臣等に問はせ賜へること數回にして、甚だ御懇切を極められければ、余等は時々の私信によりて僅かに御答奏申上ぐるを得たり。當時　陛下の侍臣竝に宮内省に於ては十一月三日の天長節及新年祝賀の準備を始めしが、天長節の御儀式に關しては三月二十二日の祝賀會即ちウヰルヘルム一世皇帝陛下御誕辰の節にあたりて、伯林の宮廷に於ては如何に其式を行はれしか、余は十分之を知れるを以て委しく之を記述せんとす。

日本にては大祝賀に際して宮中へ召させらるゝに代へて、其當日外務大臣に於て延遼館に大夜會を催ふし、外交官を始めとし其他内外の貴賓を招待するを常とせるが、玆に宮中より臨御あるも可なるか、或は必らず臨御せらるべきものなるかの問題起れり。恰も當時伯林に於ても宮内大臣及陸軍大臣の舞踏會に關して同樣なる問題ありき。偖此問題の解決は　皇帝陛下は御隨意に、皇后陛

下は他動的に決せられ、親王を　皇帝陛下の御代理に内親王殿下を皇后陛下の御代理に御依托の事と定められたり。

日本國の紋章學

茲に　皇帝皇后兩陛下及皇子殿下等の專用さるべき特殊の御旗に付きて如何にすべきやと種々研究さるゝの運びに至りしが、東京華族局の紋章に精通せる人々の助力によりて一の成案を提出せり。既に世人も知れる如く日本にては皇室は申すに及ばず、然るべき門閥の家には必ず各自の紋章を有し、古より紋章に關して精細なる研究行はれ、歐洲文物の輸入せらるゝ前既に各家の紋章を冊子として公刊せられたることあるは普く世の知る處なり。

抑紋章は日本中世紀及封建時代（千八百六十八年に至る）より武器、器具或は家屋、寺院等苟も紋章を附け得るものには廣く之を使用し來れり。

されば國旗は申す迄もなき事ながら、皇室の御旗を定めさせらるゝは御尤もの次第にて、殊に逐年海軍の進歩より見るも從來行はれざりし海軍御檢閲の事も、近々御實行あるべきにていよ〳〵緊要のこととはなりけり。

偖斯くの如き場合に際しては日本の圖案家及美術家の意匠の優れたるを知らざらんと欲するも得べからず、此問題の如き實に見事の成果を得たりき。又獨逸皇帝普魯亞王及王后の御旗は日本の御旗地に付くる御記章を案ずるに當りて大に參考の料ともなりて遂に定められけるは即ち十六片の菊花及桐花にして、こは共に皇室の御紋章なり。而して前者は國家上の御用ひ後者は皇室上の御用ひに當てられけるが、何れも相應しき御定めなりけり。

日本國民の服裝

當時宮廷の謁見式及御祝賀日の差迫れるを以て、其準備上茲に再び服裝の問題起れり。余は宮中に於て貴婦人の服裝に關し余の意見を述べたりしに、皇后宮大夫は此事に關しては猶一應大臣伊藤伯に申し述ぶ可き旨を傳へたり。されど余は此事件に關して兼ねて伯の意見を知りたれば、獨逸公使の助力をも得て、伊藤伯の意向を飜さんと勉め、セント、ペテルスブルヒ、ブダペスト、ルーメニヱン其他の宮廷に於ても自國固有の服裝を着くるの例を引きしも、遂に伊藤伯の意を動かすこと能はず。全く不成功に終りたり。伯の言によれば、前述の諸國は日本に異り中世紀を過ぎたり（日本より早々開けたりとの意）日本にても後來には日本國固有の服裝に復舊すべき時あるべけれど、今日にては必ず歐洲の服裝を以てすることを確定すべしと述べ、且ホルレーベン公使も曾て伯が古き服裝を廢せんと計畫したる時之に同意を表したりと告げられたり。伊藤伯は此事に關しては既に

種々研究をしたる後なるが故、到底其意を飜すの望みなきなり、伯は余等の日本へ來る以前曾て假裝舞踏會を總理大臣官邸に催せることありて、多く門閥の紳士を招待し二十年前に廢れたる父祖の服裝を著して舞踏會に出でんことを希望せしが、若き紳士等は爭ひて好評を博せんとし、或は極端に走りて不注意若くは缺點多しと新聞雜誌に非難せられしことありたり。

服裝談の終結として、伯は余に向ひ此問題は我國に於ける政治的問題にして、宮內省にては確定せる意向なければ、此問題は終局せるものと見做し、今は再び論せず。然も此問題の研究は一時も廢止せずして進行すべきことを乞へり。是に於て宮中にては　皇后陛下の御服地には成る可く內國產の織物を御用ひありて、之を洋式に調製せしめらるゝことゝ確定し、余が妻其旨を受けて伯林なるゲルソン會社に調製の御用を命じたりしが、同會社にては非常なる熱心と精巧とを以て御用を勤め暮年にして東京へ送附し來れり。偖日本の織物の在來は大なる花模樣ありて、其絲質色合共に巧に調和を得て見事云はん方なけれど、あまり華美にして殊に正服には色彩に過ぎて歐風の服裝にはあまり適せりとは云ふべからざるなり。

皇室御料服地の調製は總て京都の織殿にて製せられしを以て、先づ織模樣及地色の標本を取寄せ、十分之を選擇したる上、斯る事には好みて熱心に意を注ぐ女官とも數回の交涉を重ねたる上、京織殿に命じたるに、暮年にして出來上りしは誠に見事なる織物にして、　皇后陛下の御召料竝に宮中の御服の御用に適し、若し此道の人に見せなば定めて嘆賞して止まざるべし。宮廷の服裝問題は伊藤伯の勢力ある言にありて決定せられしと雖も、輿論は之に反對し、余の憑せる如く實際之に因りて輿論は首相の位置に變動を催し、次ぎて大臣の交迭を來したり。

當時の內閣は重に薩派の人々より成立せしを以て內閣の運命が旦夕に迫れるの風說は爲めに鹿兒島（薩摩の首都）に動搖を起せり。此時新聞紙の傳ふる處によれば、薩摩人は內閣を支維する爲め打揃ひて東上せんとか、或は先づ舊主薩摩公（常に鹿兒島に居住す）に協議すべしとか、種々の說ありしが、明快なる政治的頭腦を有すとの評ある公は先づ鹿兒島人を慰撫し、且自ら東京に來りて事情を探明せんと決心したりと。然るに其後間もなく舊薩摩藩主人たりし島津公は己が帆船に乘じて東上し、　陛下よりは御懇篤なる待遇を得、薩派の人士と商議を遂げて再び鄉里鹿兒島へ歸れり。

偖茲に奇とすべきは日本人が其舊主に對するの有樣にして、たとへ高位高官にある人も、よし內閣大臣と雖も、其舊藩主に對しては全く古の封建時代の風習を存し、祖先傳來の畏敬を表し飽迄尊敬すること恰も彼等が特殊の君主たるが如くす。舊長洲藩主毛利公は常に東京に居住せられしが、其舊臣より尊敬を受くること又島津公に等しく、兩公が泰然として高位高官に在る舊臣の恭順なる禮遇に對するは威嚴甚だ盛なるものと云ふべし。島津公は舊大名中最も勢力あり且富裕なる領主に

して、公の參内は多少宮中の注意を惹起したり。

日本に於ける名門の階級

宮廷にては公の勤務に從事するに際し其同僚間に階級の差別（官を主とし大名、士族又は爵の高下）を立てざる方針を取れり。千八百八十七年（明治廿年）十月初旬歐洲各國の宮廷に派遣せらるべき使臣に御暇乞の拜謁を仰付けられたり。舊大名たりし戸田伯は維也納駐劄を命ぜられ、其秀麗優美なる夫人と共に、任地に出發せんとするに際し、無數の知己は之を停車場に送りたり。是れ東洋的風習にして東京に於ける貴族社會一般に行はれ、余等又其列中に在りたり。羅馬には將軍家傍系の德川侯を、伯林には往時京都の公家たりし名族の西園寺侯を任命せられたり。侯は階級門閥共に戸田、德川兩家に優り、佛蘭西にて教育を受けしが、然も佛蘭西化せず、今日に於ても尙ほ或は國務大臣として或は貴族院の議員として政治界に雄を稱せらる。

日本の貴族殊に大名家の主長は宮中及社交上に於て未だ一定の階級制度を有せず、是官職階級は制定せられたるも唯眼前の必要に迫られたる制定なりしを以て用意の周到を缺き、歷史上或は社交上に有する特質を疎外せるの憾みありとす。されば此密慮すべく且政治上に關聯する問題は爾來研究さるゝに至れり。

當時貴族の一人にして尙ほ春秋に富める岩倉公爵は宮內府の一員として大膳大夫たり。一名門の總本家たる鍋島侯爵の式部長たるありしが、余は英語を以て是等の貴紳と會談せしに、階級に關する規定は現今普魯亞王室に行はるゝものに則りて起草せらるゝ由を聞けり。抑英國階級制度は專ら門閥によりて規定せられ、墺地利の制度に於ては身分其他貴族の特權を尊重すること嚴にして、露國に在りては一に官職による事とし、佛蘭西に在りては共和的精神に基礎を有し、伊太利に於ては議會を基礎とせる階級を制定せるを以て、是等は何れも日本に應用するを得ず。

之が改變に際しては獨逸及普魯亞の制度は最も日本人の意に適ひたるものにして、官職、功勞及門閥を參照配合せるものなり。此制度は種々纏綿せる歷史上の要求を顧み、又現時の政治上に適し、且日本國民の階級制度を望むの意を容れ、十分心を盡し創定せざる可らざるが故、實に多大の辛勞と政府と數度の協議とを經て始めて成就するを得たり。

公爵及侯爵の班位に列せらるゝ人々は數世紀以來日本國の歷史上に於て重要なる職に就き、自家の利益を顧みず愛國的精神を以て皇室を補佐し、遂に今日の如き政治上の大勢力を涵養せし功勞あるものなれば、新創定の階級制に於ては公侯の地位は大勳位菊花章及總理大臣各國務大臣及二三の親任宮內官の次位たる事と確定せしが、此制定をなすに當りて大に參考となりしは、普魯亞に於ける名門及新華族の地位に關する規定なり。

此制定の進行中余が妻は毎水曜日午後九重の奥深く　皇后陛下の御召に應じたりしが、妻は其都度陛下の御慈悲深く御聰明に渡らせらるゝに感激して罷り出るを常とし、又往々緞子等の下賜ありしは榮譽にあまれる紀念なりけり。　皇后陛下には歐羅巴に於ける種々の文物制度に就きて御下問あり、又女官達には屢々ライプチヒ或は倫敦より發行せる繪入雜誌によりて當時の風潮を說明したり。水曜日以外には女官より訪問せられ種々意見を徵せられしが、斯の如き關係は日本を辭せし後も永く郵便の交換によりて永續し、或は北島令孃と英文を以て信書を往復し、或は又山川令孃と佛文の郵便を交換せり。其頃皇后宮に奉仕する女官は尙侍、典侍、掌侍、命婦、女孺にして、佛國の專門字書には之に當つ可き佛語を確定したり。

上野公園

余等は職務の余閑を以て或は馬車を馳せ、或は馬を驅りて東京附近を遊覽したるが、其極めて優秀なる地を上野公園なりとす。此地は元來將軍の靈地にして其家臣より奉納献立せる石燈籠、青銅燈籠其他木造寺院等の夥しき擧て數ふ可らず。こは近年公園となりし處なるが、規模宏大にして千古の蒼翠綠蔭滴るばかりにて、春にありては老櫻の並樹は一望爛熳として薔薇の花を以て蔽へるが如く、誠に都會の良公園なりとす。

又舊寺院地の內に在りし一大池は蓮花を以て飾られ、其周圍には競馬場ありて競馬、自轉車競爭に便し、茶亭は寺院の近傍に密集せり。博物館は老樹鬱蒼たる下に日本古代の武士屋敷風に建設せられ、時代を追て美術工藝品を展列す。博物館には極めて良好なる漆器の標本あり、例へば輿には精巧なる蒔繪の外以前の所有主の紋章を有し、武具、靑銅器、具足、餝物、象牙彫刻其他嘆賞すべき刺繡等甚だ多し。

されどこは單に美術工藝品の蒐集卽ち帝國博物館として僅に其手始に置ぎず、巴里、倫敦、ボストン等に於ける博物館に於ては當時已に數倍の優良なる品類を藏せり。然るに此頃より全國の貴重なる古器物は之を登錄し、且番號を附して其輸出を嚴禁せられしを以て、爾來此博物館も重大なる價値を得るに至れり。

日本近世の美術品及歐洲工藝の模造品（例へば油繪）等の陳列は當時最も優等なる種類にして、又蒐集し能ふ限りといふよりは寧ろ篤志より出で在るもにして、吾人は斯の如き製作品を見んよりは寧ろ好んで古代傳來の器物の前に足を進むるなり。

上野公園其他市中の高地よりは彼の富士山の巍然として千秋に聳ゆるを見るを得ん。此山は急斜せる圓錐形を成し、日本風土の優美なるは之によりて代表せらるゝを見るべし。芝及上野公園竝に吹上、濱御殿、芝離宮等の禁園は四時異なれる風景を呈し、余等は有難くも禁園に入るを許された

れば、時々其内に散策を試み此絶勝を賞し得ることを謝せざるを得ず。

函嶺旅行

降雨期の了れる後は再び愉快なる溫暖なる乾燥なる天候は秋淸と共に來りて十一月下旬に至るまで變ることなし。

余は十月下旬の事なりしが宮内省官吏にして巧に佛語を繰る山内書記官及主殿助小笠原氏と共に函根離宮へ差遣せられ、離宮に歐洲風の設備を爲すに就て一々意見を申述ぶべき命を受けたり。此離宮は未だ御用の準備整ひ居らざるなり。余は思ふがまゝに山間を跋涉すべき好機會を得る事なれば喜んで此命を拜したり。

余等一行は盆を覆すが如き大雨を犯して宮の下に到着し、これより更に山嶺を越えて箱根湖に達し、一行は一小旅亭羽生屋に投宿し、晝間は此高山中の未完全なる離宮に事務を執りしが、天候快晴にして秋氣淸く仙境の寓居誠に無上の趣味を感じたり。余等が協議の結果は常に日本官吏により て筆記せられ、設備費の見積等と共に宮内大臣へ報告せられたり。該設備が其後實行せられしや否や、又當時使用に堪えざりし宮殿に幾分改造を加へられしや否や余之を知らざるなり。

天長節

此際東京は避暑より歸れる人多く、市は一層の繁昌にて余等歸京以後は益々天長節の準備に忙はしかりしが、當日は東京衞戍軍隊の大觀兵式擧行せられ幸ひ天氣淸朗にして萬事甚だ好都合なりき。

正裝せる人々は式場なる　陛下の御座所近く參集せしが、余等も亦馬車にて行き、賓客其他一般の拜觀者は引も切らず群集せり。獨逸公使ホルレーベン氏も騎兵豫備隊長として、近衞騎兵聯隊長の派手やかなる制服を着け、ドラゴン龍騎兵隊の制服を着けたるシエリング副領事を伴ひ、　皇帝陛下に扈從して軍隊の正面を通過する列中に見えたり。　皇帝陛下には常には御馬に乘らせらるゝに關はらず、此觀兵式の時御馬車に召させられしが、斯る際御馬車に召させらるゝは何故なるや、余の常に疑を存する處なり。

恐らくは此行幸に侍する侍從長及宮内大臣が騎士にあらざるによるならん。此兩宮内官が文官の大禮服を着けて陪從するは獨人等には奇異の觀をなす故、觀兵式の際は軍服を着けたる陪從者の方可なるべしと言上せしに　陛下には直に御聽こしめされ、海軍服を着けられたる有栖川威仁親王殿下を召し給ひしに、殿下は直に兩氏に代りて龍車に陪乘し陛下の御前に坐し給へり。參列せる普魯

亞士官の判定によれば、軍隊の行動は歐洲以外の軍隊としては能く熟練し、騎兵は可といふべく砲兵最良に運動せりと。觀兵式は此日早朝より開始せられしが、式後には宮中に拜賀式ありて御側近く内外の群臣を接見せられ其間數間なり。余はこれ迄御用の爲拜謁すること數回ありしも　陛下に極めて咫尺し奉りしは就任の拜謁以來今回始めてなり。

陛下には將官相當の階級を有する者に對しては直立せられ、以下の者に對しては著御のまゝ引見せられ、大元帥の正裝にて日本の勳章を佩用せらる。

次ぎて宮中の食堂には莊嚴なる日本式午餐會催せられ、之に列席するは外國使臣及高位の宮内官並に政務官即ち第一流の官職にある者に限らる。斯くて列席者の前には魚、栗、蕈其他を載せたる膳を据えられ、陶製の杯にて微溫の酒を賜ふ。此料理は之を紙に包みて家に携へ歸るを得。又精巧なる透明の酒杯は金色の菊花の紋章を有し、祝賀會の紀念として受領するを得べく、天長節には全國々民擧て祝意を表するは實に羨むべき良風と云ふべし。

賜饌のあると共に外臣の年長者は（當時は支那公使なり）各國首領を代表して祝詞を申し上げ（こは佛語に飜譯せらる）　陛下には起立して之を受けさせられ、玉音靜かに簡單なる上意を述べさせられ、御側に侍せる式部長鍋島侯爵は之を佛語に通譯し、此時　皇帝陛下には御座に据えられし由緒ある朱塗皮張の御椅子に御着座あらせらる。

伊藤伯は又内國人を代表して日本語を以て祝詞を述べ　陛下には復之に上意を賜はる。斯の如き場合の演說は其腹稿を豫め宮内省にて檢閲せしむる定めにして其一閲を余に命ぜられたり。

賜饌終りし後は次の間に於て煙草を賜はり　陛下には入御あらせらる。此間陸軍音樂隊は室の硝子戸を隔てし庭園中にありて嚴肅なる音樂を奏し衆皆之を喝采す。

同日の夜は寒氣肌を透すにも關らず、外務大臣の舞踏會は延遼館の大廣間に擧行せられしが、館内廣濶にして華美を盡したるも、唯暖氣を取るの用意缺けたるを以て、賓客の大部分殊に盛裝を凝らせる貴婦人は多く風邪に罹りしは甚だ惜むべし。此廣間は電氣燈を以て輝され諸種の花を以て滿飾せられたるを以て、其莊麗なりしこと實に見るものをして驚嘆せしめたり。

御狩獵

天長節後數日を經て皇室御料の莊園に於て野鴨の狩獵を催せられ、岩倉侯爵及山口主獵局長は台命を受けて墺地利の學者シュタイン博士と余とを招かれたり。博士は維納なる國法學教授ローレンツ、フヲン、シュタイン氏の子息にして、當時日本に滯在し大臣伊藤伯の好遇を受けし學者なり。

鴨池は生ひ茂れる木立に圍まれ、中央より恰も後光の發する如く十二筋の溝を有し、其終點には餌箱を据附けありて、各溝の間には木立茂れるを以て、其一つに隱れ居る時は他より見ゆることな

し。餌箱の兩側には砂利を布ける徑路を設け、其處に三人宛を配置し、各長き竿の頂に結び附けたる大なる捕蝶網の如きものを手にす。飼養鴨は常に此池に棲み、拍子木を打つ時は溝に餌を撒き與ふるの相圖として競ひて溝に泳ぎ來るの習慣となり居るが故に、無數の野鴨は飼養鴨に續きて同じく溝中に入り來る。此時音を立てゝ之を驚かせば彼等は電の如く空中に飛揚するが故、是を待設けたる六人の獵者は此機を逸せず各其網を以て野鴨の飛び立つ處を捕獲するものとす。

熟練なる獵者は同時に二羽を捕獲すること珍らしからずと雖も、初心者にありては一羽を得ることとすら容易ならざるなり。鴨を捕へし時は木立に隱れたる獵者の助手忽ち顯はれ出で此憐なる鴨の頸を捩ぢ、獵者は更に其空網を携へて足音を立てざるやう注意して木立に隱れたる次の溝に至り前と同じ方法を以て獵獲す。斯の如くして鴨池を一周し十二の溝を獵し盡し、多數の野鴨を捕獲せる後一同綺麗なる小樹に入りて辨當を喫す。山口主獵局長は是に於て一の調書を作り、各人の捕獲數を記載す此處にて作られたる狩獵報告は　皇帝陛下の御覽に供するものなるが　陛下には時々御戯言遊ばさるゝことあるとか承はれり。

斯る鴨池は往時にありては將軍は勿論大名に於ても所有せられしが、東京近在に在りしものは多く皇室の御料とせられたり。秋冬の候數多の野鴨北方より來りて溝を蔽ふ時は屢々斯くの如き狩獵を擧行せらる。又　皇帝陛下御躬らも親近なる方々を從へさせられ此狩獵を催さるゝこと稀ならず。

シュタイン博士が斯く優遇を蒙りしは有名なる彼の父シュタインが日本の政治機關の創定及欽定憲法草按の起草に關して有益なる助言を伊藤伯に致せる故なり。シュタイン博士は永く日本に滯在して德川將軍時代の日本法律の研究に從事せり。

其頃伊藤伯は薩摩公を答訪せんが爲め鹿兒島に赴けり。余等は伯の不在中にその夫人、令孃鍋島侯爵及夫人、室町高倉の兩典侍、香川皇后宮大夫、長崎式部官、外務省傭の米國人ジャウドン氏(日本に居ること既に長く極めて世評宜し)及び我が國の公使ホルレーベン氏等を招待して新築落成の宴を催せり、余の雇ひ人伊藤といへるは卓上に花を飾るに長じ、何人も到底之に及ぶこと能はざらんと思はるゝ程なるが、概して日本人は此技に於ては誠に熟練なるもの多く、又日本の料理人も能く其責を盡したり。來客の多數は日本語の外解せざる人々なりしが、ジャウドン氏の怪しき日本語は絶えず來客を喜ばしめて宴會總て滯なく捗取るを得たり。東海道旅行の際購求せる岐阜提灯は艶麗なる繪を畫かれたるものなるが、此夜の宴會には之を軒端庭園等に飾りたり。

觀菊御宴

詩人ピール、ロチの筆によりて有名なる觀菊御宴は十一月八日赤阪御所の御苑に催せられ、余等

之に預るを得たり。　皇帝皇后兩陛下の出御遊ばさるゝ前に當りて、男子は御殿の屋外に集合し、皇后陛下の命を拜せる貴婦人は殿中に御待申し上げしに　陛下には女官の外宮殿下妃殿下三條、岩倉兩公爵夫人及モール夫人に陪從を仰せ付られたり。

秋の日の朗かなるに庭園は言ふべからざる美觀を呈せり。此御苑の後方は綠の丘に限られ、數層の階級を爲せる菊花檀は行程一時間の廣きに亘りて御苑内を飾れり。

菊花を毎年同時節に咲かせむは御庭師の最も苦心する處にして、莖上に咲き出せる花はその色によりて區分せられ、假天井を作りて是を覆ひ、其上部に張れる紫色の幕には白色の菊花御紋章を染出せり。又濃紫色の幕の下には白、赤、黄、等の花檀ありて、或は薔薇色或は牡丹色一として美麗なる彩色ならざるはなく、之を護るに青竹の欄を以てせり。就中一莖よりして其枝恰も後光の如く圓く四方へ延張し、高さ數尺に達して滿枝皆花を着け、最も溫雅なる色に咲き出でし一株は妖嫁人の心を奪ひ、當時之を見たる人は終生其美を忘れざるべし。

屋外の其處此處に配置せられたる軍樂隊は嚠喨たる音樂を奏し盛裝せる内外の拜觀者は　兩陛下の出御を待ちしに、先づ　皇后陛下は多數の扈從にかしつかれて出御し、御苑の小高き丘の裾に　皇帝陛下を御待ち遊ばされたり。

承る處によれば此時少しく障碍起れりとか、そは宮中に於てたま〳〵禮法上に關する疑義ありしなり　皇帝陛下には侍從長德大寺侯爵及土方宮内大臣より二回まで奏請し奉りしも、歐風に傚ひて　皇后陛下と御連立たれ御苑中を御歩行の儀は御認許相成らず、遂に大元帥の小禮服を召させられ、御馬にて階段の處に出御あらせられしは皆々御待ち申してより約一時間の後なりき　陛下は先づ階段を御登りありて　皇后陛下之に次がせられ、後上記の公使及其夫人等を召し賜ひしが、代理公使には何の御沙汰もなかりしかば、葡萄牙代理公使ルレロ夫人の如きは痛く氣嫌を損し、新年の拜賀にも參内せざるべしと公言せり。

使臣等御引見の後（此御引見に於ても　皇帝陛下は皇后陛下に先たれたり）　皇帝陛下は御假屋にて茶を賜はりしが、此間　兩陛下には參候せる人々の中さるべき者には拜謁仰せ付けられたり。偖人々は喜びて食卓に密集せしが、時は十一月なりしも溫暖なれば外套をも要せず屋外に居るを得、鬱蒼たる老樹は綠の柔かき芝生に蔭をなげ、且は此御宴の場の垣ともなりて誠に見事なりき。

夕日の光を浴みて、此優美なる御苑より還御の時、君が代の樂は奏せられ、又盛裝せる貴婦人（洋裝せるは遺憾なれど）の扈從せる樣眞に美麗の觀を極めたり。

翌日には此御宴に就きての面白からざる反響ありて、一は不滿足なる外交官の方面より、他は宮廷の側より出でしものなるが、何れも正しき批評ならず、唯此後の改良を希ふ可きなり。

菊花は勿論御苑のみに限られたるにあらず、諸所にも之れありて、上野公園の近傍には意匠を凝

して種々の形に作成せる菊花を見るを得べし。

公使館參事官デルンブルヒ男爵

其秋公使館參事官デルン、ブルヒ男爵は歐羅巴より歸られ、爲めに公使館は人員を增加したり。男爵の令妹は當時未婚なりしが、愛嬌多き人にして兄の公使館に勤務中は永く苦樂を分たんとて東京へ來りたり。

ホルレーベン氏は長き賜暇を得て歐洲へ歸らんとの望みありたり。

伯林なる皇太子妃殿下の宮中にて寵愛されたるデルンブルヒ男爵令孃は、其到着の週間余が家に逗留せしが孃は、皇太子殿下の御不例なる御容態に關して悲むべき消息を傳へ人々皆憂慮に沈めり。

天性怜悧にして愛嬌多く且爽快なる男爵令孃は、東京に於ける獨逸其他歐洲人の交際社會中の珍客にして、僅か一個年の滯在にて交際を結べる人々の同情をば總て其一身に集めたり。前公使オットー、デーンホッフ伯の夫人ミラ、デーンホッフ伯爵夫人は衆人の愛敬を得たる貴女なりしが、同夫人の故國に歸れる以來、獨逸公使館には一人の貴婦人あらざりしかば、今や令孃は其責め一層重きを感じ、巧妙なる手腕を以て其兄の爲め面目を起したり。

孃の到着によりて、種々なる宴會催せられたり。先づ紅葉館に於て女子に歌舞せしめ、次にホルレーベン氏の午餐會あり、或は車馬にて附近を散策し、或は帝室狩獵場なる植物園に遊び、又日本內閣顧問モッセ氏方、或は大臣青木氏方、及全等の家に於て日本人及歐洲人の知己を集めて屢愉快なる會合を催し、時としては音樂を奏し又は新たに得たる日本美術品の品評を試み種々なる樂みありたり。

されど獨逸皇太子殿下の御不例の危急なる報告は頻々として獨逸人の間に傳はりて一同皆憂悶に堪えざりしが、遂には外務の公電によりて悲しき事實は確められたりき。

新嘗祭

例年十一月二十三日を以て米穀收獲及供御の祭典執行せらる。此大祭は日本古代より敬神の意を含める宮中の御大祭にして、皇帝は世々國氏の祭事を御一人にて行はせ給ふなり。

其祭典は神殿中に行はれ、皇室の宗教卽ち神道により祖先祭祀の典にして、神殿は皇居に接近せる園中に建てられ、周圍に塀を廻らせり外國人は之に預ることを得ざれども、今此事を記し得る所以は、これ二三の人に陪觀を許さるゝを以て幸に宮中に奉仕せる身の此特榮を得たるが故なり。

斯の如き祭典中尤も重大なるは十一月廿三日に行はるゝ大祭なり。元來米穀は日本人の食料中その主なるものなるが故、往時より此米穀收獲の大祭に重きを置かるゝの意を知る可きなり。

抑此祭典は二段に行はれ、第一回は午後六時頃に初まりて夜の十時に終り第二回は夜半に始まりて翌朝二時に終るを例とす。

皇帝陛下には古風なる白絹の御祭服を召させられ、祭儀を掌る宮内官卽ち掌典長及掌典御側に(こは日本の帝室政府の記錄に載せたる官名)扈從し奉り、掌典長も亦白絹の祭服を着し、最高の御方とは其冠を異にせり。　皇帝陛下は太古以來の神器卽ち聖鏡、寶劒及國璽(聖玉)を奉じ、嚴肅なる行列を作りて宮室の長き廻廊を通御遊ばされ、廻廊には尺許の高さなる燭臺を列ねて御道筋を照らし、又それより特に設けられたる渡り廊下を通御ありて神殿に玉歩を進め給ふ。而して渡り廊下には一面に柔かなる菅薦を敷けり。　皇帝陛下の祭儀官を從へて神殿に著御あらせらるゝや御簾は上げらる。此時皇族各殿下各國務大臣、將官及親任官竝に祭儀官は幾世を經たる御園の老樹の下に設けたる假床に參列す。其服裝は大禮服なること勿論なれども然も當世の禮服を著けたり。

神殿の周圍なる芝生は薄暗き篝火に照されたるが、伶人は此處に古風にして彩色燦然たる色彩の服裝を著けて奏樂し、其曲或は隱に長く或は清く鋭く或は鈍く濁れり。玆に於て神事を掌る女官美麗なる絹の袿に鮮かなる緋の袴の出立にて白木の三方に供物を載せ米を茅として神殿に捧ぐ神殿內部の御模樣は吾等風俗の窺ひ知る處にあらざるなり。

月の光に峙てる薄暗き神殿の棟は屋後の芝生に其蔭を投げ、夜風に搖られ閃く燈火は雪の如き白衣を着して石の如く蹲りかしこむ舍人等に代る〴〵守られ(十分毎に交代す)樂師殿掌きらびやかなる服裝を着して嚴かに居竝びたる樣人をして幽玄神祕の感にうたれしむ。是に於て思はずも曾て某處に目擊したる屏風の古畫を聯想し來り始めて心に會得したりき。

偖參列せる人々は皆幕の少しく上げらるゝまで假床に並び立てども、神前の幕の開くや一人宛進み出でゝ最敬禮を神前に行ふ。

時は十一月下旬の夜、帽子を被らず外套を著せず禮服のみにて屋外の寒風の中に立つ事なれば處々に火鉢を備へ置きて暖を取るの便に供せり。

斯く十時の頃ともなれば　陛下は多くの臣僚を具して宮中へ還御し給ひ、金屏風を立て繞らしたる御座の間に端座し給ふ。見上げまつれば御服裝は白妙の雪の如く御側に侍る者も皆眞白なる出立ちなれば、金色の屏風と照し合ひつゝ其氣高きこと言はん方なし。此時他室にて日本風なる小食を參列の人々に賜ふ。余は御祭典の第一段を拜觀して最早充分に感じたれば、夜半に行はるゝ第二段は拜觀せずして辭し歸りしが、次の朝列席者より聞く處によれば全然第一段と異なることなしと。

斯の如き祭儀典式は總て祝日大祭日若しくは皇室に御事ありし日或は國家の大事に當りて常に執行せらるゝ御定めなるが多くは早朝に於てするなり。

皇室御先祖の御誕生日及御忌日等數多けれど必ず　陛下親しく御禮拜遊ばさる。往時京都の朝廷にては殆んど日々の如く祭祀せられ、爲めに政治に御暇なく將軍に御委托あらせられたることと今より推するに難からざるなり。

偖又當時東京に於て行はれたる普通の祭典は三島警視總監の催にかゝり、是れ又見るべきものにして、余はシュタイン博士と共に參觀せる事あり。群集せる賓客は無慮數百名にして　皇帝陛下にも亦御臨御遊ばされ野試合の餘興を御覽ぜられたり。

此野試合は初め小人數にて劍闘せしが、漸々人數を增加し來りて遂には四百の夥多なる武士（サムライ）入り亂れて激戰し、敵の將旗を奪ひ合ふ樣實に是れ壯烈を極めし一幅の戰爭畫にして、是によりて劍道に熟達する者今尙ほ夥多なるを知るに足るなり。偖て之に次ぎて相撲ありしが、體格非常に肥滿せる油を塗りし（譯者曰く身體に光澤ある故誤解せしならん）裸體の男勝負をなさんと歩み出でしが一種不快の觀を呈せり、猶此祭典の終りには盛大なる洋食晩餐會を催したり。

此祭典の後數日、第二回の鴨獵は岩倉公爵及山口主獵局長の指導により濱御殿の狩獵場にて催され、余は七羽の野鴨を得たり、第一回の時に對して意外なる大進歩なり。

又此頃の事なりしが余等は東京の小林絹織工場を訪ひしが、手織機械によりて巧に華美なる絹地を織り出すは誠に感ず可く、殊に又　皇帝陛下の御料たる白色絹地を織るをも見たり。

陛下には此御下着を一週間毎に更められ、年末に至りて御垢付きは宮中の者に御下賜相成るとか承る。

毎年冬期の始めに至れば鹿鳴館（官有の建物）に於て舞踏練習會の催ありて、貴族の婦人令孃方は茲に歐洲の交際ぶりを學ばんと來會する者甚だ多く、余等亦往々參會せしことありて屢日本の知人にも逢ひしが概して歐洲人に取りては退屈なる會合なりき。

冬期は交際最も盛なる時にして、或は外交官の招待或は大臣よりの晩餐會等暇なきを常とするに、たま〳〵外國の軍艦ウオルフと稱せる砲艦の横濱港に到着せるあり又露國よりは　皇后陛下へカザリーン勳章を捧呈せるありて、何れも外交上の宴會を催さる可き事柄なりとす。殊に勳章を捧呈せるときは露國公使シエウイチ氏に謁見を仰せ出され、宮中にて歐洲風なる御鄭重の御饗應ありき。斯くの如き有樣なれば宮中にては御下問の事多く、又外交社會にて協議すべきこと多ければ此間に立ちて彼是の衝突を避け諸事に十分なる解決を與へんこと容易の業にあらざりしなり。

侍從武官

十一月三日の天長節に既に提起せられし侍從武官創設の問題は時勢の變遷につれて　皇帝陛下にも要用なることを思し召し立てられしを以て、輦轂の下に於ける軍人社會の大なる問題とはなり

たり。

當時の陸軍次官は桂將軍にして氏は普魯亞に教育を受けしを以て頗る流暢に獨逸語を話す人なるが、恰も此問題に參與して侍從武官任命のためには一方ならず盡力したり。されど此事件は軍人はは皇帝陛下にしか近侍するものならずとの舊來の因習による見解の爲め、遂に成功を見ること能はずして其結局は宮中普通兵役を終りて豫備の軍籍に在る者をして軍服を著し　陛下に扈從せしめ、軍事に關する場合には公然此者を出す事となり常任侍從武官の任命は依然之れ無き事となりたり。

皇帝陛下には無數の老熟なる掌典を有せらるゝと雖も、只一人の侍從武官を御身邊に召させられざる此一事は日本帝室の特殊なる性質を顯はせるを見るに足るなり。

小松宮殿下及同妃殿下

小松宮殿下及同妃殿下は永く歐洲に御滯在遊ばされ、此年十二月中旬を以て歸朝せられしが、同殿下が歐洲諸國の諸朝廷を訪問せられしは一層宴會の繁昌を來しぬ。

小松宮殿下は元來他の皇族方と同じく宗教上に御關係遊ばさるべく、御教育申しゝかども御自身は之を好み給はず、現今は陸軍の官職にあり。然も尙ほ春秋に富ませられ、品格高尙なる方にして、妃殿下の御風采は派手やかにして極めて歐羅巴的の御人格なれば、歐洲の文物制度は兩殿下により愈々皇室中に勢力を增加するに至れり。兩殿下の御側には三宮男爵夫妻ありて、氏は現今式部長たり。其夫人は英國人にして夫妻共に怜悧發明なる方々なれば、歸朝後は宮中に重きを置かるゝに至れり。男爵三宮夫人は名譽を好める人なれども、親切にして愛嬌あり、又三宮氏は元來僧侶なりしも伯林なる日本公使館の書記官として長く在勤せしを以て、頗る獨逸の事情に精通し智巧と世故とに長したる人なり。

余等は耶蘇降誕祭及歲末祭等にはかねて手馴れの獨逸風に耶蘇木を飾り、親近の同胞の外日本の友人をも招きて耶蘇木の光りきらめく周圍に獨逸の小兒等が喜ばしく遊び戲る有樣を示すの機を得たり。斯くの如き事柄は日本人の極めて喜ぶ處にして從來より又是に似たる受授贈與の風習あるなり。

新年宴會

新年には宮中にて新年の拜賀式あり　皇帝陛下には早朝神殿に出御あらせられ、午前九時半祭儀官より祝賀を聞え上げ、次いで皇族方の祝賀あり、余等は亦順次列をなして參內し貴婦人等も亦早朝より禮裝して共に祝賀を申し上げ、それより國務大臣は拜謁を仰付けられ祝賀を言上す此際余

等は唯室外にありて戸隙より望見せるのみ。

余は此拜賀式が何故に斯くも早朝に行はるゝやとの問を發せしに、或人は之に答へて京都に於ては朝日の昇ると共に朝賀の御式を初められしものにして、今日の如く外國使臣等が午後二時頃に引見せらるゝなど西京の舊風に對しては素より許す可らざることなりしならんと、偖余は外國使臣の拜謁の列に加はりては他の宮臣の如く謁見室に入るを得ざるの定めなれば、そは適當の事にあらずと思ひ、他の宮臣と共に謁見の間に入らるゝやう願ひしに、新任土方宮内大臣は秘書官をして書面にて謝絶し來れり。玆に於て余は外交官拜謁の中に加はる事を斷念せり。

獨逸公使ホルレーベン氏が宮内大臣と對話中偶々此事に及びしに土方大臣は世評と我が意見とはまゝ異なることありと言ひたり。然るに此後宮廷にては大に優遇の傾きとなりしが、かゝる互の意見の衝突は根本より異なる習慣にありては屢々湧起する問題なるが、互に感情を害することなく和解し得たるは幸と謂ふべし。

フチン、ホルレーベン氏の出發

ホルレーベン氏は歐洲への出發を確定し多數の知己友人に見送られて一月七日日本を去れり。余等は送りて横濱に至り其夕獨逸總領事ツァッペ氏の家に立寄りしが、氏は性快活にして然も職務に敏なる人なり。夫人も亦頗る愛嬌に富み有望なる人々なりしに、悲むべし總領事は病にかゝりて翌年三月遂に不歸の客となりたり。

又獨逸皇太子殿下の御不例に關する悲報はサン、レモより傳來せしかば、海外幾千里の極東にある余等獨逸人の悲み如何、よし醫師は同殿下の御生命未だ年ありとは言へど到底不治の御病なることは余等の悲みに堪へざる處なり。

其他歐洲よりの報告に條約改正に關しての日本政府の盡瘁は其効甚だ少きが如く、其結果良好ならずと、又アレキサンダー、フヲン、シーボルト氏は其贈れる書中に曰く、歐洲に於ては皆自己の事にのみ忙はしくて遲延に遲延を重ねたる日本の條約改正につきては時期と利益とを尊重せずと。

一月は天氣甚だ快晴なりしが而も夜間の寒氣甚だしく、爲めに余が妻は感冒に罹りしを以て、余等は箱根宮の下に數日を暮さむとて一月二十日同地に赴きしに、其晴朗なる天候溫暖なる空氣爽快なる鑛泉は實に余等を喜ばしめたり。當時歐人中には耶蘇降誕祭より新年に亘りて宮の下に旅行するの風習行はれしが、是れ此山上に在りては此酷寒の時節に晴朗溫暖なる日光に浴するを得べく、實に日本の氣候の美なることこれを以て如る可きなり。余等は天氣快晴なる日に乘じて山を越えて箱根湖に遊びしが、寺院は恰も畫中のものの如く、階段の石苔蒸して神秘の並木年老いたり。富士は白雪を頂きて湖を圍む衆山に秀で崇高幽靜景色絶妙なり。玆に於て余等は來る暑中休暇は此箱根

に過さんとて湖水に近き山村に日本風の家屋を借り入れむと決したるが、幸にして余等に適せる一戸の家を求め得たり。是より更に進み險を過ぎ峻を越え遂に日金山に達したるが、此山は眺望絶佳にして所謂十州を望むを得べし。此行余が妻は山を越ゆるに駕籠に乘りしが余は歐洲人の體軀巨大なるを以て急屈なる籠に乘るを厭ひ徒歩にて遂に跋渉し得たり。

山路は是より三千尺を降下し繪の如く海岸に横はるは是れ熱海の浴場にして、其溫泉は巖石の間より驀然として熱湯を噴出し、天然の溫泉なるが、將來名ある浴場たらんか、熱海に對して大島あり、其眺望極めて妙、海岸奇にして巖石に富み、山岳高くして嶮峻を極め、光景一として佳ならざるなし。溫暖なる南方の氣候はリビエーラの（譯者曰く伊太利國有名の河岸なり）如き感を與へ、若し之に加ふるに所謂歐洲風のホテル樋口が今少しく適當なりせば極めて愉快に休養するを得しならむ。

余等は東京より旅行券を所持せずして旅行せしにより（此時まで斯の如き證書の所持を問はれたることなかりしが）熱海の警察署より取調を受け事頗る煩雜に亘り、遂に宮内省に電報を發し余等が身元の證明を請ひたり。

斯くて此出來事も漸く無事に通過し得て後熱海を發し、海岸に沿ひ蒼海を望み富士山を仰ぎ愉快なる道を辿りて小田原に至り、横濱を經て東京の家に歸れり。然るに氣候俄かに寒冷となり、妻は再び感冒に罹れり。加之墺地利なる甥の永眠せる悲報は鄕里より傳はれるを以て小松宮殿下の舞踏會の如き或は暹羅使節の招待の如き皆之に列するを得ざりき。されど余等此時に於て新に來りし英國人甲比丹（カピテン）イングレス及辯護士ピゴット氏と相識るを得たり。イングレス氏は海軍を改革の爲めピゴット氏は總理大臣の法律顧問として招聘せられたるなり。

二月に入り數多の招待は潮流の如く打ち續き日本政府に雇はれたる英國法學者キルクウード氏夫妻より或は獨逸公使館に於てデルンブルヒ男爵より或は露國公使夫妻或は友人長崎氏より來りたり。長崎氏は宮内官吏を招き土方宮内大臣を始めとし　陛下の御近臣主馬頭藤波子萬里小路伯等來會したり。

又日本人の余が招待に應ぜられしもの毎週其數少からざりき。滋賀縣知事中井氏及其夫人は東上して余を訪問せられしが、余は此時中井氏が獨逸葡萄酒の嗜好家たることを知れり。其他宮中女官宮内官花房、高崎、三宮、鍋島、桂將軍等皆余等の喜びをなしぬ。

伯林駐劄日本公使品川子爵の召還により一世ヰルヘルム皇帝は　日本皇帝陛下に復書を送られ、公使デルンブルヒ男は獨逸を代表して此復書を捧呈すべき命を受けたり。然るに吾人の聞く所によれば其内謁見は宮中より謝絶されしと、余は其後此件に就き青木次官（外務大臣は此時大隈氏となれり）に質問せしに、同次官は佛國代理公使ブールガレル氏よりも新選大統領サデイカルノー

氏の就任に關し國書を捧呈せむ爲內謁見を請求せりとの事なりしが、共に　皇帝陛下に請求せるを以て却下せられたり。（されど實際は外務省の意向に後へるなり）是れ代理公使は外務省にては之を認むれども、　皇帝陛下は御信任なき故にして理論上亦然あるべきものなればなり。されど之によりて獨佛の文書は自國政府の指揮到着の日まで遂に公使館に留め置かるゝに至りたり。

日本皇帝陛下の御不例

かしこくも神武天皇は耶蘇紀元一千五百年の昔二月十一日を以て始めて日本帝國皇帝の御位に就き給ひしかば、此日は芽出度紀念日なるに千八百八十八年（明治二十一年）の同日は　皇帝陛下の咽喉煩衝に罹らせ給ふによりて、總ての御儀式も之無かりき。されば外國使臣及內閣大臣等には賜宴の御設けなく、唯高等官のみに賜饌ありたり。午後には華族女學校及東京高等工業學校に祝賀會の催しありて、皇太子明宮殿下の御臨場ありて殿下には供奉員及　皇帝陛下の御代理を從へさせられ一段高き御席に着かせられたり。

皇帝陛下の御不例は日を經るもよろしからず、轉地御療養を醫師より言上するに至れり。さるに熱海は海岸にありて其溫泉に浴するは極めて良好なる事ならんとのことにして、長崎氏は命を奉じて行在所取調の爲め熱海へ赴けり。

時に　皇后陛下にも亦御不快に渡らせられしが、こは赤阪御所の風荒くして而も御殿を溫め難きに因るものならんと申し合ひけり。新宮の建築工事も大に進行せしが、尙ほ宮中の御移轉は之れなく依然舊來の如くにて且は　兩陛下とも熱海には行幸仰出されざりき。されど　兩陛下の御容體は時候の溫暖と共にます〳〵良好に赴かせられぬ。

冬期東京に於ては晝間は日光の爲め氷塊も融解すれど、夜間は極めて寒冷にして西洋風の家屋に於ては煖爐を以て之を暖め、日本風の家にては數多の火鉢を備へ置くも尙ほ充分寒さを防ぎ得ざる程なり。

獨亞協會の獨逸人は一千八百八十八年二月の下旬より同三月廿三日に催すべき獨逸皇帝の誕生日の祝賀會の準備に忙しかりしが、此祝賀會は當時に於ても一般に人の知る所なりしなり。獨逸皇太子殿下の御病狀ます〳〵不良なりとの悲報により、　日本皇帝陛下はヰルヘルム一世皇帝陛下に對して御慰問狀を發せられしが、その三月一日附御返電には「皇太子現今の病狀は先づ變りしことも なく、只管其快復して治世萬歲ならんを祈る」と此電報の交換は余の勸めによりて官報を以て公表されたり。

ヰルヘルム一世皇帝陛下の崩御

此頃バーデンの王子ルードヰヒ、ヰルヘルム殿下が前途有望なる御身を以て薨去せられしは人の知る所なるが、御年高きヰルヘルム皇帝陛下は御親戚の王家に此大不幸の起れる爲め、御病急に革まりて遂に一千八百八十八年（明治二十一年）三月九日に崩御せらる。

日本　皇帝皇后兩陛下にも世人と共に痛く御悲みあり、日本在住の獨逸人又言ふまでもなかりしが、此報を第一に傳へたるは紐育ヘラルドにして、其後公然伯林駐劄日本公使西園寺侯より電報あり、又獨逸公使館へも報告ありたり。

此訃音は直に朝廷に捧呈せられしに、宮中には非常なる御同情を寄せられて　皇帝陛下よりはフリードリヒ皇帝陛下へ、　皇后陛下よりは皇后アウグスト陛下へ、各宮殿下よりは宮內大臣ベルボンヒエル伯へ宛てゝそれ〴〵弔電を發せられ、各國務大臣、同夫人、外交官其他一般の人は公使館を訪問せり宮中に於ては三週間の喪を仰出され總ての祝賀は廢せらる、又工科大學の講堂には公使官の發起にて大弔祭會催されたり。

フリードリヒ三世卽位の電報はアウグスト皇后陛下よりは日本國　皇后陛下へ發せられし鄭重なる御返電と殆んど同時に到着せり。アウグスト皇后陛下は其電文中に於て、皇后陛下の鄭重なる御同情に對して深厚なる感謝を述べられき。工科大學に於ける弔祭會は一千八百八十八年（明治二十一年）三月十七日嚴肅に擧行せられぬ。高く美麗なる廣間は黑色の布を以て蔽はれ綠の木を飾りて弔祭場となし、照すに電燈を以てし、其一方には高き祭壇を設けて其前に御柩形を横造せり。余等の相識にて伊太利人キョソネ氏は品性高尙なる人にして殊に意匠に富めるが、其考案によりて御柩には王冠及紋章を飾り、又日本古代の火燭臺等をも借り入れ之に燈明を點したり又横濱在留の獨逸園藝家ベーメルより寄贈せる頗る華麗なる花冠は黑天鵝絨を以て蔽はれたる御柩を飾れり、此時吾人の感情は實に言ふ可らざるものありたり。

日本皇帝及皇后兩陛下に此弔悼會に御臨席を誘ひ奉りしも、御不快中の御事とて止むを得ず御名代として有栖川大宮殿下及小松宮殿下御臨場相成りたり。其他各宮殿下、廷臣、內閣員、外國使臣等無數の參會あり、男子は大禮服を着して御柩の右側に、婦人は喪服を着して其左側に著席し獨逸人は又其後列に他の外國人は又其背後に列坐せり。

獨逸使臣デルブルヒ男爵及其令妹は參會者を接待し、余は普魯亞皇室侍從の服裝を以て之を會場に案內し、日本式部職の人々も余に親切なる助力を與へて手厚き接伴を爲すを得たり。獨逸の奏樂者は恰も教會堂に似たる此大廣間の高閣より悲しく靜なる樂を奏し、僧侶交禱式（譯書曰く僧先づ唱え公衆之に和し交々祈禱するなり）によれる祈禱及スピンネル牧師の說教は感極まり情熱したり。ヒョーピンの送葬曲其他之に類する樂曲は獨逸人の篤志者によりて奏せられ、此弔祭は實に獨逸人の赤心を捧げて施行せる處にして、日本人及外國人も亦中心より同情を表し充分靜肅に行はれた

り。

長年月の大困難及悲慘なる戰爭を經て獨逸國民に其自信及威嚴を得せしめたる、老帝の崩御は海外萬里の在留民をして故國の同胞と其悲痛を共にせしめたり。否外國に居住する獨逸人は一世皇帝陛下及之を輔けて國家の基礎を完成せる勳臣に對して其感謝の意を表すること一層深遠なるべし。獨逸往時の困乏及獨逸人に對する外國の蔑視に實際遭遇し、若しくは父祖の物語によりて之を知る者は深くホーヘンツオルレルン家の恩惠を感じ、光榮ある王冠の下に獨逸を統一せる德澤を感謝すべし。今日の少年は斯の如き艱難を經て成就せる効果を恰も當然のことなりと思惟するものあれども、是れ大なる誤りにして、能く其誤りたるを諭すものあるは是れ國家の爲めに多とすべきなり。

三月十六日ヒヤルロツテンブルヒより發せるフリードリヒ皇帝の返電は翌日卽ち、弔祭會の擧行と同日を以て　皇帝陛下の御手許に到着せり。フリードリヒ皇帝は　日本皇帝陛下の御同情を感謝し其終に「朕は陛下及陛下の皇室竝に國家の飽まで神護せられん事を祈る」との言を以て結べり。

此電報により獨逸皇帝陛下はシヤルロツテンブルヒに御滯在のことゝ察知するを得たり。

千八百八十八年（明治二十一年）三月二十日皇室御祖先の御祭禮卽ち春季皇靈祭の執行さるゝに當り、宮中の喪（獨逸皇帝の爲めに仰せ出されしもの）は解除せられたり。此服喪解除の可否に付きては宮內省中種々議論ありしが、獨逸國に於て既に其先例あるを以て遂に解除のことに一決せり。

東京に近き目黑の祐天寺は德川將軍家よりの朱領地もありて、管理も頗る行届ける寺院なるが、此寺に珍らしき壁張りを藏する由を聞き、土方宮內大臣及鍋島侯は余を引連れその檢分の爲め遠乘りを試みしが、こは新宮の壁張に轉用し得んかとの腹案ありしためなり。

偖余等は此寺院の頗る能く保存せられ且多くの珍奇なる寶物を藏するを見しが、中にも最も珍らしきは大なるアラス絨氈にして（譯者曰アラスは絨氈に有名なる佛國の都邑の名）誤りてゴベリン氈と稱せられ、トローヤの占領及ヴイルギル、ヱネイーデ戲曲の光景の模樣ある物なり、吾人は實に奇異の思ひをなし其由緒を問ひしに、こは十七世紀の頃和蘭人が將軍へ贈呈せしものにして、爾來此寺に珍藏せるものなり。此品は日本間に用ひられしため甚だ異樣に思はれたれども、歐洲風に建設せられたる宮殿に轉用せば誠に格合なるものなるべし。

機業家小林氏は其道の識者なれば、此處に招かれて共に其鑑定を爲せしが、これより同行者は某割烹者に立寄り、酒食を命じ美しき婦人の其杯盤の間に周旋するを見たり。

メツケル少佐の出發

此頃メツケル少佐は獨逸へ向け歸國の途に上りしが、こは同氏昇級の爲めにして　天皇陛下には認許を賜ひしが、此卓拔なる將校を解雇するに當りても、信認狀（譯者曰く其勤務に從事したる

ことを言明したる書類）を與へざるは日本の特色にして、現にメツケル氏の如きも其請願により始めて與へられたる程にて、日本政府に聘用せられし者は概ね皆斯の如し。

メツケル少佐はフリードリヒ、レオポルド殿下の副官ニキツシュ、ローゼネツグが近頃受領せる勳章と同等の勳章を下附あらんことを請ひしが、容易に許可せられず、其出發前漸く之を受領するを得たり。少佐はよく其任務を盡したるを以て、歸國の際は日本に極東最優の軍事上の基礎を作り得たりとの自信を以て出發するを得たり。

總領事ツアツペ氏の死去

總領事ツアツペ博士は心臟病を以て病床に呻吟せしが、遂に千八百八十八年（明治二十一年）三月二十六日を以て永眠せり。氏は條約改正の中絶するや其苦腦一方ならざりしが、これより先氏は長日月間之が爲めに苦心經營し、公使の交代に際しても個々の事務に關する豐富なる意見を有し、自身專ら、其責に任じたり。又氏の就職以來獨逸人の勢力は增大し横濱に於て頗る重要なる地位を占むるに至れり。

ツアツペ氏及其令室の稀有なる愉快の性格は公使館と領事館との間に溫き關係を結ぶに與りて大に力あり、氏の發病の因ともいふべきは餘りに焦慮に過ぎたるが爲めにして、殊に横濱なる官廳との間に蟠まれる錯雜の障碍及餘り長く日本に滯在せる等は病をして益々重からしむるの原因なりき。

氏は曾て公使の不在中其代理を命ぜられしが、今は公使館に書記官を置く必要認められ（こは氏の大に喜びし處）書記官は公使の事務を取扱ひて氏の任は前年に比して大に輕減せしも、氏の神經過敏に陷りし病狀を回復すること能はざりき。

常設公使館書記官の任命は日本政府も亦希望せし處にして其主とする所は領事は裁判權をも有し、日本政府に取りては少しく煙たく感ずる處にして、此領事の職權を抑壓し威力を減ずるはかねて其希望せし所なればなり。ツアツペ總領事の埋葬は三月廿八日執行せられ、一般に大なる同情を得、英米の軍艦よりは軍隊を上陸せしめて之を弔ひ、又日本軍隊に於ても弔禮あり、伊藤青木の兩大臣、外國公使領事館員等葬送の列に參加し獨逸夫人等はツアツペ夫人を其家に慰問せり。

此葬式は降雨盆を覆すが如き日に於て極めて嚴肅に擧行せられしが、悲むべし吾が友人ヤスムンド氏は同日狂氣の兆を顯はせり。ヤスムンド氏は尙春秋に富み才能卓拔なる人なりしが、爾來病勢加はり屢々自身に危險を加ふる惧（自殺を謀ること）ありしを以て、獨逸海軍病院へ收容して之を監視する必要起れり。

氏は軍醫クレフエル博士の注意周到なる治療を受けしため、幾分か病勢を輕減し、爲めに數週後には單獨亞米利加を經て獨逸に歸國するを得たるが、これより前日本政府との傭聘契約は解除せら

れ、之に就きて其必要ありとの疑義を惹起せり。何となれば契約中には三個月間の疾病は俸給を與ふるの條ありて、而も其三個月の時は未だ經過せざりしを以てなり。そは兎も角彼の友人なるミュラ、ベーラ及ツアンデル兩氏は副領事シエリンゲ氏と共に彼の後事を整理し、余等は親愛なる友人の出發を名殘惜しく送りしが、彼は歸國後間もなく瘋癲病院に收容せられしかば遂に再會の機なきに至れり。

異邦の職務に從事せる氏の未來には頗る有望なる効果の期して待つべきものありしに、惜むべし此壯年の盛なる能力は彼と共に永く消失し去りたり。

獨墺同盟の公布及議會に於けるビスマルクの演說は當時の雜誌により殆んど二個月の後日本に傳へられ、又ザクセンワイマールの王子ベルンハルド殿下（ウエーテンベルヒのヘルマン親王及アウグスタ妃殿下の間に設けられし）及隨行のフックス、ノルドホッフ男爵（同男爵は故國より余等に面會の機あることを郵報し來りたり）との來遊も亦之と同時に豫報せられたり。

ワイマールの王子ベルンハルト殿下の御資格に就ては日本宮廷は不知案内のことなれば伊藤伯は自ら之を說明したるが、今斯く同等の權利を享有する來賓待遇方の爲め日本人は大に其心を痛めしが、獨逸公使の非常なる運動により詮方なく王室に準する待遇をなさんことを決定せり。

ベルンハルト殿下の外トスカナ大公爵の長子レオポルド、フヘルデイナントサルバトールフホンエステルライヒ大公爵來遊の通知は更に宮內省官吏をして歷史上及外交上より其待遇を研究せしむるを要し、其他兼てより噂ありしバルデイ伯の來遊も愈々近づきたれば、其資格の決定亦甚だ必要なれど、日本政府には全く不分明なり。伯はブルボン家の王位を去りし人にして、墺地利の代理公使を通して其來遊を報じたり。伯は又博學なる蒐集家にして自己の所有に係る快走船に乘じて日本を訪へり。

櫻花爛熳たる時候は再び廻り來て上野公園或は隅田の流に沿へる向島へ車馬を馳驅らんとの望み起る時節となりしが、櫻の並木は淡江の花の色に輝き誠に得易からざる美觀なり。

觀櫻御會

此季節に至れば宮中にては每年延陵館の御園に觀櫻會を催せられ、其御招待を蒙りたる人々は午後櫻樹の下に集り三時頃未だ御快復に赴かせられざる　皇帝陛下の御名代として　皇后陛下出御遊ばされたり。其御服裝は派手やかなる櫻色の洋服を召させられ供奉の貴婦人は數知れず皆晴衣を著けたり。

皇后陛下には先づ外交官を御引見あり、佛國代理公使ブールガレは海軍大將及其士官を獨逸代理公使はフックスノルドホッフ氏を御紹介申上げ是より國務大臣に謁見を賜はりしが、各宮殿下及妃

殿下等隨從せられ又人々輻輳して互に押し合ふ爲め、陛下の御道路を防げさる樣注意するは決して容易の業にあらざるなり。

同日外國使臣の參列せるものは其數多からざりしが、是れ外國令孃紳士の多くは京都方面へ旅行を爲しし爲めにして、葡萄牙國公使の參會せざりしは前觀菊會の節　皇帝陛下が謁見を賜はらざりしを含める故なり。

參觀者一同は食堂に案內せられ、皇族方にも御臨席あらせられしが、參觀者に御對話なく頗る淋しき感じありしが、歐洲風の服を着け又その風習に據る以上は、會場に斯の如き寂寞を感せしむるは願はしきことにあらねば、他日是等は改めらるゝの機あるべきなり。

爛熳たる櫻花は見渡す限り溫雅なる薔薇の如き色を呈し見る者をして恍惚として歸るを忘れしむ。此時既に五時を報じたれば吾人は名殘惜くも此美しき御苑を辭せり。

ウートルメー氏暴行に逢ふ

斯の如き樂しき御宴ありて其御宴に連れる日歐人間の融合を示せるにも拘らず、日本人の歐洲人に對する感情面白からざりし爲めか、此日佛國公使館附通譯官ウトルメーア氏（日本語に通じ頗る流暢に談話す）は道路に於て日本兵士より劔を以て斬附けられて爲めに負傷せり。此事件は世人の注目を惹かずして結着せしが、其事實なることは佛蘭西代理公使ブールガレル氏よりの口づから語る所なり。

此時伊藤伯とホルレーベン氏との間に締結せりといふ日獨攻守同盟の流說は亞米利加の新聞雜誌によりて喧傳せられ、各國外交官をして少からず注目せしめたり。

獨逸伯林參謀本部附キルデンブルツフ少佐が軍隊教育者として來朝せるは獨逸人に一層の力を添へたる如く思はれたり、由來高尙なる精神と學識ある普魯亞士官は誠に溫雅なる人格を有する者なればなり。少佐はフリードリヒ皇帝の御容態の啻ならず御生命頗る御危篤に渡らせらるゝ由を傳へたり。

五月一日には宮內省に於て宮中席次規則に關する會議開かれしが、余も之に參與すべしとて議長なる鍋島式部長より招かれしが、此會議に於て最も議論ありしは樞密院議長と內閣總理大臣との席次は何れを上とし何れを下とすべきかの問題なり。

日本古來よりの習慣によれば上席は樞密院議長の方上席なるものゝ如かりしが、余は總て感情を避くる方法として、菊花勳章を創定し之に特別の待遇を與へ、將來永く其上席たるを確定すべき事を伊藤伯に建言せり。

然るに此事件の討議中總理大臣の秘書官は既に宮內大臣の決裁を得たる布令を以て突然評議室に

入り來りしが、之によれば內閣總理大臣は樞密院議長の上席を占むべき事となれり。

鍋島式部長及高崎式部次長は止むを得ず其要求に應じて捺印し、此事件は忽ち茲に終局を告げたり。此事件は何故一時間も熱心に討議せられしに、唯終局せりの一言によりて中止するの奇態を演ぜしや、余は斯の如き進行には多少憤滿ならざるを得ず、午後馬車を驅りて伊藤伯を訪ひしに、伯は不在なりしを以て餘儀なく歸宅せしが、其歸途我馬車は石を積める荷車と衝突して車軸を折れり。是れ總理大臣の勢力に對する宮中顧問の勢力を諷刺せる良比喩と云ふ可きなり。

當時總理大臣の職に在りしは黑田氏にして、樞密院議長たりしは伊藤伯なりしことを余は特に附言し置くなり。

皇儲及皇室經費に關する皇室典範の起草は恰も此時に當りて內閣及宮中に於て開始せられ、獨逸皇室典範を東洋化せん爲めヘルマン、シュルツェ氏に諮詢し、その概要は英語に飜譯され又日本語に重譯せられたり。殊にバイエルンの王室典範は(普魯亞には該典範の公布されたるものなかりき)事情類似して最も應用に適當せり。されど日本政府の草案が法律上の効力を有する迄には尙頗る研究すべきものありたり。

此時新宮殿は落成し、橫濱なる一會社の手を經てハンブルヒより取寄せたる歐洲風の家財什器をも備付けたるを以て、余等は此宮殿と什器とを拜觀するを得しが、恰もワイマール王子の隨行員なるフツクス、ノルトホツフ男爵及デルンベルヒ孃も居合はせ、日本の技術は歐洲の家財什器をして顏色なからしめ、其趣味に乏しきを感せしむるまでに發達せりとの評は余等の皆首肯せざるを得ざる處なり。獨逸の工業は當時未だ今日の如く優秀なる意匠家及天賦の技能を有する技術家の指導の下にあらざりしを以て誠に悲しむべき狀態なりしなり。

日光旅行

此際余等日光への旅行準備整ひしが、同地の如き北方の山中に旅行せんには時候猶ほ少しく早きを覺えたり。

余等一行は午前六時の汽車を以て東京を出發し、宇都宮停車場に下車す。千八百八十八年には此處を以て汽車の終點とせり。是より馬車を賃し夕刻に至りて漸く旅行の目的地たる日光に到着するを得たり。

所謂日光街道は坦々たる道路數里に亘りて其路傍に見事なる杉の老樹並立し其途中の光景は變化甚だ多く、或は村落の閑雅なるあり、或は紅白の躑躅咲き出でたる雜木林ありて大に旅客を樂ましめたり。余等が徐々として登り行く海拔二千尺の高原上に嶄然として聳立せる日光諸山の遠望は實に言ふべからざる美觀なり。余等の到着せるは既に日沒の頃なりしが、春草花卉野徑を飾り、余等

が日本に於ける旅行中余等が胸中に最も美なる印象をなせるは實に此日光の旅行なりとす。又今日に於ては汽車によりて此街道を往復するを得べく歐風の旅館又數多きを以て最も避暑地に適せり。

然るに日光は既に狹隘を告ぐるの盛況を呈せるを以て、避暑客は此地より更に一千尺の高きに在る中禪寺を喜び撰ぶ者多く、毎年夏期至れば東京に於て職務に鞅掌する外交官は競ひて此山地に移り、或は鏡の如き湖中に小舟を浮べ或は畫の如き山麓に馬を馳せて日頃勤務の勞を忘れ以て身體の營養を謀る者多し。

日光には往昔より神社ありて神官亦茲に住せしが、耶蘇紀元後七百七十六年（寶龜三年）以來は又勝道上人の建立せる寺院ありしかども、名を世に知らるゝ程の地にもあらざりしが、一千六百十六年（元和二年）德川二代將軍秀忠が亡父家康の遺志に從ひて此地に其墳墓を建立せんと當時最も有名なる建築家及技術家を撰擇して之に命じ其工事の概況は之を記錄せる者あるを以て能く世人の知悉する所なり。

秀忠は本多上總介藤堂和泉守等歷々の人物を日光に差遣して家康が墳墓の地を撰擇し十分なる計畫を立てしめ、之を採用して千六百十六年（六和二年）寺院の建築工事を始めたり。工事は永く次年に亘り家康の埋葬は實に盛大なる儀式を以て執行せられ、京都の朝廷よりは位階を追贈せられ、又　天皇の御名代として御親筆の諡を賜はりしかば多くの僧徒讀經して其冥福を祈りたり。

寺院の設備全く完成し當代の住職死去せる後は皇室より王子を差遣さるゝ事となり、時の天皇第五の皇子守澄親王一千六百五十四年（承應三年）日光の法主に任ぜられたり。是れ關東東北地方に於ける管理長の職にして千八百六十八年卽ち明治維新までは親王之に任ぜられたり。最後に日光の法主たりし北白川宮殿にして、前代の親王と同じく多くは江戸に居住せられ、一千八百六十八年維新の戰爭に際しては一旦德川に與せられしが官軍に捕へられ、後京都の皇室より特に赦免せられ維新後陸軍の職に就き給ひ、伯林に留學せられて近衞龍騎兵隊に御入隊遊ばされ騎兵の訓練を受けさせられたり。

殿下は俄かに伯林より東京へ召し還せられ、薩摩藩島津家の息女を娶らせられて妃殿下となし給ひ、爾來陸軍の職に從事せられて日淸戰爭に際しては臺灣に司令長官となり給ひ遂に此蕃地にて薨去し給ひぬ。

殿下は御資性よく人を容れ給ひ、流暢に獨逸語を語らせ給ひしが、その御交誼を辱ふしたる人々はそゞろにありし昔を思ひ出でゝ感慨に咽びたり。

日光には家康の外三代將軍家光の廟所あり家光は一千六百五十七年（明曆三年）に薨去し、其墳墓は家康の墳墓に隣り高山の後景にありて幽邃なる谿谷を控へ老杉鬱々として茂り泉流潺湲として流れ、實に世界に於ける最も風致あり趣味ある靈場にして、之を見る者をして其印象を深からしむ

ること實に繪畫の如き者の比に非ず、深く神聖調和の淵に沈ましむ斯く人をして此超世界の感想を抱かしむるには實に絶妙なる園藝術を要するなり。

偖吾人橋を渡れば日光の全景を仰ぐを得べく、橋は大谷川と稱し碧玉を散らすが如き激流に架し恰も引き絞れる弓の如くに彎曲し、幾百年の古より鬱茂せる蒼樹中朱漆の橋欄色鮮かにして誠に名狀すべからざる眺望あり、此橋は御橋と稱し、往時は將軍に限り通行せる橋にしてその兩端には柵を設けて常に之を閉す、此橋は幾多冬夏の風雨を經て千六百三十八年（寛永十五年）新築せしより以來修繕を加へられず、今日に於ても歐洲人は勿論其他の參觀者と雖も此橋を渡るを得ず。通常渡るべき橋梁はその側にあり矗々たる老杉並び立てる石徑を行く時は多く避暑客に貸與せらるゝ寺院を通過して其外壁を傳へ遂ひ三佛堂に達する、此堂には其名の如く三體の佛像を安置す、即ち黄金の四十本の手を有する千手觀音、馬頭の形を爲せる、馬頭觀音及勝道上人の像にして皆有名なる彫刻家の手に成り金箔を飾り彩色を施せり。

含滿寺と稱する寺院の附近には四丈二尺の高き銅の圓柱ありて其中頃には水平に貫ける銅の圓柱あり、共に其色青銅色にして殆と黑色ともいふべく、又柱頭の下に金色なる四個の將軍家の定紋三葵を附して黑鋼に金色の輝ける有樣は調和甚だ宜し、柱頭には六個の葵の蕚を作り之より小鐘を垂る此紀念碑は一千六百四十三年（明正二十年）家康の墓邊に建立せられたるものにして、絶世の技術によりて完成し、殊に幾星霜を經たる綠樹の中に屹立するは實に奇觀なりと云ふべし。石材を以て作れる花壇に植付けられたるが如き老杉の並木の間を過ぐれば御影石の鳥居に達す、こは神道宗の神社の入口に建立せらるゝものと同一の構造にして二丈七尺の高さを有し、其直徑三尺六寸あり此鳥居は某大名の獻納せるものにして、自國に産せる石坑より切り出し一千六百十八年（元和四年）茲に輸送せるものなり。又これには百年來の後水尾天皇の御署名ありし木額掛り居りしが維新以來之を外したり、是れ嚴格なる神道宗の議によりて斯く鳥居に御染筆の神聖なる木額を掛くるは甚だ恐れ多しとなしたればなり。

鳥居の左側には壯麗なる五重の塔ありて其高さ百有四尺に達し、種々の色を以て彩色し、各色頗る調和を得たり塔下に彫刻せる子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、の十二支ありて其彩色能く自然にかなへり。鳥居の中は敷石の道にしてこれより階級段の上に立てる二王門に達す、此門には實に精妙を極めたる黄金の獅子、虎、一角、貘、麟、其他神話的の動物の彫刻あり、此等の動物は皆言語を發するを得、特に優れたる君主の出でたる時にのみ出顯すると口碑に傳へられたるものにして、此二王門の裝飾に用ひられたるなり。而して是等の動物の間には又芎藭、升等の植物をも加へ要するに此全體は日本に於ける彫木の模範なる傑作なり。

此壯麗なる門を過ぐれば朱塗の板塀に圍まれたる内庭に出で、こゝには所謂寶庫なるものありて

其建物は亦美麗なる諸色を雜へたる彫刻を以て飾らる、此門内の左側に一株の老樹ありこは九世紀（耶蘇紀元八百年代）の初めに當りて弘法大師が紀州より持ち來れりと傳へらるゝ者にして、又之に接して厩あり美麗なる白色の神馬を繫ぐ所にして、此馬は神馬なりと信ぜられ、參詣者の之に餌を與ふるもの多し。有名なる猿猴の彫刻は厩の屋根に在りて、此猿猴は東方亞細亞の三界卽ち印度、支那及日本三國の國柄を表示するものなりとか。

茲に亦人目を惹くは一個の御影石より、彫まれたる大なる手洗鉢にして之を覆ふ屋根は十二本の四角なる御影石の柱にて支へらる、是等は實に日本の古に於て鑽石匠の頗る發達せる一例として見るべきなり。山上の瀑布より遠くこゝに導ける水は三影石の此槽に注入し、その水量頗る多きを以て水槽より四方に溢れ、潺々として流出す此水槽は給水の裝置と共に（一千六百十八年）鍋島侯の創設せる處にして、當時德川家の家臣中に家康の靈前に供ふるが爲め種々なる裝飾物を獻進せり、前の寶庫は又經藏と稱し其内に藏する八角の自由に回轉すべき、朱塗漆器中には佛陀の經典を集め藏せるを見る、壯麗なる青銅門は内庭の中部に在りて古色蒼然たる青銅に金色なる德川家の定紋粲然として輝き頗る特種なる處ありて大に注目すべく日光中最も秀逸の觀あるものなり。

余等は徐々として數多の階級を昇り、可なりの高地に達せしが、而も尙歩を歩むる毎に階段又階段、門又門と過ぎ行くに何れの門も巧妙なる彫刻を以て飾られざるはなく、諸神の聖像守護神の神影目に入るもの皆奇ならざるなし。又限りなき青銅の燈籠は余等を送り余等を迎へて其數幾何なるを知らず、是等の燈籠は或は大名より、或は外國の君主より、例へば朝鮮、呂宋島、和蘭及葡萄牙等の諸國より獻じ來りしものなり。斯く燈籠の域を過ぐれば有名なる白塗の寺院に達す。此寺院は鬱蒼たる森林の中に立ち幽玄なる一種忘るべからざる印象を吾人の腦裏に刻せり。

人間の想像を摘發すべき巧妙なる彫刻、趣味、豐富にして深遠なる印象を與ふる彩色の調和、卓絕なる全體の結構一として吾人の驚嘆を喚起せざるものなし。

王彩燦然たる著色の木材を以て技術を盡せる斯の如き寺院は世界何處に至るも之を見ること能はざるべし。若し日本にて製出せられたる美麗なる著色寫眞の無かりせば、日光の實景を想像せんことは到底これ不可能なるべし。戸、天井、廻廊の窓等にある小技術品、畫像、繪畫漆細工等の夥しき實に眼も眩せんばかりに壯麗と精細とを極む。斯の如き極美なる日本美術の紀念物が一大政變に際して無言に存在し得たるは誠に偶然の幸福といふべし、寺院の所在僻遠なると、又法親王の住はれたるとは此寺院が破壞破滅の災厄を免かるゝに於て大に與りて力ありしならん。而して此美麗なる寺院は將軍が其祖先を奉祀するため參詣をなすべき靈地たるなり。

本堂は間口七間奥行四間半にして床に疊を敷き壁に彫刻を施し其天井の壯麗なる建戸の蒔繪の美なる何れも技術の美妙を極め趣味津々たるもののみ多し。

言語は單に不完全なる印象を與ふるに過ぎざるものにして、到底實物を目擊するの力に比すべくもあらず。且又繪畫を以て之を觀察するにも劣るものとせば、余が起述し來る處も決して明瞭なる觀念を與ふること能はざりしなるべし。況んや總ての事物歐人の耳目に遠き者多き日本の記事なるおや其成効の少き固より余の期する處なり。

偖眞鍮の金具を打ちたる白塗の寺院、珍奇なる彫刻ある屋根、巧に著色し且自然的に製作せられし禽獸、草木を鏤めたる圓柱綠色なる植物を透かし彫とせる欄干、青、黃、金色を帶べる鳥獸の飾り等余等歐人の目には餘りに彩色に過ぎ趣味却て索然たるの感あれども、然も其祭壇の裝飾古雅素穩調和甚だ宜しきを得たるは吾人に再び爽快の念を抱かしむるに足るなり。

石垣及石階は蒸然たる草苔に蔽はれ、青銅は皆蒼然たる古色を帶び、彩色鮮やかなる彫刻物は繁茂せる森林を後景として白色及金色の寺院は鬱乎たる樹木の間に隱影し其觀の美なる言語に絕し實に仙境神界の中に在るの想ひあらしむ。

森林中なる寺院に參詣せむには誰人も靴を脫して巡覽すべき規定なり、偖墓標は青銅より成り、禮拜所の先にありて老松の森林に圍まれ、墓標の周圍なる石欄は苔に蔽はれて之を飾り、青銅製の鳥形燈籠は古色蒼然として幽趣多し。墓標の形は簡單にして其色素朴に形又大に過ぎず小に失せず、其金屬の實質は美麗にして然も確牢なれば、爲めに人をして尊重すべき感覺を抱かしむ。斯く其の形狀彩色の特色あらざるも人皆著名の人の墳墓なることを觀取し得べし。墓標の形狀は圓壔狀にして之を蔽へる屋根は方形の青銅を以て作り、項には鍍金せる尖頭を有す、金屬を以て作りたる圓き柩は巨大の鍵によりて長へに封鎖せらる、墓標屹立する處四方閒として聲なく閑雅幽靜なるは恰も浮世の辛苦を經て平和と安靜とが長へに其中に籠れるを意味するが如き趣あり、苟も來りて此墓所を訪ふ者は德川家の基礎を立てたる偉人の靈場に立ちて低回去る能はざるの感あらむ。

殺伐なる數年の戰爭の後、國民の爲めに確然たる政綱を立てたる此大政治家に對する古今の尊敬はあらゆる製作物の上に發揮せられて吾人無關係の觀客にも亦極めて深き感慨を喚起せしむ。

日光には尙一の觀ざる可らざるもの卽ち三代將軍家光の墓標あるを以て、吾人はこゝに割愛して更に他に赴かざるを得ず。余等は夥しき階段を下りて幽邃なる並木道を降り行けば繁茂せる森林、夥多の寺院、鳥居禮拜堂等の建物を經て谿間に出で、家光を祀れる宮殿に達するを得べし。道路の兩側には數多の社寺ありて、各社皆祀神ありと雖も一々枚擧せんは勞して益なき事、然も玆に留意すべきは日光は千年の昔より神道及佛敎の靈地として人の訪へる處にして、今日の如き美觀ある以前より日本人の信仰心は既に日光に注がれしかば、前記の諸神も亦此地を撰びて祀られしなり政略に富める德川將軍家が何故に最も有名なる二人の墓地を此處に特定せるか其意蓋し又玆に存するなり。

三代將軍家光の廟所は彩色及彫刻の粲爛たる點に就ては前に記述せる家康の廟所に比するの類に

非れども、其頗る簡潔にして且四境の光景の美なる却て一層の壯觀を呈す。卽ち廟所は森々たる高嶽の上にありて之に達せんには高き數階の石徑を登らざる可からず、而して此石階中には又彫刻を施せる奇形の宏壯なる殿堂を點綴す、余等若し石造の水槽若しくは灰綠色の苔に包まれたる夥多の石欄石階等を愛觀しつゝ徐々として登り進まば、遂に本堂に達するを得べし本堂前面の庭には又靑銅の燈籠連りて其數擧て數ふべからず。

本堂は之を家康の堂宇に比すれば彩色工作共に簡單平易なり、されど其個々に就きて觀察せば其彫刻の精美にして亦企及すべからざるものなるを知るべく、殆ど自然物を見るの感ありて又其着色せる夥多の鳥獸緣色の格子、建具天井等は皆妙工の手に成るものなり、金具、定紋及獻納の巨大なる燈籠等は總て靑銅にて作りたるものなれば、永く保存し得べし廟所の全體は森々たる深山の壯大なる後景を有するを以て恰も一幅の畫帖を見るが如く、又此殿堂の幽邃閑雅なるの故を以て美術的感想を與ふること家康の廟所に優れりとする者あるなり。

此本堂の裏面に當りて老樹の間に一層靜肅なる靈所あり、是れ三代將軍家光の墳墓なり其形狀家康の墳墓の如く圓壔形にして靑銅を以て作り、其光澤は家康の墓標よりも一層黑色を帶びたり。四境の幽靜老樹の梢を渡る風の音、苔に包まれたる筧の水の音皆是れ家康の靈場に於けると等しく畏敬と敬神の念とを誘起せざるはなし。

凡幽玄なる地に在りて無心に天地を觀する時は夢幻の感想を惹起するものなるが、余も有名なる日光の靈地に入りて其神々しき幽趣に醉ひしが、暫くして漸く我に復り遂に此仙境を去りたり、春寒未だ去らずして和洋折衷の此旗亭に滯在せる者は僅かに余等一行のみなれば、余等は外出して空氣の新鮮なる綠林の中に悠々たること數日、此處を愛すること甚だ深く又技術品の蒐集者として頗る幸福を得たるが如く、古代に屬する歷史的の諸品を容易に余が手に入るゝを得たり先づ其一二を言はゞ實に美麗を極めし刺繡の幅廣々して形奇なるもの、中央に皇室の菊花御紋章を縫ひ德川家の定紋葵を以て其周圍を飾りし者は佛法の遺品として購求するを得、又經文を入るゝ黑漆の稍長き箱にて皇室の御紋章と將軍家の紋章を金蒔繪としたるをも購求し得たり、又金銀及靑銅を以て象眼せる花瓶をも得たれどこは前の二者に比して取り出で言ふ可き品に非ざるなり。

斯く皇室の御紋章と將軍家の定紋とを併せ用ひられし所以は皇統より出で給ひし法親王の日光に居住し給ひしに由るものにして、余が知る所によれば斯の如き御紋章を附するは日光寺院の法主の爲め製作せる品に限るゝが如し。偖余等日光を去るの前日翠綠掬すべき谿間に添へる閑靜なる並樹に散策せしが、忽ちにして非常なる降雨と膚を刺すが如き寒冷の爲め男體山の登山は固より中禪寺及湯本等へ豫定の旅行を皆中止せり。

中禪寺は既に述べたる如く近年東京よりの避暑地となり往時極めて寂寥なりし湖は今や無數の別

墅を以て圍繞せらる、又湯本は硫黄泉の溫泉場にして日本人は好んで硫黄泉に浴す、此附近は頗る景色に富み高さ七八千尺なる日光群山へ登遊する者夥多しきを以て湯本は是等登山者の休憩場として頗る適當なる處とす。

時に余は職務上歸京せざるを得ざるに至りしが、余が日光の遊覽は唯一回に止まりて再遊の機を得ざりしは實に余の遺憾とする所なり、余等の歸京せし頃は社交は尙ほ盛なる時節にして殊に比利賓の西班牙副王日本に來遊して公式によりて參內し給へり。

次週の會合中殊に取立ていふべきは總理大臣黑田伯が彌生社に催せる角闘會にして、本會に招待せられたる來賓は數千名の上にのぼり、角觝は四面の開放せる木造建に於て行はれ、四面に棧敷を構へ數千の客の觀覽に供せり。本會の來會者は宮殿下を始めとし國務大臣、外交官、及東京に居住する外國人等にして、日本人其數甚だ多く人力車夫に至る迄傍觀せり。

此角觝には東京角力の最も强き者を集めたる筈なりしが、脂肪多く肥大なる角觝の外觀は歐羅巴人をして喜ばしむるや否やは余の判定すべからざる處なれど、其巧妙なる技術に至りては實に滿足すべきものありたり。公衆は不偏不黨にして（日本服の晴衣を着て）皆靜坐して見物し、呼出人は角觝の對手を呼出し音樂は此技には絶えて用ひることなし。

余等は午後一時より六時まで座にありしがやがて食堂は開かれ夜に入りて總理大臣は特に撰び置ける數名の親近者を召し來賓に餘興を添へたり黑田伯は歐洲語に通ぜざる人なりしが、此集會の席上に於て國是に就き言明する處ありき。

御狩獵

角觝會の次日朝六時より數名の宮內官は　皇帝陛下の命を奉じて狩獵を催せり。之に召されたる人々は吉井宮內次官を初とし、藤波主馬頭米田侍從、長崎式部官、吉井伯令息及小生にして、溫厚なる山口主獵局長は之が先導者たり。一行は馬車に乘じて出發し堤上を走ること約一時間半にして豫ねて定めし場所に達せしが、本日主獵の隨行者は既にこゝに聚合し居たり。二艘の小舟は日光を防がんが爲め屋形を設けて河岸に繫ぎありしが、其一隻を食堂とし他を以て乘船と定めたり。偖鷹匠師は半手袋を嵌めし手の上に鷹を載せ、小舟に乘じて流れを下り、棒を以て藪を打つに禽類は之に驚きて婆娑として舞ひ立つを、鷹は忽ち之を追ひて巧に捕獲するを常とす。其鷹の高く空中に舞ひ上り、且矢よりも早く獲物を追ひかくる有樣は實に言ふ可らざる壯觀なり。又御狩獵場の小者は遠く沼澤を涉りて鷹の跡を追ひ、其把握せる鳥を離し取るなり。此地域は禽類に富めること實に類ひ稀なりと云ふべし。午後三時頃に至りて最早本日の目的を達したれば、それより舟中にて午餐を喫し歸途人力車に乘じて市街砂塵中を歸り來れり。

地久節及びザクセンワイマールの王子ベルンハルト殿下の御來朝

五月二十八日は日本國　皇后陛下の御誕辰なれば、男子は小禮服にて參內し、婦人は鄭重恭敬なる禮容を以て祝賀を申述ぶるを例とす。横濱に在住する獨逸の園藝師ボヱーメル氏の製作せる花籠を呈したるに、　皇后陛下の御受納ありしは有り難きことなりけり。

此日宮中にありしに寒氣甚だしく加ふるに風ありしかば、余は重き感冒に罹り、爲めにザクセン、ワイマールの王子ベルンハルト殿下の爲めに開かれたる多くの宴會卽ち宮中の御宴を初めとし公使館の午餐會ベルン、ハルト殿下の午餐會等に出席すること能はざりしは甚だ遺憾なり。

殿下の御催は鹿鳴館にて開かれしが、これ殿下は　日本皇帝陛下の賓客として同館に御滯在ありし故なり。此御宴は端なくも禮法上爭議の動機となりしが、當時東京にては屢かゝることの特徵ありしは不思議なることと云ふ可し。

墺地利の代理公使ヘンリーシーボルト男爵は前に伊太利公使マルチノ氏より招待を受け居りしが、今殿下の招待を受けんが爲め之を謝絕し、又他の招待を受けたる人々もシーボルト男爵の例に傚ひてマルチノ氏の招待を辭したり。兩國の勢力ある代表者間に重大なる不和を生ずるに至りしは

是れ全く此偶然の出來事の結果なりとす。

此月中フリードリヒ皇帝の御容體に關する歐洲よりの來傳は痛く失望すべきものありて、皇帝の御姑にあたらせらるゝビクトリヤ女王陛下はシャルロッテンブルクに危篤なる陛下を訪問せられしが、是れ今世最後の會見なりき斯の如き悲哀の中に千八百八十八年の五月を過ぎしが余等日本滯在もこゝに滿一年となりたり。

千百八百八十八年（明治二十一年）六月初旬ワイマール王子歡迎の爲め屢諸種の會合ありしが、王子は同月四日を以て隨行員フックス、ノルドホッフ男爵と共に日光に遊べり。是より先殿下は日本近衞隊の演習を參觀し騎兵の襲擊演習中文官服にて乘り廻はされたり。

王子及隨行者は世界週遊の旅中なれば、何れも軍服を著されざりしに獨逸代理公使デルンベルヒ男爵は後備騎兵士官なるに拘らず王子の例に傚ひて同じく軍服を著せずして陪觀せしかば普魯亞の士官は大に其穩當ならざるを非難せり偖殿下及隨行員は其歸國に先ちて各高級の勳章を受領せり。

ヘンリー、フヲン、オルレアン殿下

ベルン、ハルド殿下の出發さるゝや、其後間もなく（六月十一日）ヘンリー、フヲン、オルレアン王子は入京せられたり。

余は是に於て王子の資格を質問せられしが、王子はカルトンス公の男にして、丁抹の王妃ワルデマール殿下の兄弟なれば、王室と同等の王子なりと記憶する旨返答せり。

往時君主たりし歐洲王公諸家の位置及權利關係に就ては日本宮廷及同政府の極めて念慮を勞せし處にして、斯の如き次第に勢力の失墜する王公諸家を國賓として厚待するも、日本の政治上關係に緊要なる結果を生ずる所以を見ざるを以てなり、然るに結局は嘗て日本に來遊せるナポレオン殿下と同じく、宮中の謁見に引續き午餐を供せらるゝことゝなり其待遇すべて前例に倣ふことゝ決定せり。

オルレアン王子は白耳義公使によりて宮中に紹介せられ、宮中の午餐會にも佛蘭西公使は全く顧られざりしが、余も亦王子に會合の機を得ざりしを以て、王子の御人格に就きては何事も申さゞれども、承れば王子にはワイマルの王子と同じく勳一等旭日章を賜りたり。

フリードリヒ皇帝の崩御

明くれば六月の十五日、我がフリードリヒ三世皇帝陛下は崩御せられたり。余等は多年皇太子殿下及び同妃殿下の知遇を辱ふせるを以て、陛下の訃音に接して其悲しみ一層身にしめり。世人も皆同陛下の爲めに哀悼せること勿論にして、日本宮中に於かせられてもキルヘルム皇帝崩御の際と同じく宮中喪を仰せ出されたり。

日本在留の獨逸國民は東京に集會を開きて皇太子殿下卽ち今のキルヘルム二世皇帝陛下へ弔電を發せんことを決議し、其本文は眞に熱情を以て國民一般の哀悼を表明せるものなるが、此電文は東京に最も永く居住せる獨逸人の一人ワグネル老人と言へる東京高等工業學校教授の起草せしものなり。

フリードリヒ皇帝の哀悼會は獨逸公使館に於て擧行せられしが、其會合者の範圍より言はゞ、キルヘルム一世皇帝の爲め數週前に執行せられし哀悼會より其規模遙に小なりしが、一般の儀式及感情に於ては敢て前回の嚴肅に讓らざるなり。

該會擧行の準備は獨逸皇太子殿下の宮中に御信任ありし現代理公使の令妹デルンベルヒ令孃の指導により、伊太利の技術家キヨソネ氏の斡旋によりて成り、牧師シュミーデル氏は哀悼の演說をなしゝが、當時俄かに催せる暑氣には人々大に困難を感じたり。偖該會に參列の爲め横濱より來れる副領事フヨン、シエルリング氏と軍醫クレエル博士とは公使館員及ブランケンブルヒ中佐と共に此夜余が宅に會談せるが意氣皆消沈の有樣なりき。斯る悲哀の中に六月も將に終らんとして暑氣ますゝ加はりしかば、其月の二十八日余が妻は四人の子供、保姆、子守、料理人及小使等を引連れ、行李家具の數々を携へ數匹の猫をも一行に加へ箱根をさして出發したり。

既に借り入れ置ける箱根湖邊の日本家には器具の設備殆どなく、余等に必要缺くべからざる器具は總て携帶せざるを得ざるが故、日本別莊への引移りはなか〳〵容易の業にあらず、余は當時皇室典範の起稿中なりしかば、暑中賜暇までに其稿を終らんと獨り東京に止まりたり。

日本皇室典範

宮內省及宮廷は前記の階級制及皇太后の御地位に付き取調べ中なりしが、露國公使シエキツチエ氏は露國にては皇太后は皇后の上席を占むるといふは事實なりやとて宮內省より意見を徵せられ、公使は之に對して唯然りとの返答をなせる趣を語られり。

抑々斯く東京駐劄の外交官たるものに宮廷內部の制度を直接諮洵するが如きは、日本宮中に於ける惡しき舊慣といはざるべからず。余は將に下に述ぶる二理由を以て其不當なる所以を示さんとす。第一には外交官中己の國の宮廷內の制度を知る者は甚だ少かるべく、實は又是等の事は其職務上の利益に關すること少なければ、是等の事を知る者は殆ど絕無なりと云ふ可く、第二には宮廷內部の事柄に就て異邦外交官に嘴を入れしむるの便宜を與ふるものなれば、何れより考ふるも其不可なるを知るべしと。されど余は遂に歐洲の制度に通ぜざる宮內大臣の斯の如き不都合を矯正することを能はざりき。七月の初旬には宮內省に於て皇室典範に關する諸種の事務も既にほゞ終了したれば、余は每朝乘馬を試み、東京附近の風光を賞し、夜は又友人の家を訪ひつゝ同月初旬の數日を過せり。或る夜余はピゴツト氏を訪ひ、種々物語れるに、氏は固と總理大臣の顧問官として遙々英國より招聘されしが、氏が來朝の際には黑田伯は伊藤伯に代りて就職し、氏は新大臣の顧問たることゝなりてそれがため其就職も延引し、且黑田伯は外國人を好まざる傾きありて其秘書官たる伊東己代治氏も亦成るべくピゴツト氏を遠くる故、氏の失望益大にして氏の勢力愈縮少せる由語られしが、斯の如き經驗は日本政府の顧問官に招聘せられたる諸外國人の屢嘗むる所なり。

此頃クルツプ會社の代表者イルグネル中佐とアルムストロング會社の代表者たるデネマルク人ミユンステル船長との間には日本政府の注文をおのれ所屬の會社に引受けんとて互に競爭しけるが、余はイルグネル中佐には獨逸公使館に於てミユンステル船長には露國公使館に於て會見せしことあり。

當時露國には揮發油を外にして其他には外國へ輸出すべき程の工業あらざりしが、露國公使は露國は何の勢力をも日本政府に及ぼすことを勉めず、又武官をも將た文官をも日本政府の招聘に應せしめんとも願はざる代りには、他國の外交官と異なりて何の偏する所もなければ、日本に對しては唯全然中立を確守し我利をのみ得るが如き態度をなさゞることを得べしと常に言明するを聞きたり。

公使の斯く言明するにも關らず公使は其快腕を以て日本政府のかねてより露國に對して抱ける疑惑を芟除し、極東に於ける其危險なる潮勢を抑止すること能はざりき。

七月五日宮廷は復歐洲の新客を迎へたり。即ちトスカナのフヘルヂナンド、レオポルド大侯爵は墺地利の弗列憂艦（フレガッテ）に乘じて來遊せられたり。侯爵は頗る春秋に富ませられ、此時漸く二十歳を數へ、日本宮室よりは特別の待遇を受けられ、延遼館に宿所を定められ、當時來遊せられたる普魯亞のフリードリヒ、レオポルド王子及び、露國のアレキサンデル、ミヒヤエルウツチ大公爵と同樣の儀式を以て迎へられたり。

大侯爵に賜へる午餐の饗應には墺地利代理公使ヘンリー、シーボルド男爵及大侯爵の日本御滯在中、私に隨伴せる同國總領事横濱フォン、クライトネル氏の外尚十五人以上の同國海軍士官及幼年學校の同窓者も大侯爵の希望によりて招待せられたり。大侯爵は深く日本宮室の事情を認めたる上、斯く其希望を述べしなるべし。七月十一日各官署其暑中休暇を賜はりて官吏は二個月間の休養を得たり、是に於て余は翌十二日を以て出發し箱根に住へる家族の方に赴きたり。

同月十五日東北地方の磐梯山爆裂せり。同山は久しく死火山なればその噴火は實に大驚愕を惹起し、同地方の溫泉に浴せし多數の人々は爲に其生命を失へり。又或は之に關聯せる現象ならんか、當時日本全國大雨降り續きて、わが茅葺の別莊は夜毎に雨漏りて余等及小兒等の床を濕ふし大に困難を感ぜしたれば、余等は屋根より漏り來る水を受けんが爲め座敷に手桶を置くに至りしが、床に敷ける疊（余等は往々此上に眠れる）は漸く濕氣を帶びて軟く、又鼠族は濕潤に恐れ屋外に出でず、爲めに余等の寢室よりも悉く之を驅逐し難かりき。斯く困難せるにも拘らず余等は自ら慰むるに勉めて不快を感せず、此際村人の承諾を得て湖畔に余等專用の水浴舍を建築せんと木竹を集めて之が經營に時日を過したり。

箱根湖

美麗なる湖は蒼々たる高山を以て圍まれ、其連峰の間より日本國土の標號たる富士の白玉憂然として空中に轉じ、遠望一帶の光景はチロル若くはバイエルン山湖の景色に酷似し、亦アーヘン湖或はコツヘルワルヘン湖等に彷彿たり。老松は參差として絕壁に懸り、湖上波平にして碧鏡の如く、綠樹影沈んで魚は枝上に躍る、別に潺湲たる小川の石に呀くありて邃古の石階苔長へに蒸し、人之を登る時は古き寺院に達するを得べし。而して殊に其景の美なるを箱根權現と稱する寺院の附近とす。

湖の一方幽邃なる高地に歐風建築の樹間に隱影するを見る。是れ箱根離宮なり。恨むらくは技術の趣味缺くる處ありて四邊の光景に副はざるを、又離宮の後方綠濃かなる老杉の間遠望恰も繪畫の

如き元箱根村の一邊に赤色なる木架の鳥居の見ゆるは是れ箱根權現の鳥居なるべし。此地四周極めて閑にして、殊に三千尺の高さを有するを以て甚だ避暑の保養に適し蒼蠅蚊虻に惱む事なく、實に歐洲高地の風土を玆に聯想し來らざるを得ざるなり。偖此湖水の一半を繞れる良好なる石築道路は將軍時代に成りしものにして、箱根村より峠を越えて遠く小田原の平地に通ぜり。其他の道路は辛ふじて駄馬を通ずるに過ぎず。箱根より漸く急峻となり、これより幾多の嶮坂を越えて熱海の海岸に達することを得。

湖の彼岸に達せんには船を以てすべく、余等は往々碧波に浮びて姥子に遊び、其村内に湧出する溫泉に浴せしことあり、浴場の建物は四面圍壁なく、屋根は木柱に支へられ、方形の石槽其下に在り、溫き否寧ろ熱湯の如き溫泉は常に其槽中に溢れ滿てり、余等散策の爲め屢々此姥子に來りしが、若き男女の浴客は石の緣に腰打掛けて恰も神の作りし其まゝなる姿にて嬉々として談笑す、然るに余等外國人を見るや直に湯中に躍り入り首のみ差延べ珍しげに脉め居るなり。

此浴槽の周圍の廣衢には物置の如き建物ありて浴客の衣類を脱するに便す、又特別なる浴客は例へば余等の如き歐人は旅館に就きて各自個々の浴室を占有するを得、旅館は概ね木造にして頗る簡單なる構造なれども數多の客室を有するもの多し。

長時間歩行せる後此溫泉に浴して往々得難き休養を感ずることあれども、少しく注意を要するは此溫泉の溫度にして、日本人に適當なる（攝氏四十度）には達せざれど、余等の爲めには却て冷却せざるを得ざるなり。

余は此愛すべき地に在ること六週間なりしが、家族は殆どその二倍の久しきに亘り、此間常に林間山谷を跋渉し或は湖水に游泳を試み、或は高嶺攀登を試み或は遙に渺々たる蒼海を眺め常に愉快に日を送りたり。

東天倒に白扇を懸けたるが如き幽玄なる富士山は遙に其山頭を延ばして紺碧なる箱根の連峰を越え、遠く可憐なる湖水を下瞰するの風情ありて夕陽は常に其背後に春けり。余等は其風光の美なるに感じ屢々之に攀登せんことを願ひ只管好機の熟するを待てり。

蘆の湯は此地に隣れる溫泉場にして又道程四里を行かば余が屢々賞讃せる宮の下に達するを得べし。而して此等の路次は風色甚だ變化多く、先づ路傍の生岩に巨大なる佛像を彫めるを見、之を過ぎて山路を登れば愈大なる高地に達し玆にアルベン（歐洲の高山）の空氣を吸ふ可く、綠草は莚を布けるが如く花薫り蝶戯れ松杉樅柏大氣を香はしむ豈亦人間の樂地ならずや。前の如き地を行くこと二時硫黄溫泉を以て有名なる蘆の湯村に達するを得べし。此地には病客の來り浴するもの多けれども、當時未だ浴室の構造旅館の準備整はず野人農夫を客とするに過ぎざりき。

此地より宮の下に到る道路は白晝猶薄暗き鬱林にして、其間漱々として流るゝ溪澗激しては白沫

を飛ばし降りては瀑布となり其光景莊嚴を極む、既にして宮の下に達すれば歐風の旅館住むに快く溫暖なる鑛泉浴するに飽かず、余等往くこと數回にして益々其慕ふべきを知る、況んや又東京よりして知友の來り遊ぶ者多く、殊に日曜の休暇に於て談笑愈々酣なるをや。

偖余等箱根にありて尙散策を試むべき地は湖の後背なる大地嶽峠なりとす。抑此地に至らんには蘆の湯を過ぎて步行すべく、姥子を通じて舟行すべし。余等先づ山路を辿り行かば初めは平原、森林を過ぎり、漸く高きに登るに至りて遂に人家なき山上に出で、突兀たる石路を進まば玆に山頂の平地に達す、是れ所謂大地嶽にして硫黃の蒸氣は大氣に充ち白煙は飈々として吾人の前後上下を覆はん。時に余等が案內者は曰ふ、人若し猥に其步を移さば地或は陷落墜下し地下の犧牲となることあらんと、要するに此地の光景到る處幽且閑なり、今此噴出せる火口を巡り沸騰せる小流を涉りて四方の風光を眺望すれば、其奇觀美景人をして轉た其勞を思はざらしむ。箱根連峰は急に崩れ落ちて深く一帶の平野をなす、其平野の彼方に見ゆるは幽玄なる芙蓉峰頂は雲上に突出して高く蒼空に聳え、南は海に限られ北は中央山脈に圍繞せらる。余等は從來富士山を箱根山中より見たるのみなりしが、今や嶄然として一萬四千尺の巨嶽を見るに及んで大に其壯大に驚けり。

前記の如き散策或は又蒼林を通過して熱海峠熱海西塔寺(サイトウジ)等の如き地に杖を曳けば、眺望絕佳にして無上の愉快を感せざることなく此等の勝區は日として余等を遊覽に誘出せざることなし。

湖の淺瀨の近傍を選びて建設したる余等が浴舍の近傍に善良なる水浴場ありて深綠色なる溫き鑛泉及其地の流注常に適度の溫を保ち、吾人及小兒等に取りて實に忘る可らざる好個の保養場あり。されど遊泳に熟達せざる者は浴場の柵以外に泳ぎ出すべからず、是よりは湖底急に深く百九十米突以上に達するを以て極めて注意するを要す。

余等の知己なる英國の代理公使レ、ペール、トレンチ氏は横濱の友人ドツズ氏夫妻と共に避暑の爲め此地に來り、余等の近傍に日本風の家屋を賃し居たるを以て、余等は屢々船を同うして淸遊を試むるを得たり。歐洲の余が知人より紹介狀を持參せるズエルモント騎兵大尉及びオツペンハイム男爵の如き、或は世界周遊を企てたるライン地方の二友人の如き何れも余等を箱根に訪問したるを以て余等は爲めに一段の興を覺えたり。

富士登山

墺地利の人ボツヘ男爵は常に旅行登山等を好み其性溫和なる人なるが、アルペン服（山衣）を着て箱根を登攀し來り、頻に富士登山を勸誘せられしかば、余も亦喜んで其勸めに應じたり。是に於て我從僕伊藤に旅行の準備を一任し、我が洗濯人も其望みによりて人足の一人に加はり、都合四人の人足に命じ、余等の食料、毛布、外套等を脊負はせ玆に三日半の旅程に就きたり。

その日朝まだき余等は湖の彼岸より馬に跨りて萩原に着し、更に裾を流るゝ川に沿へる森林の端に達せり。須山の方面より登りしに路傍には尙數多の休息所あり、數里の間は勾配も緩にして尙ほ愉快なりき此等の休息所は山頂に達するまでに十二個所ありて、余等は其一に宿り、翌朝二時まで休養したりしが、屋内極めて狹隘にして余等一行は漸く手足を伸して横臥するを得たるのみ。伊藤は少しも疲勞せる樣子なく晩餐の際茶を煎じて出せしが、余等頗る美味を感じたり。平地にては勿論箱根に於てすら猶夏日の暑氣を覺ゆるに此山上に在りては著しく冷氣を感ずるに至れり。

されば翌朝三時頃此休息所を出發せし時、余等の毛織服は大にその用をなせしが、道は此より嶮峻となり午後に至りては余等の疲勞せること實に言語に絶したり。余等が宿舍の後方より富士はさながら灰山となり、之を辿り登らんとするに歩々灰燼足脚を沒して進むが如く退くが如く玆に惱めること一時餘ポッヘ氏と余とは唯其一身をさへ登すに苦みしが、余等が人足と從僕とは重き荷物を背負へるを以て其困難如何と推せしに、彼等の顏色は依然として喜ばしげに互に手を取り助け合ひつゝ荷物を負して登攀せり。辛ふじて脆き灰燼の域を通過し絶頂に近き平地に達せしに、長へに積れる雪之を蓋ひ更に進んで岸崖に至りしがこはギッエー（埃及國の村の名有名なる高塔あり）の三角塔の如く高からずと雖も而も嶮峻は之に讓らざるなり。

ポッヘ男爵は熟練なる登山家なるを以て此障碍物を踏破して山頂への道に出で、余の之に續かんことを鼓舞したり。斯の如くにして余等は日沒には未だ十分の時間を有する頃を以て（斯く日沒前に着するは甚だ必要なるなり）目的地たる絶頂に達するを得たりしが、玆に一驚を喫したるは斯の如き高山の絶頂に古き立派なる神社ありて、神官玆に住し其他又道者の宿舍たる茶亭あること是なり。此等の設備は皆西暦八百六年（大同元年）佛教渡來の時より傳はりありしなり。

道者の登山には必ず各合（各合とは一合目より九合目に至る各合を總稱す）の休憩所に立寄りて漸次に絶頂に達する習ひなれど、斯の如きは之によりて生ずる時間の損失を別問題とするも更に大なる不利益あるべし。卽ち各休憩所は此處に宿れる道者と不潔の蟲類とを以て溢るゝばかりなれば、到底愉快なる休憩はなし得られざる事是なり。されど余等は此貴き山の絶頂なる茶亭に於て携帶せる食料を喫し充分の休息を得たるを以て頗る愉快なるを得たり。

休憩の後余等は直に頂上を巡覽せしが突然山の兩側を見るを得たるは余の吃驚せる處にして、卽ち一方には山の外面を望み、一方には山の内側を伺ひ、其内望外觀共に雄大なるには唯々嘆賞の外あらざりしなり。

驚く可し此大山の狹き岩片より成らんとは、絶頂の中央は廣大なる漏斗狀を爲せる直下七百尺の噴火口にして、周圍は幅狹き岩石を以て輪狀を爲せり。余の聞きたる日本の神話によれば、此山には富士淺間（ふじせんげん）と稱する女性の山神住めりとの事なるが、山頂は恰もその女神の中空なる齒の如き形狀

をなせり、而して兩懸崖の間なる岩背は誠に狹隘なるを以て此上に立ちて一方には氷雪に覆はれたる噴火口の絶壁を見、他方には海陸に直下せる絶壁を眺むれば人皆將に眩暈せんとす。

此狹隘なる岩背を周覽せんには約二時間を費し、偶々足下より起れる雲に遮らるゝことありと雖も、到る處眺望絶佳なるを見るなり。日本海は渺々として足下に連り、森林丘陵多き海岸には宿驛村落點綴して眼界左右に展開す、又陸上を眺むれば日本の大部を望觀すべく、山紫は水明に接し、綠田は蒼林に交り、社閣は市村に連り、又東北には東京市街糢糊として例へば家の海の如し。富士は周圍の山峰中獨り兀然として峙つを以て山下に立ちて四方を眺むれば全土の觀恰も凸彫の地圖を見るが如し。

更に眼を噴火口内に轉すれば、其四圍の懸崖絶壁には深底に到る曲折の小徑あり、又深底よりは白煙濛々として蒸騰し富岳成立の母ともいふべき噴火作用は千七百七年（寶永四年）の噴火以來未だ全く消失せしにあらざることを告げんとするが如し。

太陽は中部日本の蒼々たる山蔭に沒せしが、忽ち氷の如き寒風起りしかば余等は彼の茶亭に難を避けたり。余が老實なる從者伊藤は盛に火を焚きて食を調へ、余等一同之を賞味し後携帶せる毛布に包まれ此茶亭に夜を明かしたりしが、溫度は氷點以下に降下し膚を刺すが如き寒冷は遂に之を防ぎ得ざりき。此山頂の宿りは余等一行以外に尙數人ありしかど、歐洲人は唯余等兩人のみ。

早朝宿舍を出でゝ旭日の昇るを見しが、暫時にして富士を圍める雲霧は愈々濃厚となり遂日光を遮りたり。余等は生涯再び斯の如き光景を見るの機會なかるべしと思ひしかば、此壯大なる山岳の絶頂を去るに忍びざるの思ひありき。

歸途は杖の力を借りて北方より下れり、岩角を過ぎてよりは嶮阻なる灰砂道に出てしが、山麓の森林に至るまでは一帶に灰燼にして前日杖によりて登れる時は數時間を費せしに、今や十五分間を以て險崖を降れり。荷を負ひし余等の從者も亦歡呼として山麓なる須走驛に到着せしかば一行此處に行を停めて急行の疲勞を醫せり。偖翌日は馬に乘じて豐饒なる富士の沃野を過ぎ有名なる長尾峠に向へり、長尾峠よりは繪畫の如き箱根近傍の風光を望觀すべし余等はこゝに午餐を喫し薄暮湖岸に達して遂に箱根に歸れり。

富士登山は困難なる旅行なりと雖も而も纖弱なる婦人にして猶且之を企てり。健康なる有髯の男子宜しく此高山に登りて天闕を叩かんことを試みよ。

九月の空秋氣淸く日々快晴なりしかば諸方面へ散策を企て又熱海地方に遊び勉めて箱根滯在中を愉快に過さんことを欲したり。

此週中に於てフリードリヒ皇帝御病中の記事、マツケンヂー事件ヰルヘルム皇帝陛下のセント、ペテルスブルヒ、ストツクホルム及コーペンハーゲンの訪問等は歐洲よりの各便によりて喧傳し、

世人の注意を喚起せり。九月十一日暑中休暇終りたれば東京に歸りしが再び宮内省の事務は開始せられぬ。

余が妻は尙ほ小兒と共に同月二十日まで箱根に滯在せしが、歸期に先だち雨季に入りしを以て降雨甚だしく大に濕氣を帶ぶるに至れり。茅葺の家屋は濕氣を凌ぐに難き故遂に箱根の滯在を不快ならしめたり。而して當時は市街すらも猶泥濘を免れざりき。

露國公使館書記官スパイエル氏はテーランに轉任を命ぜられしが、其夫人は氣輕なる人なりし爲め人々其去るを惜みしが、獨逸人社會は總領事ドクトル、シユミツトーレダの新任したる爲一人を增加せり。シユミツトーレダ氏はバタビヤより日本へ轉任の爲め横濱へ來れるにて余等は此交易に滿足せり。（スパイエル去りてシユミツトーレダの入りしを云ふ）

此頃東京に濕氣多かりし爲め余は重き感冒に罹り永く全癒せざるに苦めり。

宮内省に於ける事務

九月二十四日宮内省に於て最高官の正服より馭者の制服に至るまで總て宮中に在る者の服裝に關し會議を開けり。之に與れる人は宮内大臣を始とし、式部長、大膳大夫、主馬頭等にして又香川皇后宮大夫の細密なる注意を以て討議に與れるも亦忘るべからざるなり。

是より數週間間斷なく討議を開きしが、歐洲より取寄せたる普魯亞、墺地利、露西亞、英吉利、伊太利等の宮中に於ける禮服及制服等の彩色せる描畫到着し、專ら之を基礎として討議せられたり。禮服に關する問題は速に解決せられ、普魯亞宮廷に用ひらるゝブランデンブルヒ服の式に從ひ之に從來使用し來りし日本の紋章を刺繡する事となりしが唯帽章の色に就ては頗る趣味ある議論出でたり。

日本に於ける初めの歐洲風禮服は專ら英國海軍の將校服を模せるものなりしが、英國海陸軍に於てはハノーバー家の卽位以來ストウアルト家の白色帽章と區別せんが爲、單に黑色を使用せる事は人のよく知る所にして、ストウアルト黨保護者及びジャコビン黨は白色帽章を附し、ハノーバージョージ帝の軍を攻めたり。此由緒によりて英國が黑色帽章を用ふることは一千八百六十八年（明治元年）日本が其帽章を定むるに當りて毫も知らざりし所にして、日本にては唯悉くハノーバー英國風の黑色帽章を附するに至れり。されば今日本特有の帽章を制定せざるべからずとて、宮内省にて協議を凝らし千八百八十八年（明治廿一年）　皇帝陛下の勅裁により今日の如き紅白の帽章を海陸武官及文官の禮服に用ふることゝなれり。

又宮廷内の制服は墺地利宮廷に使用せらるゝものの如く、濃綠色を採用せられ、笹緣は金色に胴衣及半褲（ツキ　ズボン）は普魯亞宮廷に於ける如く薔薇色の毛絨を用ひて靴下は白色とし、又略服は稍簡單なるも

のを用ひ猶先驅、馬丁、馭者等主馬寮に屬する者も之と同一の服色を採用する事となれり。

ゲルマン時代の歐洲諸侯は獵者と共に馬車を驅りて外出することあり、日本朝廷の御儀式より云へば斯の如きは頗る違例に屬すれども、玆に亦　陛下の陪從者の爲獵服を制定せられたり。　皇帝陛下には從來常に二人の馭者を召させられたる由なれば、余は驚きて何故に左樣の儀に出でしかと問ひしに、乙の馭者は豫備にして甲に故障起りたるとき之に代るべき準備なりと、若し其儀なるときは普通の馬車にては獵官の坐すべき席なく御儀式用の馬車なる時のみ漸くその後方に獵官及馬丁を立たしむるを得べし。

我友山口主獵局長は此際其官職相當なる大禮服を拜領せり。學習院及幼年學校生徒も扈從の役を仰付けらるゝ時は美麗なる服裝を供給せらるゝことゝなれり。されど余の既に提議せる侍從武官任命の件は未だ成功するに至らず、余は是を以ておそれながら　皇帝陛下の斯の如き改新をば好ませ給はざるによるならんと信せり。元來日本の帝權は其基礎を軍事に有せずして神道に有し、余の聞く所によれば我が國（獨逸）の如き形式の大本營は未だ日本には設置せられざるとか、思ふに之に要する費用の如きも或は宮廷より支出するを好まざるにもよるならんか。

上記の協議は數週間に亘り滿足なる効果を得たるを以て、此服裝規定は認可せられ日本產の材料を以て日本の職工により調製せらるゝ事となれり。

偖又數年來建築工事中なりし新皇居へ一千八百八十九年（明治廿二年）の新春と共に御移轉相成るべき御豫定に付、出來得る限り其工事を急がせたり。

フリードリヒ皇帝の日誌を公にせられたりとの獨逸よりの報知は再び極東の注意を惹起したり。

宮內省の事務は愈々進涉し、十月には伯林朝廷に於けるが如き新年の參內の制規及次第書の飜譯註解及實地の採用に忙はしかりき。

日本にては古來の習慣として新年は三日間朝早くより午後遲くまで參內引續くを以て、　兩陛下には頗る御煩勞の御事なれば、此等の御儀式を當世に適する樣御模樣替あらんことを希望せるなり。

佛國公使シアン、キウイツツ氏の到着

佛國公使シアンキウイツツ氏は先きに歸國して十六個月間夫人と共に滯歐せしが、今又再び來京せるは日本政府及び外交界に於て注意を要する一事件なるべし。

氏は頗る外交の經驗に富み彼の有名なる同姓の小說家とは近き姻戚にして、同じく露領ポーランド國ウクライネの出生なるが、佛國領事として東洋に在りしこと久しく、遂に今日の地位に上進し、熱心に佛國思潮を日本に注入せんと勉めたり。公使は一般のポーランド人と同じく獨逸語に精通せる人なるが、而も獨逸思想の東京に盛なるを見て心甚だ快からず、殊に軍隊組織が日本の軍政上に

傳播するはシアンキウイツツ公使の最も不快とせる所にして、又獨逸人が顧問官として宮中に目立ちたる地位を占むるも大に喜ばざる所なるべし。前世紀の第八十年紀に（明治五年普佛戰爭）於ける獨佛の反目は佛國の英國に於けるよりも一層甚だしかりしが、今尚往々其根跡を認む、此月（十月）六日皇女御誕生の祝賀會宮中に催せられしが余は所勞によりて參列することを得ざりき。

横須賀に於ける戰鬪艦の進水式

此頃　皇帝陛下には屢々御不豫に渡らせられ爲に十月十五日横須賀海軍造船所に擧行せられたる新造戰鬪艦の進水式にも御親臨これなく、皇后陛下は　皇帝陛下の御代理として横濱より軍艦浪速に御乘艦あらせられ、横須賀に赴かせられたり。

貴紳貴夫人と共に數ならぬ余等も　皇后陛下の供奉を仰付られたり。該艦は頗る善良なる軍艦にして巨大なるクルップ砲を備へ、各部の重量權衡を得、進行に際して動搖することなし。初め少しく降雨ありしがやがて晴れ上るや　皇后陛下は女官を從へ甲板上に御出御遊ばされ此見事なる光景を御覽せられ、内外の臣僚皆　陛下の例の如き溫雅慈愛なる御有樣を拜したり。

御乘艦は四隻の水雷艇に伴はれて景色めでたき海岸を傳ひて横須賀に近づきぬ。此處に十四隻より成る英國艦隊は港外に二分列して敬意を表し、甲板には赤き服裝の乘組員整列し君が代の樂は各艦より響けり。又祝砲は百雷の落つるが如く大洋に響き渡り、水夫は帆架に登りて萬歲を唱へ英國々旗は　皇后陛下に敬意を表して引き下され、滿目の光景總て莊嚴と嚴肅とを極めたり。嗚呼是れ大英國が數十年前に於て既に極東の海岸に有したる地位の一現象なり、　皇后陛下には横須賀に於て英國水師提督及び參謀官に酒食を賜はり、進水式の際謁見を仰せ付けられたり。

進水式は大兵力を有する數隻の日本軍艦の補助によりて陸を沿ふて行はれ、無數の群集は其後を追ふて走りたり、此新造軍艦は海軍顧問官ベルチイン氏（佛蘭西人）の計畫によりて日本造船所にて建造されたるものなり。

午後天氣快晴となり浪速艦は四隻の水雷艇に伴はれて歸航し、日英の艦隊は再び敬意を表し恰も凱旋式の如き有樣なりき。

偖宮中にては　皇帝陛下が御すぐれ遊ばざゝる爲め此等出發式に御臨幸あらせられざるを一方ならざる遺憾として語り合ひたり。

ゲンフ條約成立二十五年祭

十月下旬日本に於ても亦ゲンフ赤十字條約成立二十五年祭を上野公園に擧行し、　皇后陛下小松宮殿下の御臨場あり、會するもの無慮二千人にして頗る盛大なりき。赤十字條約は其目的とする所

負傷兵士の看護にありて、日本政府も亦數年前之に加盟し同盟の一員として平等の權利義務を取得したりしが、是れ東亞に在りて該條約に加盟せる嚆矢にして且唯一の國たり。

偖余等の斡旋を以て伯林ハルレル、ラテナウ商會に注文せる外務大臣大隈伯夫人及高倉典侍の洋裝裝飾品は恰も此日を以て汽船ゲネラルウエルデル號にて齎らされ大に夫人の賞讃を得たり。

日本婦人勳章

十一月一日宮中に於て當時東京に居住遊ばされたる有栖川宮熾仁親王、同威仁親王、伏見宮、小松宮、北白川宮五妃殿下に新制定の婦人勳章授與式を行はせらる。是等勳章に關しても亦歐洲に劣らざらんことを勉めしものならんが、恨むらくは綬の色及徽章とも美術思想ある歐洲人の意を滿足せしむること能はざるなり。而して此御儀式に與れるは單に近臣のみにして、余等外國人は關係せざりしを以て其詳細を知るに由なかりき。

十一月二日歐洲よりの來電は露國帝室御用列車のカウカズスよりセントペテルスブルヒへ歸らるゝ、途上、ボルキに於て脫線し爲に四輛破壞せりとの事を報じ來りしが、皇族は不思議にも御災難を免れたりと。

露國公使シエーウイツチは外務大臣ギールスより正式の通報に接したれば、直に日本國外務大臣大隈伯へ移牒せり。大隈外相は又之を宮中に傳奏せしを以て　皇帝皇后兩陛下には直にペテルスブルヒの宮廷へ向け慰問の御親電を發せられ、土方宮內大臣は直に露國公使館に刺を通したり。余は嘗て斯の如き場合には通報の迅速なることの中に大なる尊敬の意の含まれたる事を言へりしを以て、皇室及宮內大臣は斯く迅速に慰問せられしならん。

大隈伯は歐洲的見解に服せざるの人なれば、露國公使の移牒に接するも毫も意に介せず、爲めに公使を怒らしむるに至りぬ。シエーヴイツチ氏は宮內大臣土方子爵を訪問し、大臣中今回の事件の爲め訪問せられしは實に子爵一人なりといひ、大隈伯の無禮を憤懣したるを以て、宮中にては大に注意され、各國務大臣に御意を傳へられしかば、總理大臣を始め一同折揃ひてシエーヴイツチ氏を訪問し、露國皇室の御災難に付哀悼の意を表する由を申し出でたり。露國公使が此時の言動は日本の宮中及政府に明に一印象を附したりしが、爲めに露國を愛せしむるの念を生せしとは思はれざるなり。

天長節

次日卽ち十一月三日は日本　皇帝陛下の御降誕日なるを以て、例年の如く祝賀し奉り、早朝より。東京近衞聯隊の觀兵式擧行せられ、余は寒冷なるにも關らず妻及小兒等を伴ひて陪觀せり。此

觀兵式に於て日本の軍隊が普國式に教練せられ一層の進歩を來せしを見るべし。

右の後、宮城に參內謁見の式ありて、最高官に賜饌あること昨年の天長節の條に述べたるが如し、又其夜外務大臣の催に係る舞踏會は鹿鳴館に於て盛大に擧行せられたり。

各宮殿下妃殿下を初とし各大臣は夫人令孃を伴ひ其他各國外交官等、一言を以て之を言へば東京官海の人士は悉く參會せり。室は飾るに美麗なる花及び熱帶の奇異なる植物を以てし、煌々たる電燈其上を照らし、室內頗る莊嚴なりしが、唯一の缺點は暖氣を取るの設備不完全なること是なり。室內は氷の如き寒さなるに貴婦人は悉く舞踏服を裝ひたれば此寒冷に苦まされしこと勿論なり。

此夜、余は日本出立の事に付き宮內省にては如何に決定せしかを確めんことを思ひ出せり。余は既に久しき以前より故國に居住を求めんとするの念を有せしが、わが甥ローベルト、フヲン、ヘルムホルツよりザクセンーワイマール國オルラ河の沿岸ノイシユタツト附近にアルンシヤウクと稱する邸第の賣却さるゝ由を申越したれば、ワイマールの大公爵領內に居住せんは誠に心地よき事ならむとの考を起せり。されば余は數日前電報を以て此購賣を確定したるを以て宮內大臣がわが二個年の契約を改締せむとするや否やは余の成るべく速に知らんと欲する所なり。

此事に關しては長崎氏を煩はし、曾て口頭にて宮內大臣の意向をたづねたるに、此舞踏會にて同氏より口頭の返答ありて、政府は我契約を改締せざるべしとのことを確むるを得、余は直に同席せる獨逸代理公使デルンベルヒ氏及其令妹に之を傳へしに、二人は容易に之を信ぜざりき。されど余は男爵が自己の見解に從ひて日本政府に契約の改締を强ゆるが如き事なからんことを切望せり。是れ相互の意志十分に一致し好みてなせる契約に非れば、後日に殘るべき程の奏効を期し難く且歐洲人との契約は通常一期を以て終局とし更に改締繼續するの例少きを以てなり。

昭宮殿下の御不快及薨去

昭宮殿下は　今上皇帝陛下の御末の皇子におはせられしが、十一月七日御齒痛と關聯せる腦膜炎に罹らせらる。皇太子殿下には殊に御壯健にましませど其他の諸皇子は皆此病を以て薨去せられ既記の五攝家及諸大名家等貴族の間に多く行はるゝ病にして一般の國民には之に罹る者少し。

十一月八日秋氣麗にして觀菊會を禁苑に催せられたり。其模樣は先に述べたる昨年の御會と異る所なく余等は玆に再び盛會に逢ひ、皇室の御幕を以て蔽はれたる花檀に美麗大輪なる菊花を拜觀するを得たり。

此日秋氣淸く天に一點の雲なく、金烏長閑に禁苑の常盤木を照す軍樂隊は嘲喨たる音樂を奏し招待せられたる士女は皆盛裝して喜悅滿面に溢れ、御園の彼方此方を逍遙す內外の臣僚仰慕歡喜の中心は皇室の御座にして陪覽者の然るべき者には慈愛の御言葉を賜はり又例によりて立食を賜ひしか

ば一同歡を盡して退散せり。

十一月十二日御痛はしくも昭宮殿下薨去遊ばさる。

磐梯山に登る

十一月十四日デルンベルヒ令孃は諸人惜別の中に東京を去りしかば、孃の朋友知己等は午前六時停車場に見送りて各々其途上恙なからんことを祈りたり。孃の出立後は公使館は固より一般の獨人間に何となく物足らぬ心地を生じしが、目に見えてそを物憂かりしは兄弟なる男爵なりき。

男爵は勿論余等に於ても孃の歸國の爲憂悶の情禁ぜざりしを以て、少しく鬱悶を散ぜんとし男爵と余とはミューラー、ベーラ氏を誘ひ東京より北方に當れる磐梯山に登らむと決し例の忠實なる伊藤に命じてその準備をなさしめ、十七日午前六時半東京を出發し、正午頃本宮停車場に着し、こゝより人力を雇ひ山方（ヤマガタ）に至りこれより上りて同夜十時頃千九百尺の高地猪苗代に到着せり。

十八日より磐梯山に登り始めしが、渺々たる猪苗代の湖水を瞰下する眺望は誠に見事なる風光なり。

參差たる山峰の彼方には西暦一千八百八十八年（明治二十一年）七月十五日の噴火によりて生じたる巨大の噴火口ありて沸騰せる熱湯は溢るゝばかり之に滿ち、蒸氣濛々として昇騰し、見渡す限り荒廢に歸し、數多の浴場を有したる山景は砂漠の如き峭壁と化し去り、新に山麓に無數の湖生じ悉く熱湯に充たさる周圍の山嶺には白雪皚々として太陽の光澤に燦爛たる樣その壯觀言語に絶せり。

余等今火山脈の上に立ちて自然力の發現を考へ胸中實に穩かならざるものあり、何となればたとへ人間密集の地と雖も、焉ぞ又此の如き現象の日に起らざるを保すべけん。日本歷史の記する所は實に今日の警戒たるべし、見よ今の富士山は往古に於て周圍の海洋に餘地を與へんが爲め一夜にして突立せりと、されば日々地震の起る地にありてはよし東京に於てすらも斯の如き變轉の起ることなしと斷言するを得ざるべし。

磐梯山の破裂に次で大地震のありしは一千八百九十四年（明治廿七年）にして被害亦少からざりしは人の知る所なり。余等の日本に滯在せる間も時々地震ありて家屋震動し狼狽せること少からず、されど記すべき程の不幸の生ぜる事なし。磐梯山の破裂は重に水蒸氣の作用にして、沸騰せる水蒸氣は山の一部分を破りて出で、豐饒なる低地に泥土を押流して濁水の沼澤と化せしめ、點々殘存せる田莊は恰も此沼澤中の島嶼の如き觀を呈す噴火作用には必ず伴ふ可き火山石灰燼等は更に無く恰も破裂せる蒸氣鑵の如き有樣なり。

余等は斯の如き荒廢の中を跋涉せし後再び猪苗代に宿り、次日本宮を過ぎて白河に著し此地に一

泊せり同月二十日愉快なる旅行を了へて再び東京に入れり。

加賀屋敷に於ける園遊會

歸京後は又屢々集會に參列せり、その重なるものを擧ぐれば西郷伯の舞踏會、芝公園内八代洲町なる獨逸法律學校の試業、加賀屋敷に於ける園遊會等にして、特筆すべきは加賀邸の會合なり。此邸第は加賀侯舊來の住邸にして、今日加賀家の主人たる前田侯爵は日本第一流の貴族なり。又侯の令室は年尚若くして容姿頗る麗はしく鍋島家の息女なりと云ふ。

前田侯爵は殊に賢明の聞えある貴族と云ふには非れど、其社交上に於ける地位に應じて本日來會せる賓客は殆ど舊日本の華を集めたるものなり。

本會には有栖川宮威仁親王殿下（その妃殿下は前田侯の御妹なり）を始めとし、各宮殿下御一同列席し給ひ、又多數の貴紳は日本服にて來會されしが、德川、淺野、伊達、鍋島等の古來有名なる紋章を其背に負ひ給へり。數人の外交官及其他の外國人も此等内國人の宴會に與りたり。

日本音樂は所々の亭榭より嚠喨として響き渡り、茶菓酒食など十分に供せられ、殊に花檀の花は滿開にして人目を喜ばしめ興味津々として時の移るを知らず外出し給ふこと甚だ稀なる貴賓と共に此半日を經過したり。

獨逸學者及建築師

前田侯所有地の一方にありて東京帝國大學ありて、此地も亦加賀屋敷と稱し、其構造は煉瓦造なれども、頗る簡單にして其周圍に廣き庭園あり。又其構へ内には教授の官舍ありてラトゲン、ワイプレヒト、エツゲルト、ミヒヤエリス、兩デルブリユツク、ハウスクネヒト、ベルツ、スクリツバ等余等の同國人たる知己此處に居住せり。

ベルツ、スクリツバ二博士の專心從事せる醫科大學及病院は加賀屋敷が東京大學に變せし初めより此處に招聘せられたる教授の記事に關聯して特筆すべきは余等の滯在當時に恰も日本に在りて勵精せる獨逸の建築師にて彼等は殆ど獨逸人の一團體を作れり。

余は日本へ赴任の途次ベルリンのエンデ氏エルベルフヘルドのフホイグト氏及伯林のアルドルフ、シユテツヒミユーラー氏に會し大に喜びしが、其後又チーツエ夫妻ザール氏及びチユーリンゲンのムテジウス氏と相識りチーツエ夫人は屢々巧なる唱歌によりて同國人を娛ませけり。

一千八百八十五年（明治十八年）以來日本政府は歐風の大建築設計を伯林なるエンテ、ベツクマン會社に委託したるを以て、エンデ氏は自身日本に來りて其建設地の檢分を行へり。

エンデ樞密顧問は此旅行に於て工藝上の智識を得たること多かりしが、東京に於ての彼の調査は

全く失望に歸したり。卽ち日本政府より指定されたる建築地は石造の家屋を立つるに足る丈の堅牢なる土壤にあらず、且議事堂及諸官省を充分滿足なる歐洲風建築になさんには其建築費用の莫大なるを以て、政府は大に之に躊躇せり。されど遂に試驗基礎を建つる事となり總建築の重量丈の重さを加へて試驗せり。

此地は元來貴族の宮殿ありし處にして、後練兵場となれる地なるが、此試驗的建築物は水の湧き出づる深さ迄に落下せしかば石造建築の計畫は遂に中止するに至れり。

帝國議會の議事堂はステグミユーラ氏の指揮の下に木造に建築せられしが、悲しむべし後年火災の爲烏有に歸せり。

此頃日本には政治上新築の止むを得ざる建築物數多なりしが、余等の滯在中此等は悉く獨逸人に委托せらるゝこととならんことを希望せしが、獨逸建築家の一團は余等の歸國後も永く日本に止まれり。

一千八百九十四年（明治廿七年）東京地方の大地震に當りて獨逸公使館、鹿鳴館其他數多の石造家屋其犧牲となりしを以て、茲に又再築の爲め獨逸建築家との新協議開かるべき事となれり。伊太利の彫金家キヨソネ氏の人柄は既に記載せる事ありしが、氏は此時に當り日本在留外國技術家中在りて尤も優秀なる手腕を顯はせり、元來氏は日本紙幣の銅版を調製するため招聘せられたる人にして、其技術は日本人の趣味に適し、頗るよく其任務を果したり。斯く專ら政府の印刷局に就職せしかば、同局の印刷術及型紙製造其他の範圍に於ける發達は氏の功勞として謝すべきものなり。氏の在京中數年間に蒐集せる日本青銅器は其數夥しく、之が爲特に家屋を建築して之に藏し、此外絹帛繪畫、金物、漆器、象牙、彫刻、刀劍等多し。日本に於ける一外國人の所有物としては實に豐富なる工藝品の蒐集なりしが、一千八百九十六年（明治廿九年）故郷ゲヌア市に此等を遺品として不歸の客となれり。

余等は氏の厚誼を得て屢々趣味ある機會に接するを得たるは常に深謝せる所なりき。

是より月末までは數回横濱に往復して露國水師提督シユミツト氏及其美麗なる令夫人を訪ひ、英國水師提督サー、ネール、サルモン氏夫妻及令孃を尋ね、又佛國水師提督を訪ひ或は世界漫遊者ロツゲントルフ伯爵夫妻、及カムプベル將軍ナイト白耳義公使若くは箱根にて面識せるドツズ氏等を訪問せり。

蘇格蘭のサン、アンドレー連の舞踏會は横濱の公會堂に催せられ、是等に屬する人々は皆參會し又獨逸領事館のシユミツト、レダ氏、シエリング氏及東京より美しき若き舞踏者其席に連れり。此舞踏者中にて最も人の目を引きしはダイベル孃にして孃は其後佛國公使館附武官陸軍大尉ラブリー子爵と結婚せり。

普魯亞のフォン、ブランケンブルク少佐は陸軍省顧問官たりしが、その歸朝に際して十二月中旬同國人間には屢々會合を催し或は余が家に於て又猶東亞協會に於て會し其他猶數會ありき。

慈善會

十二月六日慈善會は鹿鳴館に於て開催せられしが、皇太后陛下には日本風の御盛裝を以て御親臨相成りしが(陛下は決して外國風の御衣を召されざる事は普く人の知る處なり)三宮夫人を除くの外歐洲人は一人も之に與るを得ざりき。是れ皇太后陛下には保守的御傾向を有せられしを以てなり。

皇太后陛下の還御遊ばされし後會場を公開せしが、其成功は人々をして驚嘆せしめたり。　皇后陛下には慈善會の紀念として余が妻に銀の菓子箱を下賜せられしが、箱は方形にして三重の蓋を有し、御紋章の菊花を鏤め、裝飾華麗なる日本古代の作品にて余は現今卷煙草入に使用するに見る人毎にその精巧なるに驚かざるはなし。

此時土方宮內大臣は長崎氏と共に京都皇城の視察に赴きしを以て、余も此機に乘じて鎌倉への旅行を企て、尙その附近なる江の島に行けり。江の島は海岸近くに在りて全島一の神社の境內にして無數の朱塗の小社は鬱蒼たる老樹に覆はれ、參詣者の休憩所となり四方靑波渺々として遙に富士に對し展望絕佳なり。東京よりは容易に達するを得べく且到る處に高等なる旅館あり優遊甚だ愉快なるを以て此地は外人の日本滯在中の一樂境たるなり。

耶蘇降誕祭

耶蘇降誕日は吾等例年の祭日にして昨年の如く友人を招待して祝ひしが、此夜來られたるは露國公使シェーヴイッチ氏一家及高倉、香川、北島等の宮中女官其他獨逸人數名なり、妻及小兒は本年も亦　皇后陛下より御下賜品を拜受して大に欣喜せり。小兒は歐洲風の手遊品を妻は華麗なる絹の机掛二枚を下賜せられたり、此机掛は宮中にて御使用せられし品にして、綠及紅の地に大なる花輪の模樣あり四隅は黃金の菊花を以て飾られたり。

日本に於ける此第二回の降誕祭に於て昨年と同一の針葉樹を用ひしが、是れ日本園藝師の特技にして此樹は始め根を附して堀り我家に持參せしが、千八百八十八年（明治廿一年）の正月に復た庭園に下したるに能く夏に堪へ、此度再び堀り採りて之を用ひ後又々庭園に下したるが故今日尙其處に繁茂せるならん。

降誕祭後余はミヒヤエリス、ラトゲン、デルブリユック三氏と共に宮の下に滯在し、晴快に乘じて風景美なる山中を散策し悠々數日を過せり。　皇后陛下は耶蘇降誕祭にも御下賜品ありて我小兒は非常の喜びなりしに、今復、羽根、羽子板等を賜はりて又喜びを重ねたり。日本には四季それぞ

れの遊戯ありて秋には凧（？）新年には羽子其他毬遊等あり。

新春には殊に兒童及母兒の祭ありて母兒の祭には雛人形を飾り男子の生れたる家に於ては彩色せる紙製の鯉を立てゝ祝ふ、總て日本人は相互に贈物を爲す親しき傾向を有し此二節句の如きも知己は美麗なる品物を贈答してその交情を溫むるなり。

千八百八十九年（明治廿二年）の新年御祝

新年の祝賀は午前九時半より宮中にて行はれたり、日本の慣例より言へば遲きに過ぐる嫌あれど歐洲人の見解には尤も適當なる時なり。

宮内大臣は余等に此拜賀式には　兩陛下に陪從す可しとの命ありと傳へければ、余等は午前に行はれし國務大臣及樞密顧問官の拜賀の節御後に陪從し、又公使、貴族、傭外國人等の午後の拜賀式にも陪從せり、余は此際普魯亞國侍從の服裝を着用せり。

國務大臣及公使參内の節婦人極めて稀にして外務大臣大隈伯の如きは禮法に慣れざるを以て外交官接待の際陪席せざりしが、其結果一方には婦人の參内少きの故を以て宮中の不滿を來し一方には當該大臣不參の故を以て外交官の不快を釀せり。

偖前件に付き婦人の辯解は舊御殿に於て拜賀の式あるときは假の不潔なる廻廊にて新らしき服裝を汚す憂ある故なりとのことなるが、是れ實は日中に化粧して出るを好まざるより出でたる遁辭に過ぎざるなり。而して大隈伯には辯解の辭なく唯歐洲の禮法に疎なるの故を以て斯く不正當の振舞せりと見做さるゝの止むを得ざるに至れり。

此年賀式に付き又余等が　日本皇帝陛下に扈從せることに付最も不快の念を抱きしは佛國公使シアンキウイッツ氏にして、同夫人の如きは此日出席せざりしにも關はらず大に不滿なりきと。

外交官參賀の際外務大臣及一人の貴婦人も宮中に陪せざりしとの故を以て外交團體の不滿はその筆頭者によりて言明せられたるにより、之に關して早速調査せるに、外交官の婦人は布哇國代理公使イルビン氏の夫人（日本人）の外一人も參賀せざりし事明となれり、故に若し兩者の間に不滿なる事ありとせばそは寧ろ日本宮中の方にありと云はざるべからず。

次日は武官の拜賀式に陪從せしが日本にては當時既に普魯亞王國今日の如く武官の拜賀に付特別なる日を設けられたり。

一月五日　陛下の御前にて舊御殿に新年の御宴を開かれしが皇族各宮殿下を始め各官衙の首長之に陪席せり。

新皇居への遷御